
陛下の専属様

月詠 桔梗鑒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陛下の専属様

【Nコード】

N8111T

【作者名】

月詠 桔梗鑾

【あらすじ】

鍵なんてとつくに壊れてるからこの森から出ていけるけどあえて言う！

『やってらんないわ!!』

生きた歴史的な私ですが何か？

不満なら昔私を軟禁？したハゲに言いなさい

ついてこい？

嫌よ、私は魔女じゃない（嘘だけど！！）

帝国アルファジュールの若き帝王を守れと言われ無理矢理軟禁？生活を終えた魔女は
1年の期限を条件に城に上がる

「お前は逃がさない」
キヤー、この人危険よ危険！！

帝国の陛下と魔女のラブコメ時々シリアス物語

プロローグ

帝国歴1625年

魔女は生きた歴史

そんな言葉から次々と魔女は沢山の帝国騎士に捕えられた

いつの日か、世界に多くいた魔女は数を減らし
捕えられた魔女も帰ってくることは無かった・・・

生きた歴史

それは純潔の魔女のみ有する万有の力

北の魔女は怒り己の力を命に代えて巨大な氷の城を作り眠りについた
東の魔女は嘆き己の力を命に代えて巨大な海を作り眠りについた
西の魔女は哀れ己の力を命に代えて大地を5つに割り眠りについた
南の魔女は笑い己の力を命に代えて焔で燃やし砂と変えて眠りにつ
いた

純潔の魔女は世界の均衡を守る柱だったはずなのに・・・
眠った今、この国は支えを失い消滅するのみ

魔女の長を失ったほかの魔女は途方に暮れる
魔女を大切にしてきた人々は悲しみ帝王を憎んだ

帝王は慌てた

このままでは私はこの国を追放されてしまう、と。

そんな時誰かが言った

——中央の魔女はどこだ・・・と

帝王はこの声にひどく喜んだように笑った
そして人々の罵声の前に立ちこう言い放った

——中央の魔女は生きている。私が彼女を守っている・・・

人々はそれを帝王の薄汚れた嘘だと思った
すると帝王は人々に、信用できないのであれば明日彼女をこの場で
見せよう・・・と。

次の日同じ場所から帝王ともう一人、帝王に支えられた少女が出て
きた

その少女を見た人々は喜んだ

少女は銀の艶やかな髪を持ち、蒼銀の瞳をしていたからだ
純潔の魔女の証である銀の色を持って・・・

そして次々と帝王に賛美の言葉を浴びせた
帝王はひどく終止笑顔だった・・・

この時人々は気づいていない
その少女の瞳には暗く陰っていて心が無いことに
支えられた手には重い鎖があったことに

中央の魔女は捕えられていた
暗い誰も寄り付かない森の離塔に

帝王以外は外せない呪いのかかった鎖を嵌められて一人閉じ込められた

それから100年

中央の魔女は森にいと語り継がれ歴代帝王と帝国の宰相、帝王が定めた女官以外誰一人として許可なく立ち入ることを禁じられた

人々はその森を《永久の籠》と名付けた
魔女が暮らす神聖な場所として……

しかし、突如帝国と東の国との戦争が始まった
いつしか戦争は肥大化し、皆生きていくことに精一杯で魔女のことを忘れてしまった

勿論《永久の籠》も戦地となり数多の屍を残した

4人の魔女が眠りについて300年が経った
魔女の存在は人々から消え失せあの森は、入ったものは出てこれなくなるという恐ろしい森と称され誰も立ち入らなかった……

生きた歴史とはどういう意味だろうか
それは……そのままだった

『んはー平和平和』

誰も立ち寄らない森の一角で一人の女が木の幹に座り遠くにある街を眺めていた

その女の容姿は銀髪で蒼銀の瞳だった・・・

まだ少しあどけない表情を残すもそれは美しい女が一人
女は赤い実を食べながらにへらと気の抜けた顔をしている

そう、魔女は死なない

一定の基準を満たさなければ死なない半不死身の存在だから

生きた歴史とは魔女の命の重さを意味した

魔女は死なない

人の何倍もの命があるからこそ人の知らない過去を、歴史を知っている

今では伝説となった剣も宝も魔女はどこにあるのか知っている
生きた歴史

最後の一人である中央の魔女は未だ生きていた
その誰も寄り付かない森で・・・

300年経った今、歴史が動きだそうとしている
歴代帝王でも抜きん出ている賢帝が魔女を探し始めた

そのことをまだこの女は知る由もなく・・・
再び人の世に出ることを望まない小さな魔女はこの後その身に何が
起こるかを想像しないまま物語は始まる

プロローグ（後書き）

小説投稿するの凄く大変、やり方がわからない（笑）
プロローグから長文ですいません（・|・|）

発見その1

「陛下からは魔女と思わしき人は全て連れてくるようにと賜っております。貴方にも来ていただきましょうか」

「いや、私ふつーの人間だから！？魔女だなんておとぎ話みたいな存在じゃないから行きたくありません！！」

その人はとても爽やかな笑顔で私を諭そうとしている

いやー攫われる！！

私は帝国なんか行きたく無いわよー！！！！

事の始まりは数時間前に遡る

私はいつものように大きな木の幹に座ってバナナって赤い実を食べながら遠くにある街を見ていた

「そろそろ石売りに行こうかなー、明日雨なんですよ？」

「うん、明日は雨を降らすって水龍様が言ってたから」

私の声に反応するようにフヨフヨと水の塊が人の形に変わって話しかけてくる

何もないのに浮いていられるソレは水の精霊

水龍さんの眷属で、よく私にいつ雨が降るのかーとか、水分が多い果物を時々届けてくれるんだ

とっても可愛くてキュートな生まれて50年しか経ってない私には赤子同然の彼女

（石最近高値で売れるのよね）

私は月に2回、この森で取れた天然の魔石を売ってお金を得ている
一昔前はこの森で取れたもの（まあ、薬草然り．．．果物然り）を売ったりしてたけど、それをするとう街の人たちがなんか強くなっちゃうみたいだからね、やめたの。

今は皆魔力を持っている

昔じゃ考えられないねー、魔力があるだけで重宝されてたもんなあ

私がこの森で拾う石には天然の魔力がしみ込んでいて、それを魔力を持った人たちがこの石を利用して武器にしたりしている

この森は精霊が沢山いるからとっても空気が澄んでいて純粹で濃厚な魔力がある

外見はどんよりしてて未恐ろしいけどねー

中は本当に綺麗で幻想的だと思うんだ！

でもフツウの人間が入るとこの魔力に耐え切れなくて死んじゃうみたい

たまーにいるんだよね、度胸試しとかに来る連中がだから苦しませて死なない程度で外に出してる

まーどこに出したかはわからないけど生きてるだけありがたいと思わないとね

んで、その天然の魔石はそこら辺に売ってる人工的に魔力を注いだやつじゃなくて精霊の力そのものが入っているからより強くて長持ちするんだってー

「雨が降ると面倒だから今日行こうかなー、教えてくれてありがとうね！」

（昨日のうちに魔石集めておいてよかったよかった）

肩にかけているポシェットには赤、琥珀、緑、水色、黄色の石があ

る。それを確認して私は木の幹から飛び降りてまだ上に漂っている
水の精霊に手を振り足早にその森を抜けた

発見その2（前書き）

長いから2回に分けてみた↑
とりあえずお粗末な文ですが読んでくだされば嬉しいです

発見その2

森から街まで大体歩いて2日

いや、明日雨降るから歩いてなんて行かないからね？

すぐ近くに小さな村があるけれどそこに売りに行こうとは思はない、彼らは魔石を必要としていないからね。そう簡単にあげられるような安い品でもないからやっぱり売りに行くのは帝国のど真ん中にある街でしょ！

「おー、ミアちゃんまたお使いかい？気を付けて行くんだよー」

山を少し下りれば村のおじさんが私に話しかけてきた

私は山の麓^{ふもと}近くに住んでいておばあちゃんと2人暮らしてことにしているの。

実際は麓じゃなくて山の中だし、勿論おばあちゃんなんていないけどねー

最初は山の麓に住んでいるって言ったら驚かれたけど何回も売りに街へ行くようになったら自然と村の人に話しかけてもらえるようになったの

今じゃ村の人みーんな知ってるんだからね

「ありがとー！！今度おじさんの家にお野菜届けに行くからねー」

そう言っておじさんに手を振れば笑って返してくれた

（おじさんもまだまだ元気だなあ）

人間なんて私が瞬きすればもう年を取っちゃうものだけど、温かいのは変わらない

村から少し離れたところで私は次の作業を開始する

2日、走っても1日半かかることを私はわざわざしない

（だって魔女ですからー）

一人拳を上げる私・・・ちよつとみじめね

「おーい！！フウくん！！」

命一杯息を吸い込んで大きな声で空に向かって叫べば突如私頭上に強風が巻き起こる

「俺はフウじゃねー！！フレインだつーの！！このオバサン！！」

カッチーン

強風の中から現れたのは緑色の髪と目をした20歳ぐらいの青年で・・・まあ156歳なだけだね。

見た目は精霊だから本当に綺麗でかつこいいけど中身はまだまだ子供私をオバサンと言っ生意気な餓鬼だ

（まだ317歳だけどね！！）

「・・・フウ君、今回も街までお願いね？」

私は大人だからね、冷静な対処を・・・

「はっ、オバサンだから足腰弱いもんなーしょーがねーなー」

冷静な対処を・・・

「俺若いし？オバサンは大変だろーから」

冷静な・・・

「特別に今回もオバサンを運んでやるよ！」

れいせ・・・

「な、オバサ「それ以上オバサンを連呼しないでくれる！？オバサンじゃないし！まだ十分若いから！オバサンってすごいのよ！？世の中オバサンいないと噂話が立たなくて経済に影響を及ぼしたりしないから世界はどんどん悪い方向に向かうの！わかる？つまりオバサンっていろんな意味で世界ですんごく大切なの！！」・・・あ、うん。わかったごめん」

私がオバサンについて説明したらフウ君は若干、と言うよりかなり引き攣った顔で謝ってきた

（ああ、やらかしてしまったわ）

「お喋りはここまでにして、よろしくね。フウ君」

「だからおれはフレイ．．いや行こうか」

何を思ったのか台詞をやめて脱力した表情で私の手を握った
私もその手を握れば一陣の風が吹いて．．．次の瞬間には跡形も
なくなっただかのように私たちは消えた

フワツとした浮遊感を感じた後に地面に足がついた感覚があった
（やっぱりこの移動が一番早い）

「ありがとフウ君。帰りはいつも通り歩いて帰るからね」

手を放しフウ君を見ればややテレ顔でオウと言って消えてしまった

風は早い

だから移動手段には凄く適している

そうやっていつも私は彼の力でこんなに早く石を売りにこれるんだ

定番の店で石を売って帰ろうとしていた矢先、前のほうでなにやら騒がしくなってきた

（これは近寄らない方がいいねー、なんか危ない。私は巻き込まれないで自由に生きる！）

最後のほうは意味が分からないけど、とりあえず私は明るい表道ではなく少し暗い裏道を選んだ

裏道って少し暗いけど結構いい道なんだよねー

たまに人が倒れてて厄介だけどー……うわ、厄介ことだ

前方には俯いて倒れている人が一人

え、マジでこのパターンか、嫌だな厄介ことが目の前に……

（こう云う類い好きじゃないんだよー、あーもう!!）

え、声をかける？

まーさーかー!!

人が倒れてるのはしょうがない、裏道だもん
私は善人じゃないからね

通り過ぎますよー全力でね！！

ドキドキする鼓動を無理矢理抑えて私はその俯いている人を見ない
ように足早にその人を横切ろうとした・・・そう、横切りたかつ
たよ！！

（なんで掴んでるんですか！？私何もしてないじゃん！！つか離れ
ねえ！？どんだけ力あるんだよ、そんだけあるなら自分のお家に帰
ってええ！！）

「離してください」

「あなたは私を放って置くつもりですか？」

そいつは私の足をつかんだまま未だ俯いている
ひーん、怖いよー

「離してください」

「私を見殺しにするのですか」

（いや、そんなに握力あって死ぬ間際とかありえないからね！？冗
談敵しいよこの人、てかマジ私に何をしてほしいんだ！！）

「離して「見殺しにするのですか！？」・・・どうしてほしいので
しょうか」

ガツと勢いよく顔をあげられて私もう何も言えません
怖すぎですお兄さん・・・

顔は薄暗くてもわかるくらい綺麗な顔立ちをしている

この場には似つかない顔

「いや、探し物をしていまして。」

グイッと今度は腕を掴まれる

体が前に倒れて必然的にそいつに跨るような恰好になった

するとその男は私の目を見て驚いたような表情をした

「貴女、銀の所持者ですか？」

そんなことを言っているなんて知らず

私の心情は．．．はーずかしい！！
近い近い近い！

「．．．銀？」

でも顔には出しません、私大人ですから

それにしても銀とは．．．魔女アイテムではないか

魔女Ⅱ銀を所持するもの

あ、髪とか眼のことだね

私は一応隠しているんだけどねえ

「そう、あなたの眼．．．薄ら銀が入っている。」

「っん．．．」

うあああ！！なんだ今の声！？ありが．．．いやナシでしょ！！

耳元で囁くように話されて思わず変な声が出てしまった

身じろぎしても離してくれない

「あの、本当に離してください」

そう言えば今度はあっさり離してくれた
なんだなんだ？

「ふう．．．すみません。先ほどから失礼ですが後をつけさせて
いただきました。貴方魔石を売っていましたから少々気になりまして
．．。貴方を重要保護対象の魔女候補であることを今確認したので
これから私と一緒にあるところまで来てくださいますか？」

そいつは立ち上がり爽やかな笑みで私に言った
重要保護対象．．．いつできたそんなの！！

「陛下からは魔女と思わしき人は全て連れてくるようにと賜って
おります。貴方にも来ていただきましょうか」

「いや、私ふつーの人間だから！？魔女だなんておとぎ話みたいな
存在じゃないから行きたくありません！！」

こうして冒頭に戻ります．．．

発見その2（後書き）

こんなんでいいのかな・・・？（笑）

1 対面その1（前書き）

サブタイトル付けるの面倒!!と言っていた私の好きな作家さんの
気持ち・・・早4話目にして気持ちが痛いほどわかりました。

1 対面その1

「私魔女なんかじゃないですよ。止めてください！おばあちゃんが待ってるんです」

あの後私は胡散臭い笑顔をする男の人に手を引かれ裏道を少し進んだところに止めてあった馬車に乗り込む羽目になった

いやーこの裏道には似つかないほどの高級感あふれる馬車で・・・ま、陛下直々の命令で動いているのならこのくらい凄い馬車なのも納得できるけどさー

（このままじゃ連れてかれるオチよね！？）

焦るものの一度乗った馬車は止まることを知らず・・・男の人は私を離さないとも言いたげにまだ手を掴んでいる

「だから、あくまで候補です」

こいつ理解してねーんじゃないの？

みたいな目で私を見る・・・え、私が悪いの??

（でも、このままだと本当にやばいわよ私）

冷や汗ダラダラで考えるけどなんせこの状況、まともに頭なんて働くはずもなく

進む馬車はついに表道へと出て城へ行くための大通りに出た
明るいところでみるとこの馬車には帝国の紋章が刻まれている

白、水色、琥珀色、紅色．．．そして蒼銀のダイヤが中心にある帝
国の紋章

嫌味か．．．そう思いたくなるくらい私たちにはいけ好かない形

白は北を意味し、水色は東、琥珀は西を、紅は南、蒼銀は中央を現
している

そう、それははるか昔己の先祖が滅ぼした純潔の魔女の色

（虫唾が走るわー、思い出すだけで鼻水ものだわ）

そんな悪態をつきながら静かに馬車で抜け出す方法を考える

この速さで降りることなんてできない

魔法．．．は使えない

色仕掛けならいける．．．わけないか

「それにしても半年探して漸く^{ようやく}1人とは．．．魔女探しもなかなか
大変です。貴方は今までどこで暮らしていたのですか？」

私の手を握るその男はやや疲れたような表情をしながら問うた

「山の麓で．．．おばあちゃんと。」

おばあちゃんなんていないけど．．．大切なので2回言います

嘘八百ですけど面倒事には巻き込まれたくないんです。

私は小さく声を発した

「へえ、麓ですか。それはそれは．．．ここまでよく」

ひい！？疑ってるよー怖いよー

男の人は私を疑うかのような目で見ている

そりゃーおばあちゃんと2人暮らしのくせに歩いて2日もかかるこ
こまで物を売りに来るなんて冷静に考えれば変だと思っるのは凄く理
解できるんだけどさ、それしか使える嘘がないんだもん！！

「近くにお店とかないから．．．」

「へえ」

あーん、疑いの目が鋭くなったー

今までここまで聞かれたことがなかったし、こんなに急接近して逃
げられない状態で人と話したことなんてないから言葉が思うように
出てこないのよ

「まあいいでしょう。もうすぐ城に着きますから．．．それまで貴方には逃げないように万全を期して眠っていただきましょうかねー」
にへらと不敵に微笑む男．．．
意味が分かりません！！

その男は急に私の頭に手をかざした
それはまさしく魔法を使う寸前の仕草で．．．

（魔法が使えたら今すぐ逃げ出せるのに！！）

今の私じゃ魔法は使えない
魔女だけど今は無理なんです！！

小さく抵抗をみせるも虚しく終わり
ついに魔法は発動する

「ラル・ドゥーラ．．．いい夢を」

魔女の私が魔法にかけられるなんて笑っちゃう？
しょうがないじゃない、それも全部あのハゲのせいよ

霞む世界

最後に見えたのは爽やかに笑う男の顔だった

(本当に、ついてないわ)

体がゆっくりと倒れる

そこで私の記憶は途絶えた

1 対面その1（後書き）

こ．．．こんなもので大丈夫かなあ。

1つ対面その2（前書き）

ついにー！

主人公は陛下とご対面しまさ・・・↑

軽く残酷描写入ります

あー、見たくない人はバックしてください

1 対面その2

「さあ言え、魔女！竜の鱗で作られた盾はどこにある！？」

恐ろしい表情で私に迫ってくる私をここに閉じ込めたヒト馬鹿ね．．．私が知るはずがないでしょう？

それは東のリーナ姉さんが知ってるのに

あんた馬鹿だよ、リーナ姉さん殺したんだもん

直接じゃないけど

追い詰めたのはあんただもんね

「なんだその目は．．．薄汚い魔女が、そんな目を私に向けるな！」

バシッ！！

私の背中に赤い筋がまた一つ増えた

帝王様は私の眼がお嫌いのような

喋れない私はこのヒトを見るしかできなかった

なのにそれが気に入らないと鞭で私を痛めつける

私悪いことなーんにもしてないのに

イタイ

イタイ

「純潔の魔女だと？こんな餓鬼が。ハッ笑わせる．．．何も役に立たぬではないか！」

バシッ
ビシッ

そう言つて何度も何度も私をその鞭で殴る
私が喋れないのはあんたのせいなのに

私はまだ生まれたばかりなのに
ほかの姉さんたちに比べれば何も知らないんだよ？

私は最初に言つたでしょう
あんたはそれを無視したんだ

私が悪いの？

ああ．．．もう私が悪者でもいいから、早くここから出して！

「！？」

バツと飛び上がるように私は目が覚めた
久々に嫌な起き方をしたな．．．ってあれ
え、ここどこ？

（頭痛いしーんじどいよ）

酷く痛む頭を支えながら今いる場所がどこなのかを考える

馬車に乗せられて．．あの男の人に魔法を使われたんだ
そうだ、そこで私は眠らされた

つてことはここはもしかしくなくても城なのか？

「うあー、厄介ことは本当に嫌いなんだけどなあ」

私の声は誰に拾われるわけでもなくこの広い部屋に響いた

見渡す限り綺麗に装飾された部屋
ふかふかの大きなベッド

窓際には綺麗な花
その近くの机にはチェス盤が乗っている

私の存在が異質に感じるほど広い部屋

ために窓際に行ってみただけど抜かりない．．魔法で出れないよ
うに細工してあるのが見えた

少し離れた場所に大きな扉があるけれど、そこも完全にふさがれて
いる

嫌だな、昔を思い出す雰囲気だ

「檻みたいじゃないの．．．」

「お前には檻に見えるらしいな」

突如私のちいさな呟きに返す低くバリトンの効いた声が響いた
その声は私の後ろにあり．．．私は気づかなかった

（気配にだけは．．．敏感なつもりなんだがなあ。私ちよびつと
感覚鈍った？）

そんな訳がないのは重々承知です
こいつ．．．気配がまるでなかった

振り向く勇気がない私は近づいてくる足音にどうすることもできな
かった

「お前が魔女候補か」

そしてその声はついに私のすぐ近くまで迫ってきた
冷たい声

優しさのカケラもない
そんな声が私の耳に届く

「聞いているか娘」

怖い

直接見ていないのに悪寒が絶えない

私はその圧力のかかる声に漸く反応するかのように後ろを向いた

そこには．．．恐ろしく綺麗な人がいました

（うつそーん！？超かっこいい、これ人ですか！？）

さっきまでの恐怖は何処へ．．．．

その人を見た瞬間私は驚きのあまり目を見開いた

目の前にいる男は

人形のように綺麗な金髪でブルーの瞳をしていた

作り物のように綺麗な顔立ち

ただ残念なのは笑わない口元

私が振り返ってなおその冷たい表情は変わることは無かった

「俺の言葉を聞かぬとは愚かな娘だな、死にたいのか？」

「私は魔女です！」

死にたくない死にたくない

ま、簡単には死ねないけどー

目を見て話されると脅威拔群
この男の人は私を見下している

言葉のとおりです

私は見上げる形ですね

それに愚かとか死にたいのかとか

物騒なことしか言えないのかこの男の人は・・・

”私は魔女です”

だなんて嘘を隠したいなら絶対に言わない

”私魔女なんて知りません！ここはどこですか？家に帰してくださいこの変態！！”

って感じのストーリーが王道でしょ？そう言ったら言ったでこう云う類の人間は

”面白い、俺にそんなことを言ったやつは初めてだ”

とかいらんフラグが立ちそうだからそれを回避するためにはわざと厭らしい欲に絡んだかのようなモノにならないといけない

・・・のに

「ハッ、気に入った。そんなに堂々と魔女宣言をされたのはお前が初めてだ。いいだろう・・・今日からお前が俺を守れ・・・本物の魔女が見つかるまで1年間だ」

そう言つて男の人は楽しそうに口元を歪めた
．．．計画つてさ

王道つてさ？

”．．．お前もそこら辺にいる女と同じか。去れ、どうやら間違いだつたようだ”

”そんな！？私は魔女ですよ！”

”衛兵！この女を城から放り出せ！”

”嫌よ！離しなさい！！”

的な流れになる場所よね？

おかしいでしょ、この流れ．．．

目の前には綺麗に笑う綺麗な人

私の計画した流れはどこに消えたんだ！！

つてか守るつてなに！？

しかも１年もかよ

つーか結局私が魔女じゃないって思ってるんじゃない
なんでそこでいらんフラグを立てるんだよ！

「え．．．あはは」

もう笑うしかないでしょ

こんな、目が拒否したら首ちょん切るって圧力を放っていたらいくら魔女でも怖くて動けません

首を縦に振るしかできないみたいです

「俺の名はアレン・アルファジュール。名の通り7代目帝王、魔女・
．．お前の名は」

やっぱり、とういうか陛下であらせられましたかー
もーなにも驚かないですよーだ

「私はミアと申します．．．」

魔女にとって真名、つまり本名は絶対のタブー
名前は契約

だから迂闊に名乗れはしない

「ならばミアよ、お前は今日からミアンとする．．．ミアン・レテ
イシェホードだ。似ているし何も問題はなかつ」

（なぜお前がその名を．．．）

新たにつけられてた私の名前
．．．私の、本当の名前！！

「な．．．なぜですか？」

眼が左右に動かないよう、悟られないようにそのブルーの瞳を睨み

つけるように私は見た

男は不思議そうにするも冷たい表情のまま

「お前には関係のないことだ。いいか、余計な検索は無用。お前は私が危険だったとき命を懸けて守ればいい。本物が見つかり次第お前は帰れる、勿論報酬を与える．．．いいか、契約だ。1年間は俺を守れ」

なんと言ったことだ．．．

「血に従い血の掟の定めし主の名の下に我ミアン・レティシェホードは貴方様の命令に絶対的な忠誠を」

私は怒りで燃えそうな感情を押し殺しこの男の前に傳いた
この言葉は．．．この動作は生きていて2度目

「ほう．．．一端に魔女を自分から名乗るだけはあるな、魔女の契約詠唱を知っているとは。期待しているぞ」

（くそがっ．．．またも私は帝王に縛られるのか！！）

綺麗な男は用事が済んだとでも言いたげにその場に私を残し颯爽と部屋から出て行った

私は動けないままその場に傳いいて．．．
悔しくて、300年経った今でも帝国に．．．帝王に縛られるなんて

魔女として本当に情けないわ

静かな部屋

陛下との最初の対面はそれはそれは酷いものだった
・
・
・

1. 対面その2（後書き）

対面終了

陛下酷い！

むしろ最初の帝王アウトでしょ・・・

夜獨その1（前書き）

よるひとり・・・と読みます。
難しいね、漢字って↑

夜獨その1

ハツと働かない頭を無理矢理動かして外を見ると既に暗く深い夜になっていた

放心状態に陥って暫く経っていたんだろう・・・

私は体を起こして窓の近くへ行った

少しでもその窓を開こうものなら普通の人間なら見えない何かで弾かれる

私は”フツウ”ではないから窓を覆う透明な膜が見えるんだけどね

「300年経っても帝王の呪縛からは逃れられないのねー私」

辛気臭い顔が窓に映る

それは紛れもなく私の顔で・・・

はちみつ色の髪に琥珀色の瞳

この国では在り来たりなはずなのに、まさか見つかるなんて

（あの男の人は誰だったんだろう）

ふと、疑問が頭を巡る

あの男の人は誰だったのか・・・分かるのは確かに陛下の僕であるということと、陛下に限りなく忠誠を誓う者、私の微かな魔女の色を見分けた凄腕さんってどこ

一人の夜は怖い

よくそんなことを近くの村の女の子が口々に言っていた気がする

私も一人が怖い

でも、一人が好きな夜もある

矛盾していると言えばそうなるかもしれない

でも誰しも夜の深みに嵌りたいときだってあるはずだから

昼だけでは明るすぎる人もいる

私は昼を好まない

”魔女”は昼よりも夜を好むから

私たちの時間は夜

（本当なら魔法なんて使えないからこの窓も開けられないけど・・・）

「新月の夜なら話は別よー、なーんてね」

私はその見えない膜に触れた
感触なんてない

でも、少しヒヤッとする

魔女にできないことはないよー、自分で言っちゃうけどね

あくまで同調させるように力を広げていく
水が波打つようなそんな感じに．．．優しく広げていく

これは私の魔力じゃない
空気中に漂う小さな魔力をかき集めたに過ぎない

（新月の時は月の光が一切ないから魔力が散り難いんだよねー。魔法にはありがたいわ）

そんなことを考えているうちにその見えない膜はスウツと翳した私の手の周りから溶けていく様に消えていった

「これでよし！」

私はその溶けた膜を抜け、窓から身を乗り出した
窓の奥はバルコニーになっていて不思議な造りになっている

私が完全に出ると窓は既にもとの透明な膜を張っていた
．．．やるわね宮廷魔術師も。

穴が開いてもすぐに補強され続けるだなんて本当に抜かりないわ
バルコニーに出た私はそのまま白い手すりに上半身を預けるように寄りかかった

白い手すりも夜の色に吞まれている・・・

「それにしても月のない夜は一層深く常世に続く道になりけり・・・
ね。星ひとつない今夜は本当に一人だわー」

手を上空に翳しても私の手は見えなくて
そのまま消えてなくなってしまうんじゃないかと錯覚してしまう

「——北の魔女は言う
それその力を何にするかと

東の魔女は言う
その力は何を守るかと

西の魔女は言う
守る守るで攻めは無いかと

南の魔女は言う
攻めは無くして何をするかと

中央の魔女は何も言わず
ただただそれその者々を見つめ静かに佇み世の流れを見定める

寄らば大樹の陰の如く
人は柳に雪折れなし

生きた歴史が話すは過去
これはただの戯曲に過ぎず

魔女は詠い歴史を残さん」

私が夜に紛れて小さく歌ったこの詩は
帝国に残る数少ない魔女の文献の一文で．．．

新月の暗い深い夜に獨の歌が消えていった

逃げられるはずがない

あの綺麗な男．．．陛下は偶然とはいえ私の真名で契約を促した

その時より私は陛下の従順な人形でしかない

逃げられないのならその契約の1年を静かに過ごそう
誰でもいいからきつと1年経てば新しい人が見つかる

それが、純潔ではないとしても．．．

（この世に純潔は1人．．．寂しいなー）

別に慣れたといえは慣れたかもしれない

精霊だっているし一概に一人ではないのだから・・・

でも、できることなら仲間が生きていて欲しかった
魔女にも欲はある

私の笑顔はまたも新月に隠され

寒くなってきた外から身を守ろうと逃げられない檻に自ら入った
膜が溶けて私を包むように、捕まえるように中へと引きこんだ

その後、その膜はやはり何事もなかったかのように透明な膜を張っていた

夜獨その1（後書き）

うん、シーリーアース!!

自分シリアス大好きなんですよ、でもハッピーエンド大好きだけど
ね↑

夜獨その2・SIDE陛下・（前書き）

ま・さ・か・の!!

ここで陛下視点入れてみました

陛下・・・まさかそんな
↑

夜獨その2 - SIDE陛下 -

魔女候補が漸く一人見つかった

その知らせを信用にたたる男から連絡がきたときは、やっと一人なのか．．．そう思わざる得なかった

俺がこの帝国アルファジュールの王として席をついてからまだ3年しか経っていない
いや、この場合は3年でよくここまで忠実な臣下を増やせたこと．．
．かもしれない

魔女の存在は俺の父6代目帝王の時から既に目をつけてあった
が、おとぎ話のような魔女の存在を堂々と調べられるほど王宮も暇ではない

「魔女なんていねーよ」

そう言ってよく女官を困らせていた幼少期
実際は魔女の存在をとても気にしていた

できることなら居て欲しかった
純粋な子供時代の話だか．．．．

「アレン様、魔女様はいらっしゃるんですよ。」

俺が魔女はいないと言っ度に、一人だけ．．．周りと反応を合わせない女官がいた

その女官は誰に対しても優しく厳しい人だった

魔女はいる

この女官はいつもそれを言っていた

「いねーよ！だって魔女は皆国を捨てて死んだんだろ？」

むきになってそう女官に言えば女官は怒ったような、寂しそうな顔を表に出さないように必死になっていた

当時の俺は気が付かなかったが、そんな表情をしていたんだろうと思う

「アレン様、魔女様をそんな風に言ってはいけませんよ。魔女様は．．．確かに国を捨てたかもしれませんが、理由があったんです」

理由があれば国を捨ててもいいのだろうか？

安直な考えだが、小さな俺はその女官を嫌いになった

だから．．．父上に言っただ

嫌いだったから、それだけで．．．だ

——あの女官は魔女だ

その言葉は魔女に目をつけていた父上には思ってもみない一言だったに違いない
ほんの出来心で・・・

その女官は二度と俺の前に姿を現さなくなった
次の日、父上が極秘でその女官に会いに部屋へ行くと蛻もぬけの殻だったらしい

女官は視ていたのだ
俺が父上に話す瞬間を・・・その眼で

二度と、と言えば語弊があるかもしれない
女官が居なくなって父上はひどく残念そうな顔をしていたのを覚えている

魔女はいる
それを国の柱の存在が簡単には言えるはずもなく、その女官の搜索はしなかった
事件として扱えばいいものの、それをしなかったのは父上の優しさだろうか

その日の夜、俺はとてつもなく後悔した
たった一言で・・・周りと違う色を持った花が誰かに摘み取られて消えてしまったのだから

そんな時珍しく夢を見た
・・・女官が現れた、夢だった

「アレン様．．．」

女官は俺を見て残念そうな軽蔑した目で俺を見ていた
当たり前だ、俺は女官の秘密を知らぬまま話していたのだから

「俺のせいだろ！？謝るから帰ってこいよ！もう魔女を悪く言わないし、好きになるから！」

俺の必死の叫びに女官は今度は優しく微笑んだ

「アレン様、私はついに視ることができたんです。私は貴方様の傍でお仕えることは出来なくなっていました．．．アレン様は純粋で綺麗な色を持つていらっやいます。いつか貴方様のその色が、あの御方の心を癒してくれるような人になってください。押しつけがましいですか？でも、この言葉をアレン様は忘れないでしよう、賢い帝王様．．．いつまでも幸せに」

優しく、優しく微笑んだ女官は泡のように俺の夢から消えていった
その瞬間を俺は今でも忘れていない

．．．そう、あの女官が言った通り俺はその言葉を忘れられない
だから父上の跡を継ぎ帝王を名乗った瞬間に、信用できる臣下を使い魔女を探させた

「お前の言葉通り、俺は必ずその魔女の心を癒そう。」

一国の王が幼少期に身の回りを世話していた女官の話を信じ探させるなど単純かもしれん

執務室で報告を待ちわびる日々
募る見えない魔女への思いは強くなる

思えばあの女官は本当は魔女だったのかもしれない
東の魔女は眼の優れた魔女だったと聞く

あの女官はその東の魔女の血を分けた力の弱い魔女だったのかもしれないな

そう思っても既に遅い……か

「陛下、見つかりましたよ。魔女が」

静かすぎた執務室
空気を切るように扉が開いた

そこからは臣下が嬉しそうに俺を見て揚々と話してきた

やっと会えるのか
その魔女が女官の言っていた魔女ではないことは分かっている
だが、あの女官のように血を分けた存在ならその魔女の情報も少な

からずあるはず

客室にいたと言われその部屋に足を運ぶ
気配で警戒されぬよう、細心の注意を払って・・・

開けた先にいたのは
小さな背中だった

（はちみつ色の髪を持つ小さな女）

第一印象はそんなところだろう
その後ろ姿はあまりに非力だった

「檻みたい」

その一言を聞いて思わず笑いたくなくなった
・・・その通りだ、この城は檻だ

「お前にはそう見えるらしい」

初めて声をかけてやればその背中が上下に動くのが分かった
こちらを見る

逸^{はや}る気持ちを抑えつけ、その顔が見えることを期待する

漸く・・・俺の望みを叶える鍵を手に入れたと思いながら・・・

夜獨その2・SIDE陸下・（後書き）

こんなものでしょう？

ミアンちゃんが本物だと気づいた時のデロ甘が怖い

陛下の騎士その1

——様

．．ま．．様

ユサユサ

心地よい温もりと適当な柔らかさ

気持ちよく眠っている私を起こそうと誰かが優しく擦っている

——魔女様

お目覚めの時間にございますよ

今度はさっきよりも強く揺さぶられる
そんなに揺らさないでほしい

(ね．．眠いわ)

まだ寝ていたいのにそれを妨げる何かがあるから私は億劫おっくうだけれど
なかなか持ち上がらない瞼まぶたを持ち上げまだ揺らし続けているその人
を見る

「ああ、やっとお目覚めになりましたか魔女様。」

そこにいたのは茶金の髪を後ろで一つに編み込む30代くらいの女官．．．らしき人がいた

「魔女様？」

あ、今の仕草可愛い
まだ眠い私はボーっとしながらその女官を見つめて思った

「あらまあ．．．寝起きは陛下並みに酷いのですわね」

そんなことを言われていたことにも気が付かず．．．
そのできる女！．．．と言わんばかりの女官を見つめていた

「魔女様、しゃんとなさってください！」

「．．．．．起きました」

耳元で大きく叫ばれた
耳が痛いわ

脳がキンキンするよー
この人鬼だ鬼ー

なんて本人には言えないけれどね

「ふふっ、お初に御目文字仕ります魔女様。私^{わたくし}魔女様の女官を務めますリリーと申します」

綺麗な挨拶をされて私はどうすればいいのかわからない
今までこんな敬われるような態度をされたことがないからね！！

「あ、そんなに畏まらないでください！！私みたいな一般人にそんな礼は必要じゃないですから」

こついうの苦手
人の上に立ってるみたいで凄く無理！！

「良くも悪くも優しい魔女様で安心致しました」

どういう意味だそれ

ふふふ、と笑うリリーさん

「それは．．．ありがとうございます？」

疑問形で返せばリリーさんはまたふふふと笑った
なんなんだ!?

何か間違ってるんだろうか私は
いや、何も間違っではないはず!!

「いえ、大変可愛らしい．．．つい苛めなくなるよ、つい可愛がつ
て差し上げたくなるような魔女様だなあと思いました」

嘘だ

私には聞こえた

幻聴なんかじゃない
はつきりいったもん!

（苛めたいってなんだ苛めたいって！）

なんかリリーさん濃いなあ

綺麗な顔立ちをしているから余計そんなことを言われると何もないのに身の危険を感じてしまう

だってねえ？

それは私の性癖云々（せいへきうんぬん）の話ではないと思うよ

「リ、リリーさん！！」

そう言えばリリーさんは少し驚いたような顔をして私を見た

「魔女様、私共に”さん”など不要です。どうかリリーを御呼びになって下さい」

「不要？」

「はい、さぁリリーとその可愛らしいお口で！」

ひい!?

山彦のように尋ねれば熱がこもったお返事をいただいてしまった

なんか．．．リリーさ、リリーは凄いなー
こう、攻めてくるからタジタジになっちゃう

「じゃーリリー、おはよう」

笑いかけるようにやっと言えた一言
朝の挨拶は大切です

「おはようございます、魔女様。さあさあ時間が押していますよ！
お召し物はこちらに御座いますので即急に身支度を整え陛下の下へ
参りますよ」

そ・れ・を！先に言ってください
陛下に会うのに心の準備が必要なんだよ！

．．．なんて、何度も起こされたのに反応を見せなかった私が悪いわけ
リリーにあれよあれよと整えられていく私なのでした

陛下の騎士その1（後書き）

女官登場リリーさんです

お年は34歳

熟した女性にございます（*^^）v

見た目は茶金の髪を後ろで一つに編み込む・・・筋肉○んのラー○ンマンみたいな感じ（嘘です）

眼はアメジストで少し釣り目

でも笑うと艶やかな雰囲気の大人の女性です

ちなみに既婚者です（。o。）

陛下の騎士その2

着せられたのは薄紅色のふんわりとやわらかく華やかな・・・ギヤザードレスのような物だった

ちなみにこのドレス、あの陛下が直々にくれたもの

いつか現れる魔女のために沢山のサイズを用意していた・・・らしい

と、リリーは嬉しそうに語ってくれた

コルセットの締め具合がなかなかいや、悪い意味でだけだね

リリーさん笑顔で「まだ締まりますよー」だなんて言って無理に締め上げるから息が苦しい

巷の女は毎日こんなに苦しい思いをしていただなんて

森育ちの私には考え付きません！

そのあと薄く化粧を施され、髪も綺麗に結ってもらった
よく1人で私をここまで飾れたものだ

一人関心しながら鏡を見る

そこには私の知らない誰かがいました

身だしなみって本当に大切ね
この瞬間に私は強く思ったよ!!

「可愛らしいですわ魔女様! ささ、陛下がお待ちです。参りましょ
うか」

(ご飯食べる前で本当によかったわ。これは歩くのも大変)

一歩足を進める度にその振動が伝わってくる

丁度コルセットで締め上げられているところで止まるからかなりお
腹に響く

お恥ずかしながら一人では早く歩けないのでリリーに手伝ってもら

いながら陛下の待つ部屋へと急いだ
．．．心の準備？そんなのどこかに投げたわ！！今は陛下よりも
コルセットよ！

コンコン

「陛下、魔女様をお連れ致しました」

着いた先にあつたのは大きな扉

一人では到底開きそうにもないその扉は惜しみなく金と魔石を散り
ばめたまさに王のための部屋を象徴するかのような扉だった

（扉でこれかよー、絶対部屋は目がちかちかするね）

――入れ

そんなことを思っていたら中から陛下と思わしき声が聞こえてきた
実際ちゃんと聞いたことなかったからね、昨日はいろんな意味で耳
から通り抜けて行っただけ

「さ、魔女様。お行き下さい」

リリーは笑顔で私を扉の前に促す
．．．え、リリーは？

困惑の表情をリリーに向ければリリーは微笑んで一言

「魔女様とお二人でお食事を召し上がる．．．これが陛下の要望ですわ」

「そんな話聞いてないけどね!？」

思わず突っ込むも、リリーはただ微笑むだけで私はそれ以上何も言えずその見るからに重そうな扉に手を触れた

あ．．．ここにも魔力がある

一瞬手がビクツとなったけど幸いリリーは気が付いていないようだった

悟られないようよくよく扉を見れば描かれている絵の・・・絡み付く様な金の蔓から微量の濃度の高い魔力が流れていた

試に押してみる

するとどんな仕掛けか、その扉は簡単に開いた

（成程、陛下の許可があれば入れるようになっていたのかもしれないわね）

ギィッと音がしてボタンと締まる

背中にリリーの気配を感じたままその重い扉は閉じた

中は案外きらきらしていなかった

机といすと奥に大きなベッドがあつて高級そうな絨毯とか花瓶とか置物ぐらいしかない

・・・あの剥製の鳥、今じゃもう絶滅したけど昔いた綺麗な鳥だわぐるりと見渡して最初に目が留まったのはその鳥の剥製

全体的に白いのに毛先だけ赤と黄色と黒のラインが入っている

最初はたくさんいたけれど観賞用にどんどん人間が捕まえて番を失ったその鳥たちは絶滅の一途を辿るしかなかったんだよね

レアなものがここにはきっと沢山あるのね
流石帝国の王宮だわ

「何をしている、そんなにその鳥が気に入ったか」

横から声が聞こえた
この人は気配が無いのか？

それとも影が薄い・・・それはないね
もうオーラ全開で威厳に満ち溢れている

まだ若いんだろうけど凄いねー
なんて300歳を超えた私も言われてみたいわ

「いえ・・・見たことがない鳥でしたので」

「ほう、誰でも知っている鳥なのだがな。本物ではないとしても城下の街に行けば山ほど売っているぞ」

しらねーよ

だって街行かないもん！

用事ある時以外は森でひっそり精霊と暮らしてますからね
嫌味だけど陛下のご先祖が作った檻で！

．．．あ、語弊を招いちゃいけないね。今では気に入ってるよ
誰も来ないし静かだし自由だからね

「あ．．私街にはあまり行かないんです」

そうちよつと、というかなり無理な言い訳をすれば陛下は納得？
してくれて私に手招きをしてきた

こいこい

そんな感じで私を呼ぶ陛下

うはん、イケメンは間近で見えてはいけないと思う！
渋谷陛下の元まで苦しいコルセットを気にしながら行けば陛下は満
足したように近くのいすに座った

私の目の前には陛下と同じような気がする
これに座れということなのか？

ちらりと陛下を見れば座れと目で言われた
ひいー怖い怖い

陛下の騎士その2（後書き）

だめだ．．．文才が欲しい
と、いうか長くなったので3つに分けますね

陛下の騎士その3

渋々私はその椅子に座った

座り心地は素晴らしいものでした

いつも木にばっかり座ってるからこういうふわふわした椅子が凄く懐かしい気分だわ

この状況であれだけ気分は少し揚げえ、能天気とか言わないでね

「色気がないな」

第一声がそれですか

私が椅子に座るとすぐに言われた言葉は色気……

色気がなくてすいませんね

そんなことこの場で貴方みたいなイケメンには言われなくなかったわよ！

「……はあ、それは失礼致しました。陛下からのお召し物を着こなすことができず申し訳なく思っております」

なんで私が謝らなければいけないんだ
とは、心の中で囁いておいて

私は大人ですから穏便に済ませたいのです

「よい、別にお前に期待などしてはいなかったからな」

一々神経逆撫する人だなー
どんな辱めだっつーの！！

しかも鼻で笑うとか性質が悪い
まあイケメンだから何も言えませんがねー

「それより食事だ食事、とりあえず食事をしてから話をしよう」

それより．．．私は食事以下ですか陛下
心が折れそうなのを必死に奮い起こした

陛下の一言で傍にいた女官達が動き始めた

ものの数秒で私と陛下の目の前には豪華な食事が出された

（うわー凄い。１年後また始まる森の暮らしで満足できるかしら）

そのくらい目の前に広がる食事は豪華だった

帝国の主食はビュグレって名前のパン

単品ではあまり味がしないけど何かにつけて食べたり何かを乗せて
食べると凄くおいしい

出された食事の中に私の大好きなバナナの実があった
でも丸ごとじゃなくてケーキになっていて凄く美味しそう

食事の仕方？

そのくらいわかるよ

だってハゲに再三さんさん言われてきたもん

別に表に出ることは無かったけどねー、なんでだろ

「街に出たことのない娘がよくナイフの使い方を知っているな」

いつの間にか食事をしながら陛下は私を見ていた

その目は疑っていて

いつかの誰かの目と同じじゃないのー
馬車でもそんなことがあったわよ

私は連れてこられた立場なのに常に疑われるのか
こんなんで1年持つのか私

「祖母が・・・昔西の王宮で働いていて厳しく躾けられたのです」
架空のおばあちゃんに助けてもらったことにしようと思う！

西かー

言いながら思ったけどあの森に軟禁されて以来全然行っていないな
話によれば今の西は武力国なんだよね
厳つい人とか沢山いるのかな

「そうか」

私の必死の言い訳は短くバツサリと綺麗に流された
聞いたの陛下じゃん！

そんなんで一人むかむかしながらも静かに食事を終えた私たちは漸く本題に入ることに・・・

「お前にはいくつか言っておかなければいけない事がある」

目の前でその長い脚を組み話す様は風格のあるまさに王あのハゲよりは幾分ましなのかなー

ま、あのハゲの血を引くんだから私は嫌いだけど

「一つ、お前は私の専属騎士として傍にいてもらう。魔女だと云う事は公表はしない、お前はあくまで本物が見つかるまでの人形でしかないことを忘れるな」

人形ですか

酷い言い方だー横暴だー

でも反対できない
だって目が反対したら殺すって言ってるんだもん

大人しく首を縦に振る

「一つ、お前は最初の通りミアと名乗っても構わない。契約の時に使ったのは建前だ。理由は検索するな」

お、それは助かるね

この言葉にも盾に首を振る

「一つ、お前には本物の魔女を探してもらおう。以前この王宮にも一人魔女が居た、最初は全く分からなかったが予想外の出来事で見つかった．．が、保護する前にそいつはここから逃げた。流石にこの帝国中を探せとは言わない。帝国は俺の信用に足りる臣下が目下搜索中だ。お前にはこの王宮内を探してもらいたい」

「奇跡があると?」

あえて魔女が王宮にいたことは触れなかった
その魔女はきつと12年前一度だけ私に会いに来た魔女だろう

東の．．リーナ姉さんの血をもらった元人間だと思う
私を見つけ私に会いに来た最初で最後の魔女

彼女はリーナ姉さんが血を分けるに値する意志の強い人間だった
リーナ姉さんは意志の強いモノを好んでいた

「奇跡か、それを望んでいるのかもしれない」

（なんて寂しそうな目をするんだろう）

どこか遠くを見つめ何か思いふけるようなそんな表情
思わず声を掛けようとしたところで陛下はまた元の感情の読み取れ
ない表情に戻った

「これを守れ。そして出過ぎた真似はするな、従順でいればいい」

私はその言葉に是とまたも首を縦に振った

陛下の騎士その3（後書き）

人形だつてー

陛下酷い酷い

陛下の騎士その4（前書き）

騎士シリーズやっと終わり

陛下の騎士その4

「ならばよい。おいシド」

私と陛下しかいないこの部屋のはずなのに陛下は少し声を張って誰かの名前を呼んだ

いや、実際には私たちのほかにもう一人
天上に気配があつた

「ここに陛下」

シド、と呼ばれたその人は陛下の前に傅き寸分の狂いもない綺麗な礼をした

座る陛下に傅く姿はまるで忠犬のよう

（うまく気配を消していたね。魔女相手じゃ気配云々は意味がないけどー、ああ陛下は別ね）

「紹介しよう、お前とともに俺を守る騎士団長のシドだ」

騎士様でしたかー

陛下の言葉でゆっくりと立ち上がり私のほうを向いた

これまた美形

「シド・レーニンだ」

でもその人の目からは優しさなんて私に向けられてはいなくて代わりに向けられたのは明らかなほど冷たい目だった

まるでお前なんて認めない
汚いものを見るかのような目

（ははん、陛下命って訳ね。陛下に媚を売る女なんて汚いだけの存在！って感じ？）

別にいいけどー

「ミアと申します」

陛下に言われた通りミアと名乗る

理由なく真名を言う魔女はどこにもいないからね

浅く礼をした

「明日からお前はシドと共に俺を守ることになるだろう。今日は自由に歩いていい。散歩でもしながらこの王宮の構造を覚えろ・・・以上だ」

この人と陛下を守るねえ

ちらりと横目で見ればガッツリ睨まれました

この人も怖いよー

そんな私たちの状況を知ってか知らぬか陛下は一人部屋から出て行った

え、これからどうしろと？

「ふん、お前のように非力にしか見えない奴が陛下を守るだと？精々足手まといにだけはなるな」

酷い言われようだー

見下したように私は睨まれる

「お前じゃありません、ミアです!」

「どうでもいい。魔女が見つかるまでの存在だろ？陛下に飽きられない様に媚びていればいい」

あう．．．どうでもいいって言われた

この人女の人に容赦ないよ絶対

（媚びるだってー、それも面白いんじゃない？）

楽しいことが好き

だからいつそ媚びてみようか

遊郭の女みたいに陛下に

「必要以上に話しかけるなよ」

そう言ってシドさんは部屋から出て行った

きっと陛下を追ったんだろう

話しかけるなって言われると話しかけたくなるもんじゃない？

「とりあえず私も散策しよーっと」

考えても仕方がない

そう思って部屋を後にした

シドさんが言った通り媚びよう

陛下に媚び諂^{へつ}って1年を過^すすものいいんじゃない

そう思いながら・・・

陛下の騎士その4（後書き）

王道展開大好きだよ

でも王道一步横道を書きたいんです私

だからミアンちゃん

ちよっとうざい女の子に変身します（たぶん）

華添（前書き）

新章はいりまーす
はなそえ、と読めます

華添

人間は不思議な生き物だ

そう感じたのは私が森に閉じ込められて100年が過ぎたとき

神聖だなんだと口にしておきながら

数多あまたの血で汚れた屍を私のいる森に捨て置いた
別にこの森が血で染まるのも悪くはない

木の上からその屍を見て思ったのもまた事実

苦しみもがきまだ息のあるソレを救う理由が私にはない

—— 助けてくれ．．．と、血に埋もれた誰かが私を見て叫んだ
私はその声が聞こえていた

聞こえていたけど助ける理由がないんだから助ける必要もなかった

助けて、そう叫んでいたこえは段々に消えていった
ああ死んだのか

別に死のうが生きようがどうでもいいことだ
私はここで生き続ける”生きた歴史”なのだから．．．

ベチャ

不意に私の肩に何かが当たるのが分かった
肩を見れば紅く色づいている

血ではない

バラナの実だった

どこから飛んできたのだろう

実を頼りに視線を移せばそこにもまだ息のある人間がいた

——ばけもの！

そう叫んで息絶えた

人間とは思議だと私はそのとき思った

——たすけて

そう私に崇拜の眼差しを向け

——ばけもの

そう私に恐怖の眼差しを向ける

別に構いはしない

人間が生きようが死のうが嘆こうが笑おうが

ただその二択の声を聴いた私はその時から”バナナの実”が好きになった

それを食べるたびに人間の不思議さを思い出して面白いからだ

そんなことを考えていると・・・

「怖い魔女だ・・・死に逝く人間に対してなんとも思わないか」

ガサリガサリ

屍を踏みつけながら私の元へ誰かがきた

その言葉をお前に返してやろうか、そう思った

『死んだ同族を踏みつけ歩くお前の言えたことか』

ガサリ

「同族だと？同じにしてくれるな魔女・・・こいつらと俺は違う」

私を見上げてそいつはそう言った

私には何が違うのかさっぱりわからなかった

そんな私の表情を読み取ったのかそいつは小さく笑った

「魔女よ、俺はいずれ東の王となる男だ。」

だからなんだ

誰が王になろうが私の知ったことではない

「魔女よ．．．その戒めが邪魔ではないか」
いまし

その男は私の手についている鈍く光る銀の輪を見ていった
これは私が守るはずであった帝国の王が私につけた忌々しい呪いの
鎖だった

これを外せるものはもういない
これの呪いを解除できる男はとうに死んだ

『何が言いたい』

この鎖が邪魔で仕方がないのだ
誰でもいいからこの鎖を切れ

「俺がその戒めを解いてやろう」

『戯言を』
たわごと

私は心底その男を殺したいと思つた
簡単に解けるのならば解いている

あまりに軽く言う男に何がわかる

「降りてこい。戯言ではない、俺が外してやる」

その言葉に嘘はないんだろう

男の持つ目は揺るがない、静かに炎が灯っていたから

私はその男を信じ男の元へと飛び降りた

男は私より遥かに大きかった

「小さい魔女だ」

『たわけ人間風情が』

小さい小さいとよく南の魔女ルゼラから、よくからかわれていた
むきになった私がそんなに面白いのか男はよく笑った

ひとしき
一頻り笑うと男は私の手を掴み言った

「魔女よ、今この世界に純潔の魔女はあんただけだ。もし、この世界の均衡が崩れると思ったその時はあんたの判断でこの世界を無に
歸し元に戻せるか」

何を言い出すのだろうと鼻で笑ってやろうとした
だが、その男の表情はとても真剣だった

静かな炎が荒々しく燃えていた
その瞳を私はとても綺麗だと思った

『もともとこの世界は私達が支えている、それを人間などと下種^{げす}な

生き物が壊そうものならその前に私が人間をこの世界から消すさ』

私達．．．それでは語弊があるかもしれないが。
そう言えば男は嬉しそうな顔をした

「ならば安心だ。そら、あんたはもう自由だ」

気が付けば手首に巻かれていた枷は血の染みる地面に吸い込まれるように落ちていつていた

『自由？』

「そうだ、あんたはここにいらなくてもいい。自分の意思でどこへでもいける」

私が求めた自由

離塔に閉じ込められて、誰も立ち寄らない決められた人間以外立ち入らないこの森から出ていくことができる

私が求めた自由を今目の前にいる男が叶えてくれた

『人間、礼を言おう。お前の御蔭おかげで私は自由の身となった』

そう言いながら男を見れば男は実に人間らしい表情をしていた
それを見て、ああ．．．またか、と思うしかなかった

「だが魔女、あんたは魔法が使えない。俺が新たに戒めをつけたからだ。魔法が使えなくても自然を操れる魔女ならなんともないだろう？」

欲の絡んだ目だった

『よもや私を手懐け様とは言つまい』

睨みつけるようにその男を見れば男は苦しそうに微笑んだ

「悪いな魔女、別にこの国の王のようにあんたを監禁したりはない。ただ．．．俺が死んだあとこれからずっと先の未来で、俺の収める国が危なくなったら助けてほしいんだ。その時期が来るまではあんたの魔力は俺が大切に保管しておこう。時期がくればこの魔力はあんたに戻るから」

欲．．．では無いのかもしれない
それは切望する目だったのかもしれない

私はその言葉を信じた
お人よしと言われればそれまでだ

だがこの男がとても面白かったから少し放って置こうと考えたんだ
ここは森

魔女は自然を操れる

魔力がなくとも世界は常に私に味方する

その状況の中で、殺されるかもしれないのにこの男は燃えるような目で私に言ったのだ
ならばその覚悟も捨てたものではないだろう？

『お前の言う時期まで待つてやろ。人間、私は少しお前に興味を持った．．．行け。お前が言葉通り東の王となりその時期が来るまでは私は何もせずただ見守^{たが}っていてやる。ただし、約束を違えるな人間．．．それが条件だ』

「魔女よ、貴女の御心の広さに敬意を．．．貴女の優しさに温情を」

その男は私に礼をして一度私を見てからまた屍の広がる奥へと消えていった
不思議なものだ

囚われたくないと思っていたのに自ら囚われてしまった
魔女も大概不思議なものだ

私はそこらに散らばる屍に精霊の命が宿る華を添えた
いつしか目の前に広がる光景は血に汚れた屍ではなく色とりどりの華を咲かせていた

綺麗だ

純粹にそう思った

華は次第に大きくなりものの見事な大輪となった
40年という歳月が流れた後の華だった

一輪の緑の大輪からスウッと何かが出てきた
それは風の精霊の誕生の瞬間

精霊を生み出した華は瞬時に枯れ果てた

私はその小さな精霊を抱きしめた
森に澄んだ空気が流れた

するとほかの華が一斉に精霊を生み出した
一つ誕生し水が流れた
一つ誕生し光がさした

命の連鎖が始まったのだ

私はそれを微笑ましい気持ちで見っていた
あの男が言った

ここにいる奴らと同じにするなと

．．．なあ人間、ここにいる奴ら全員綺麗だ

お前の御蔭で暫くこの森で快適に暮らせるぞ

精霊が私の周りを飛び回る

あんなにも汚れた人間だったはずの生き物は今は全く別のモノになった

森が綺麗になるのに80年の歳月を要した
だが80年で森は蘇った

そんな時ふと思った

あの男は生きているだろうか

『そんなはずはないか』

一人私の声が寂しく響いた

私に新たな戒めを付けた人間

あの男が言った時期まであと何年あるだろう

私はその日が来るのを待つ

バラナの実を手に取りながらそう思った

華添（後書き）

新章のOPみたいなものですね

これはミアンちゃんの懐かしき過去の一つです

魔法が使えない理由がここで明らかに！！

長くて失礼しました

城の庭その1

すうっと意識が浮上する

風が私の髪をなでるのが分かった

（花の匂いがしたから昔を思い出したんだ）

まだ目は開けたくない

感触と嗅覚と聴覚でこの世界を感じたいと思ったから

あの後私は城を散策し始めた

だって陛下が見ろって言うんだもん

途中知らない女官の人や騎士に会ったりもしたけど普通に挨拶をされて終わりだった

王宮内に見知らぬ人がいるのは結構当たり前みたいだね

ちょっと危ない気がしたけど皆陛下に忠実のようだから不法侵入者が現れてもきつと平気なんだろうなー

そう思いながら歩いていると足元に桃色の花びらが落ちていたことに気が付いた
どこから入ってきたんだろう？

周辺をキョロキョロすると柱の奥のほうにチラチラ赤や黄色の色が見えた

「あそこからきたのかな？」

私の足は柱の奥へと進む
着いた先に見えた光景は素晴らしかった

「すっごーい！！」

目の前には沢山の種類の花がそれぞれを魅せるかのように咲き乱れていた
開いた口が塞がらない

（こんな庭があるなら1年きつと楽しくなるに違いないわ！）

そう思いながら私はその場で倒れた
頬に草の柔らかさを感じ、ふと上を向けば太陽に曝された花が美し

く私に影を作ってくれた

いつしか私はその心地の良い空間で寝てしまったみたいで・・・
そしたらあの懐かしい夢を見た

ゴロンと仰向きになって空を見る
既に日が落ち始めて夕暮れのオレンジ色の光が優しく燃えるように
花を照らしていた

「いつになったらその時期がくるのやら」

そう呟けばどこかで荷物を落としたような
ドサツとした音が聞こえてきた

（あり、驚かせちゃったかな）

そう思って体を起こすと
数メートル先で籠を落として固まっている男の人がいた

（あちゃー、相当びっくりしてるねこの人）

まあ無理もないと思う

ドレスを着た淑女が堂々と庭で寝ていたのだから

「あの．．．大丈夫ですか？」

そう声をかければその人は急に意識が戻ったかのような反応をみせた

「だ、大丈夫です！！申し訳ございません、こちらこそあなたの眠りを妨げてしまった」

そんなに畏まらなくてもいいのに．．．

頭を深く下げて私に許しを請う姿がとても痛々しい

「そんなに畏まらないでください、私こんな姿をしていますけど騎士なんですから」

そう、私はこれから騎士として生活するの

だからそうそう礼は必要じゃないのよ

笑ってその人を見れば安心したのかその人も微笑んでこちらに近づいてきてくれた

庭師．．．なんだろうか
恰好がそんな感じがする

「女性の騎士なんてなかなか素敵です、さっきは失礼しました」

そう言つてその人は私に手を差し出してきた
私もその手を握つた

「まだまだ鍛錬が必要な未熟者ではありますがね」

（この人、庭師のくせに魔力が凄いわね）

手を握る手前、私はそう感じた
口には出さなかったけどね

「私はここの庭師をしているエルダンと申します。」

人懐っこそうな優しい青年だった

「私は騎士のミアです」

そのエルダンさんの微笑をみて私の心は再び再生した
．．．いや、冗談抜きでね！

ここに来てから男はみんな最悪だったからね
そついで思いながら庭師のエルダンさんを見ていた

城の庭その1（後書き）

エルダン・・・エルダン
まー結構重要人物です

城の庭その2

エルダンと名乗ったその男は誠実そうでも自然を愛する男だった
彼が庭を弄っている姿を後ろで見ながらそう思った

「ミアさんはいつからこの王宮の騎士になられたのですか？」

エルダンさんがパキッと花を切りながらそう言った
ここの花全部エルダンさんが手入れしているのかしら・・・

「本当は明日からなんです私。今日はとりあえずここに慣れるために城を散策していました」

そう少し恥ずかしそうに言えばエルダンさんも小さく笑った
その笑顔に裏がなくてこの人は綺麗なんだなーって思った

「それはそれは、では明日から大変ですね」

「ええ、怒られないか心配です」

会話をしていた思ったことは

この国では女騎士もそれ程珍しくはないみたい

女も騎士だなんて勇ましいわね

「きつとミアさんなら大丈夫ですよ。」

チラリと横目で見られた

少し顔が近かったせいで私が顔をそらせばエルダンさんはまた笑った

からかったのかしら

「すみません、実は私も先日庭師になったばかりの未熟者ですので
．．これはお恥ずかしい。偉そうに貴女に言う割には私もまだまだ
なんですよね」

．．．え？

「え、あつと．．．そんなに変わらないのですね私達」

急に言われるから言葉がどもってしまった
そのくらいびっくりしたんだもの

だって口調からしてもう何年も働いているかのよだったから

「そうなんですよね、大して変わりません。改めてよろしく願いしますミアさん」

花を切り終わったのか籠には沢山の花が詰められていた
色とりどりの花は本当に綺麗

「もう、してやられましたわ．．．よろしく願いしますエルダンさん」

笑顔でそう返した

その詰められている花の中に．．．一輪だけ混ざりこんでいる猛毒の花

（笑顔で優しそうでも怖いわねー人間って）

綺麗な花に埋もれて一輪ひっそりと目立たない小さな花
でもその花は有名な猛毒を花弁に潜ませる毒花

触れば触れた先から腐り
近くで匂いを堪能すれば意識が飛ぶ

お茶なんか飾りで入れれば即死ぬような．．．ね

「本当にお綺麗な花ですわね」

私はわざと籠を見てうつとりと眺めた

するとエルダンさんはさりげなく私からその籠を遠ざけた

私は匂いを堪能するような恰好になったからだ
この反応は間違いない

「そんなに近づかなくともほら．．．」

そう言つて一輪適当に綺麗な花を私に差し出してきた
これも十分綺麗

でも．．．興味があるのはそれではないのよエルダンさん

「ふふ、失礼しました。でも、私その小さな白いお花がとても気に入って．．．よろしければ私にも一本下さいませんか？」

ニコリとエルダンさんをみて笑えばエルダンさんの顔から
優しい表情が消えた

「この花をご存じなのですかミアさんは」

エルダンさんの目線がふいにその白い花に向けられた

「．．．いいえ？どんな花なんですか？」

あくまでしらばづくれる私

エルダンさんは私をみて小さく笑った

「この花はあるお方に献上するとても大切な花なのです、ミアさんにも差し上げたいところなのですがそのお方にお渡ししなければいけないので．．．申し訳ありません」

とあるお方．．．

誰でもいいけどね

深入りするなと言っている目で私を見るものだから

私もそれ以上聞くことはしなかった

「あら．．．日が暮れてまいりましたわ、そろそろ私も失礼しますわねエルダンさん。今度お会いしたときにでもまたお話できれば嬉しいです」

私から別れを切り出せばエルダンさんも
多少残念そうな顔はするものどこかほっとしたよう表情をした

「こちらこそ、今度はミアさんに似合う花を切って渡しますからね。
そでは失礼します」

（私に似合う花？それは嬉しい）

私が笑えば意味が伝わったのか
エルダンさんは小さく頷いた

そうして私はエルダンさんを残して庭を後にした・・・

あの花は誰に送るものなのか
本来あの花はこの帝国でしか栽培されていない

各国には指定された花が存在する

この国の指定された花がその白い小さな花

一見引き立て役にしかならないような花だけれど
人を殺すのには花弁一枚で殺せるほどの猛毒だ

危険だから栽培されているのは王宮の地下．．．だった気がする
多分だけどね

そんな花を数日前に働き始めた庭師が手に入れられるような品では
ない

誰かに渡す．．？誰かに頼まれたのだろうか

まあ私は誰が死のうとどうでもいいんだけどー

さっきの庭師は確かに気になるけど
さらりと躊躇いもなく嘘を言う彼も面白いからそっとしておこう

そのあと私はぶらぶらと散策して
再び陛下の執務室の所へと行くのでした

城の庭その2（後書き）

この花も後々重要．．かも？

ミアンちゃん案外残忍なんです
ぶりっこにしたいんだけどね！

騎士の生活その1

次の日から私の仕事は始まった

陛下の部屋に行つて言われたことは私の部屋についてと主な仕事内容

部屋は私が最初に目を覚ましたあの部屋を使つていいらしい

なんでもあの部屋は利用されず使われていない部屋だったみたい

あんなに綺麗なのにね

勿体ないわ

そして仕事内容は

とりあえず陛下の傍にいてじっとしている・・・とのこと

陛下の傍で騎士をするなんて傍^{はた}から見れば

英雄エリート扱い

私・・・なんの苦勞もしないで入れたわよ

つて、これから沢山の山があるのは目に見えてわかるんだけどさ

起床時間は日の出から少し経ったくらい
これは私も森でそうだった生活をしていたから問題はない

そして服を与えられた

この服、一応陛下直属部隊の服らしい

女騎士は私で4人目とのこと
他の3人にもあってみたいな―

服は威厳を保つためと血が滲んでも見えにくくするための黒を基調としたもの

胸元には帝国の紋章が入り
偉い人になればなるほど襟元と袖に銀のラインが入る

騎士団長になると上にロングコートを羽織ることになっている
いざという時以外は動かないからだそうだ

シドさんが今はそれを着ている

勿論そのロングコートの背中に帝国の紋章が入っている

そのほかに帝国の花が何輪か咲いていて

黒と白の絶妙なバランスは私も着てみたいと素直に思った

そしてなぜか私にもコートが渡された

陛下曰く……

「お前専用だ。俺の傍にいる以上同じ格好はさせられん」

私のはシドさんとは大きく違っていて

中は黒で同じなのに

コートは純白というもの……

白に金のラインが入っていて

普通は白い花なのに私は黒で何輪か背中で咲いている状態である

（これは一体どういう意味なんだろうか）

貰った服を見ながらそう思うしかできなかった

シドさんと対になる・・・とても思えばいいのかな
なんて考えて止める

近くにいたシドさんが恐ろしく怖い目で私を見ていたからね

そんな妄想はやめます、はい

そんなこんなで迎えた今日
昨日の如くリリーに私は起こされ身支度みじたくをして貰った

私は子供じゃないんだけどなー
全く聞く耳を持たないリリー

陛下から渡されたコートだよって言えば凄く喜んでくれた

(なぜだ・・・)

「じゃー行ってきますリリー」

最後にコートを羽織って扉の前に立てばリリーは素早く扉を開けながら
私に微笑んで

「お似合いですわ、いつてらっしゃいませ」

そう言って送り出してくれた

私に専用の女官だなんてなんでつけたんだろ
．．．あ、一応魔女って設定だからか

廊下を歩きながらそんなことを考えていると不意に肩を掴まれた
その力は結構強い

反動的に振り返れば女の人が怖い顔をして私を睨んでいた

「あなた．．．一見騎士の服を着ているように見えるけどそのコー
トはどういった意味？」

この女の人も騎士なんだ
服が黒くて胸元には紋章がある

ラインは．．．3本
かなり強いんだね

ラインが意味するのは地位と強さ

ライン1本が普通の騎士

2本が戦場で指揮官になれる

3本は貴族の地位と戦場での総司令官を務められる

そしてライン4本が陛下が認めた陛下を守るための騎士

さらに5本、これは騎士団長のみに与えられるもの

ちなみに私は4本です

「陛下直属部隊に今日から配属されたミアと申します。説明は後程シド団長からあると思いますから．．．今は急ぎですので離れて貰ってもいいですか。」

私がそう言つてその女の人を睨むように見れば意味が伝わったのかゆっくりと手が離された

「私も急に失礼した。私はナタリーと言う、これからよろしく頼む」

「ナタリーさんですね、わかりました。それでは失礼します」

ナタリーさんって人は多分私のラインが見えなかったんだと思うだからあんな口調で私に話しかけてきたのかな

騎士は位がとても大切で・・・

って、ラインが3本も入っていること自体がかなり珍しいからね

4本なんて稀のまれ

3本は団長に認められればなれるけど

4本は陛下直々の指名がなきゃなれるものでもない

ぽつと出の私を見て思うのは精々2本ライン当たりが妥当だろうし

・

私はナタリーさんに軽く会釈して再び廊下を歩き出した

騎士の生活その1（後書き）

ナタリーさん

出ました、女騎士

女騎士って本当に聞こえもかっこいいですね・・・

軽く憧れます（笑）

騎士の生活その2

（漸く着いたわ）

目の前にある大きな扉

この扉の前に来るまで私は沢山の人たちから奇妙な目を向けられていた

そつと今羽織っているローブをつまむ

これのせいであるってことはわかっているんだけど

なんだあの女は

そんな目を廊下で歩いている最中ずつと向けられていた

目は口ほどにものを言う

どこかの国の言葉だけれどその言葉もあながち間違っではないないだろつ

息を整えて中にいる人に声をかける

「おはようございます陛下」

「入れ」

陛下が一言そう言えば扉は自然に開いた

陛下は一体どのくらいの魔力をその身に秘めているのか私にも正直わからない

いや、正確に言えばわかる

けれども今は私自身魔力がないから誰かを倒すことも誰かを守ることもできっこない

森や泉なら話は別だろうけどさ

あと新月の夜かな

扉が開いて目の前には机に座って書類を整理する陛下の姿がその姿を捉えつつ私は中へ入る

私が入ったことが分かったのか扉は自然と閉まった

（目に見える限りの魔力はあの庭師より少し少ないくらいね。でもこんな複雑な魔法がかかった扉を言葉一つで開けられるんだからそんな半端な魔力じゃないんだろっね）

見えない魔力は一体どこにあるのか
今の私にはわからない

まーこの場合

分かったとしても首を突っ込む気は更々なんだけどね

「遅い」

扉のすぐ脇のほうに置物じゃないかしら．．．と思うくらい直立不動の恰好をしたシドさんがいた

そして言われた朝一の一言が遅い

いつの間に帝国の挨拶が荒んだのかしら．．．

と、思いたくなるくらい

村の人たちはみんな優しく話しかけてくれたのになー

この暮らし、僅か2日目だけれども森に帰りたいと思った
確かに眠りやすいベッドだって美味しい食べ物だって体だって暖かいお湯で洗えるけど．．．

森だったら新緑の木の葉で作ったベッドがあるし、バナナの実だって食べ放題だし泉があるから水の精霊に頼んで焔の精霊を呼び出せば温度調節は少し難しいけど温かいお湯だってできる

そうじゃなくても魔力が戻ればはつきり言って私にできないことは
ほぼない

．．．そんなこと、言える立場じゃないんだけどね
一応あのハゲに軟禁されるために私を閉じ込めた籠なわけだからそれを考えれば嫌で仕方がないけれども

でもその後自由を手に入れてからは本当に楽なのよねー

「すみません、途中話しかけられてしまったので」

トリップして過去の余韻に浸りそうになる頭を動かす

（なんだ、お前に話しかける奴などいないだろう的な目は）

シドさんはそんな私の返しに対していやな目で見てきた

「次はもう少し素早く行動するんだな」

お咎めを受けてしまいました

眉間に皺を寄せてシドさんにそう言われ私は渋々頷いた

私が本物の騎士だったらこんな態度許されないだろうけどそこは陛下直々の命だから妥協する面もあるんだと思う

「今日の仕事内容だが、とくにはない。一々指示を出されると思うな、独断で行動しろ。俺を守るためにな」

書類から目を移すことなく私に向かって話しかけてきた陛下

あまりに適当だから文句の一つでも言いたくなっただけそこは我慢ね

「はい陛下」

優雅に腰を少し折ってお辞儀をする

陛下勿論見ていないけど

このお辞儀はリリーが教えてくれた

いろいろな場所でも大切だから覚えるべきだと

リリーってば凄いわね

「では邪魔にならぬところで立っている」

（あー、毎日ただ立ってるのではないよね？）

そんなことを考えながら私はシドさんの横
詳しくは扉を挟んで構えるように立った

正面から見ればきつと門番的な感じだろうね
私達

チラリとシドさんを見れば変わらず陛下を見据え静かに佇んでいた
これからが思いやられるわ

騎士の生活

私的には毎日訓練に励むものだと思っていたけれど

私やシドさんは陛下専属の騎士だから陛下から陛下から片時も離れちゃいけないんだと思う

ではいつ訓練するのか
きつとシドさんは夜と朝、何かをしてその屈強な筋肉を作り上げているのでしょね

私もこれから筋トレでもしようかな
そんなことを考えていた

騎士の生活その3

陛下が動いたのはそれから暫く^{しばらく}してからのことだった

全然動こうとしな陛下を見ながら

シドさんはこんな時何を考えてるのかなーと一人考え
変な妄想に浸っていたところ陛下が動いてくれた

勿論私たちにかける言葉なんてなくて
一人で執務室を出ていつてしまった

私たちも後^{おく}れを取らないように陛下の後ろにつく

シドさんは毎回のことだからいいとして
私に対する視線は正直痛いものだ

(シドさん、早くほかの騎士の人に私を紹介して欲しいなあ・・・)

陛下の行く場所は私には全然わからなくて
昨日こんな道あったかな？って思うところばかりを進んで行く

シドさんは慣れたもので前後左右を警戒しながら進む余裕があった

私がそんなことしたらきつと迷うわ
陛下だけを見つめながら進む私

少し歩いて着いた先にはこれまた大きな迫力のある扉だった

（うーん、この扉も何か仕掛けがありそー）

私の部屋の扉には仕掛けなんてものはなかった
要は特別な部屋にのみ扉にも魔法がかかっている状態なんだと思う

しかも”関係者の言葉でしか開かない”ってオプション付きね
．．．と、勝手な解釈を試してみた

すると不思議な光景が私の目に飛び込む
陛下は言葉を発しないで指で軽くその扉の線をなぞった

魔力の脈動をなぞるように優しく緩やかに
そうすれば扉が鈍い音を立てて開いた

（一瞬しか見ていないけど陛下の手・・・きっと魔法以外にも鍛錬してるのかもしれないわ）

男らしい手

だけど何もしない温室のお坊ちゃんのような手じゃなくていくつもの経験をしてくているような手だった

陛下がその部屋へ入っていく

私達も後に続いて入っていった

――

（これはこれは・・・見事なもので）

私達が入ると扉はすぐに閉められた

いや、直ぐに閉めなければ害を及ぼすから

300年生きる私でも初めて見る

幻想的な純白の世界

見渡す限りの白

陛下は数歩進んでその白い絨毯の上にしゃがみ込んだ

「どう思うシド」

一輪、手折ることはせず静かにシドさんに話しかける陛下
感情の読み取れないその表情

「はい陛下．．．どうにも毛色の違う輩やかが入り込んだようですね」

淡々と答えるシドさん

だけれど少し．．．いや、大分目が逝っていたと思うのは私だけ？

「お前には説明をしていなかったな。ここにある花は全て猛毒を持つ、今は地に根を張っているから安心できるが手折るなよ。忽ち毒たちがこの空気を汚染する」

にやりと．．．私を脅すかのような表情

（馬鹿にしているのか陛下は）

「知っていますよ、この花は帝国指定の毒花　アルファスの涙で
すよね？」

私も横目でその花を見た
綺麗でとてもかわいいのだけれど、残念ね

「そうだ、普段ならこの場所でのみ栽培され俺と俺の臣下・・・宰
相しか入れぬ場所だ」

そう言つて陛下は花を優しく撫で立ち上がる

「だが・・・可笑しなことに何者かが入った形跡がある。どう思
うお前は」

（それは、あの庭師のことかな）

思いたる節がある
でも、エルダンさんは躊躇いもなくこれからあの花を使って何かを
やり遂げるだろう

私はそれに少なからず興味を持っている

誰にあのアルファスの涙を使うのか・・・を

「誰かを殺したいのでは？」

花から目を陛下に移す

陛下の目は先ほどとは大きく違って好奇心が湧いた子供の様な目をしていた

「誰を殺す」

「一概には言えません、大切な人であつたり憎むべき相手だつたり」

シドさんはそんな私達の会話を黙って聞いている
そう言えば、シドさんは私が魔女だつてことを知っているのだろうか？

「そうか・・・では命令だ。この花を盗んだ者を俺の前に連れてこい」

指示は出さないんじゃないのかしら
私をみながら陛下はそう言った

シドさんには言っていない
・・・と、言うことは私にのみ与えられた指示なのかな

「賜りました陛下」

陛下に一瞥^{いちへつ}すれば、当の陛下は何も言わず
また花に視線を移した

（なんで・・・ここに誰かが入ったことが分かったの？）

あの扉を開けられるだけの手練れ
要はきつとエルダンさんはそれだけの人間

でも・・・それを超える陛下

きつと何かを察したから陛下は執務室から足をここまで運んだ
それもかなり確信があつたからこそ

「私にこのような場所を教えてもよろしかったのですか？」

我ながら変な質問だと思う
でも、こんな兵器みたいな花が育っている場所を私なんか教えて
いいのだろうか

1年の契約

それとは釣り合わないほどの重い帝国の秘密ではないの？

「馬鹿だな、お前は簡単に俺からは逃げられん」

背筋に虫が走るようなゾワツとした感覚が全身を襲った
それはどういう意味だろう

陛下の目は冗談を言っているようではなくて、私は何かに囚われた
かのような錯覚に陥った

「．．．それはそれは、陛下を甘くみていました」

「貴様陛下になんと無礼なことを」

私の言葉にいち早く反応したシドさん
今にもその腰についている剣を抜こうとしていて

「よいシド」

そんなシドさんを陛下が薄く笑って止めた
陛下の言葉に渋々剣の鞘から手を外す

「申し訳ございません」

何を思つての発言だろうか今は

”逃がさない” だなんて陛下の様な綺麗な人に言われれば下手に取る人間だっているでしょうに・・・

「では行け」

私が謝ると陛下は気にも留めていないかのように私にこの部屋から出ていくことを促した

その言葉に私は素直に動く

（シドさんの目が怖いからね）

花を踏みつけないようにゆっくり扉に向かって進んで行く

”逃がさない” それがどういった意味かは知らないけれども
とりあえず今はその花を持ち出した人間をどうにかしなければいけない

私がエルダンさんの命をその手に握っている、そう言っても過言ではない

（ま、少しエルダンさんとお話しでもしながら殺すか生かすか決め

ようかな)

そんなことを思いながら私はその白い空間から抜け出した

騎士の生活その3（後書き）

陛下ってばどついつ意味かしら

騎士の生活その4 SIDE陛下

――涙が奪われた

（五月蠅い蠅が一匹潜り込んだかと思えばよもやこの帝国の花を無断で奪うとは）

執務室の静かな空気の中
俺の耳に届いた一つの知らせ

いつからか知らぬ魔力がこの王宮をうろつろしているのは分かって
いた

むしろそんな輩を一々掃除してはきりがない
害がなければ放置するのみ

動けば殺す
動かなければ観察するのみ

この不動の地位についてから
多くの人間がこの王宮を出入りするようになった

簡単に侵入できる手薄の城

今は他国の幹部の者共はそう思っているらしい

^{あなが}強ちはずれではないだろう

来る者拒まず．．それが宰相の考えなのだから

勿論去るものは消すが

チラリと今月の予算案の書類から目を外し新しくついた女を見る

魔女．．自分からそう言ったのだから

それ程の力を持っているのだろう

見た目は非力で何の取り柄もないような女だが

いいのは顔．．だろうか

そこまで考えて思わず苦笑する

俺が女を観察するなどあったか？

別に女が嫌いではない

東の王は女が嫌いだと有名だがな

その時その時俺の欲求を解消してくれる

それ以前に女という生き物が居るだけで多少癒されもする

この女は俺にこの1年何をしてくれるのだろうか

求めるものをくれるのだろうか

．．馬鹿馬鹿しい考えなのかな

どこを見ているのだろうか

シドとは違いあたりをよく見渡している

そんなに珍しいものがこの部屋にはあるのか

あの剥製の鳥もこの女は終止珍しそうな顔をしていたな

今度部屋に別の鳥の剥製でも送ろうか

そこまで考えて思考を止める

そもそも今はそんなことを考えている暇はないな

ふと、女を見て思った

（そうだ、この女を連れていこうか。どんな反応を見せる？）

まだ宰相からの報告は無い

暇つぶしでしかないのなら少し遊んでみたいものだ

魔女が現れるまででいい

女が自分で魔女だと言った

不動の立場で在るが故にシドのような反応しかない者が多い

そのなかでこの女は俺には新鮮過ぎた

無言席を立つ

どうするのかと思えば女は俺を見たままついてきた

シドは流石、というべきかあらゆる殺気を跳ね除けるだけの目をし
て周囲を警戒している

（俺に従順過ぎて困るがな）

女は．．．後ろは振り向かないが気配でわかる
ただひたすら俺についてきていることが

そんなに早くは歩いていないつもりだが．．．
少しは道を覚える

そう思いたくなるぐらい女は俺しか見ていない
自惚れにしか聞こえないだろうが事実だ

その姿を、必死について来ようとする小さな女を見て
少なからずその白く細い手を握り俺が引つ張りたい．．．そう思う
のも悪いことだろうか

この地位がきつとこれから先自分の恋路を邪魔することは重々承知
の上だ

まあ、今更恋だのなんだの語る口など無いが

（どこまで俺に嘘をつける）

目の前には特殊な魔法が施された扉

この扉は俺と俺の臣下にしか開錠の仕方は分からないしできない

古狸が今更余計なことに首を突っ込まれてしまえば俺のしたい政治
ができないからな

扉の前、思うことはそれだけだった

嘘をついている．．．とは一概には言えないだろう

今はやりたいことを、したいことをさせているつもりだからな

だがそれも今のうち

何か動きがあれば俺はお前を殺すぞ

俺の力は魔女に匹敵すると思っている

こんなことを言えば国から反感を受け忽ち俺が殺されてしまうがな

古に存在した純潔の魔女

唯一の生き残りを、我が国の馬鹿な男が残した中央の魔女

俺は生きている間に必ずその魔女を見つけ

彼女の自由を俺のできる範囲で叶えてやりたい

それは幼いころから魔女の話を聞いていたからこそだ

そのためにはお前が必要だ

1年の契約

その間、俺にお前を殺させてくれるなよ

密かに気に入った女だ

1年後お前がまだこの城に居たいと言うのであればお前に居場所を
与えよう

優先順位は二の次だが相応の待遇をしてやる

指先から魔力が溢れ扉へと伝わる

それによって徐々（じょじょ）に扉が開き始めた

目の前に広がるこの国の戦力の一つ

花を愛でる趣味は持ち合わせていないがこれは別だ

数歩進み近くの花をそつと触る
折ってはだめだ

——花が持ち去られた
我等が王よ、花が一輪知らぬ輩に奪われた

囁くように怒りと焦りを露にした声が聞こえる

『既に目星はついていて、お前たちが騒ぐことではない．．．気を
静めろ。この場に慣れない人間がいるだろう？』

その声に優しく宥めるように返せば
声は困惑し始めた

——人間？なぜ．．．ああ、人間。そうか、そうだったのか．
．我等が王よ貴方がそう言うのであれば我等はただ静かに見守り
ましょう。我等の意思は貴方とあの御方に

声は次第に喜びへと変わった
何に疑問を抱いたのか

精霊は純粹だ
その純粹な精霊が”あの御方”と、そう言った
これが珍しいわけではない

以前にもそう言っていた

”あの御方の御霊が再び戻った”

”あの御方が動きだした”

あの御方とはきつと魔女を指すのだろう
魔女は幾千の母であり生きた歴史

俺が探す俺が今この地位にいる意味
それは全てお前が握っているぞ魔女

この場から花を持ち出した愚かな人間
それを俺は知っている

（お前も知っているだろう？）

連れてこいと命ずれば女は挑発的な目で俺を見てきた
本当に飽きない存在だ

逃がしはしない

まだ、お前には利用価値があるのだからな

去って行く後ろ姿を見て思う

あの女にどこまでできるのかと・・・

「陛下、あんなことを仰ってよかったのですか？勘違いする者も多いですぞ」

女が退出した後シドが話しかけてきた
その顔は非常に険しいものだった

切りかかろうとしていたくらいだからな

「勘違い？そんなことをするような女に見えるか？」
「私には、そうしか見えません」

俺の意見をバツサリと切り捨てた男
女嫌いにも程がある

（勘違い・・・したのならそれまでだ、と云う事だろう？）

あの目は試される覚悟があつたのを分かったようだった
そう思つて違かつたのなら俺もそれまでと云う事だ

「いい、放っておけ。動きがれば俺が殺すまでだ」

睨みつけるように扉を見る

「御意」

無音無色のこの部屋で
俺は考える

魔女が現れるその日まで

騎士の生活その4 SIDE陛下 (後書き)

SIDE陛下はどうでしょう？
今回2度目！！

文才が欲しくしょうがない

水面下で遊戯その1

私がまず向かったのは先日、エルダンさんと話した庭
今日も見事に花が咲き乱れている

これを、これだけの庭を造るのにはどれ程の時を有したのだろう？
数多くの種類が視界一杯に広がる

足を進める度に花の蔓が足に絡み付くようにサワサワと動いている
のを感じた

ここも同じ

私の領域

そんなことを考えていると目の前にエルダンさんの姿を捉えた

私の気配に気が付いたのか

私が話しかける前にこちらを振り向いた

この姿を・・・どう思っただろう？

（きつとエルダンさん、私が新米のペーパー騎士でしかないと思っ
ていたに違いないわ）

そう、エルダンさんは私が思わず笑ってしまいたくなるような少し
間抜けな顔で私を見つめてきていた

「こんにちはエルダンさん」

にこり

笑いかければつられるようにエルダンさんも笑ってくれた

「まさか・・・ミアさんがそんなにお強い方だとは思いません。失
礼いたしました」

少し土で汚れた頬をシャツの袖で拭きながら一瞥された

「畏まらなくていいと言ったはずですよ！私もまだまだ未熟者です
から」

両手を前にだし
左右に振る

困った表情を見せればエルダンさんは笑ってくれた

自然すぎるほどの微笑を私に向けた

「そうそう、ミアさんに似合う花があったのであちらに植えていたんです。よろしければ見ていただけませんか？」

急に思い出したかのように私にそう言ったエルダンさん
私に似合う花をくれる

前に私がアルファスの涙に興味を持った時エルダンさんが約束してくれたもの

（どんな花なのかしら）

エルダンさんは慣れたようにその庭を歩き始めた
私の背丈以上ある花が視界を悪くする

ゆっくり歩く分には綺麗って思えるけど
今は花が邪魔で仕方がないわ

私と違ってエルダンさんはスムーズに歩いていく
まるで花がエルダンさんをよけるかのように

（少し・・・少しだけ道をあけて？）

心の中で静かに願う

すると花は私が一步を踏み出すタイミングを見計らってよけてくれた

大まかによけることはしないから
変に思われる心配もない

ありがとう

そう心の中で呟いて進みだす

さつきとは違いかなり快適に進むことができる

「大丈夫ですかミアさん」

時折心配するかのように私に尋ねてくる
当の本人は私からは見えないけど・・・

「大丈夫です!!」

やや大きめに叫ぶと案外近くにいたのか、なら安心です、と聞こえた

そして視界が広くなる
こんなところがあったんだ

目の前に噴水がありその周りを黄色の花が囲んでいた

奥まで行くとこんな庭なのね

一人納得品からエルダンさんについていく
足元には桃色の花が咲いている

「ここ、案外知られていないんですよ。」

噴水の前で立ち止まり

エルダンさんはそう呟いた

「こんなにきれいなのに」

私もエルダンさんの傍に行き立ち止まる

なんでこんなに綺麗なのに誰も来ないのだろうか？

「綺麗ですよね」

エルダンさんの視線が噴水の上を見ている
その視線を追えばあることが分かった

（そりゃ・・・知らないでしょうね）

数秒前の疑問が一瞬にして消える

この場所は本来は来ちゃいけないんだよエルダンさん

私の目が噴水からエルダンさんへと再度向けられる
エルダンさんは静かにただ見ていた

噴水の周りを黄色い花が囲んでいて
背丈は私の膝くらい

よくよく見渡せば

この噴水から流れるように幾つもの水の道ができていた

ここから王宮や街に水が行くのかな

こんなにきれいな場所

（普通の人間が入れば簡単には出れないのよ）

あの黄色い花は飾りじゃない
噴水を守っている花

黄色い花はかつて東の魔女がこよなく愛した花だった
リーナ姉さんはこの花が大好きで、袋に入れば匂い袋になって・
・薬にもなる花

でも魔力を感じればその匂いは悪臭となり嗅覚を麻痺させる

薬が毒になる．．．多重人格と呼ばれる花

そしてこの空間

とくに噴水からは濃く純度の高い魔力があたりを包んでいる

森に比べればそれほどまででは無いかもしれないけれど
それでも純度は高い

花はこの純度の高い魔力を吸い続け、ほかの魔力を受け付けはしない

（エルダンさん．．．貴方がフツウの人間ならば、この空間は苦しいものなのよ）

細く

私の口元が上がる

目は未だエルダンさんを見たままで

至ってなんともないように立っているエルダンさん
本人に自覚症状なんてなんでしょうね

本当にこの男は面白い
そう思わずにはいられなかった

私は目線をもう一度噴水の上に向ける

そこには・・・水の力で落ちずに空中にとどまる

”東の魔女の御霊があつた”

水面下で遊戯その1（後書き）

話がいつきに動きます!!

水面下で遊戯その2

(こんなところにあっただの)

静かに・・・ただひたすら静かにそこに静止するリーナ姉さんの御霊

眠りについた魔女の行方は誰一人として
知ることは無かった

私でさえ、わからなかった
私の同胞
私の仲間
私の唯一の家族

この男は、エルダンさんは分かっているのだろうか
この水色をした綺麗な水晶が東の魔女の御霊だと云う事を

知っているのかもしれない
目が・・・この御霊を見る目が他とは違っていたから

「この水晶、綺麗ですね」

私がそう言えば

エルダンさんはさも自分のことのように顔を緩めて優しくそんな眼差しで水晶を見ていた

「そうでしょう?」

分かったことがある

この男、東に住む者で間違いはない

黄色い花は東ではどこにでも咲いている

争いを嫌ったリーナ姉さんは魔法をむやみやたらに使わせないようにこの花を街中に植えた

きっとエルダンさんはこの花を見慣れているから

この場所で魔法を使っちゃいけないことを知っている

「この水晶、ミアさんには何に見えます?」

目線が私へと向けられる

あえて私はエルダンさんと視線を交わらせないようにする

「・・・さあ、でも大切なものだと思います。端くれですが、強い魔力を感じますから」

「この水晶が欲しい、なんて烏滸^{おこ}がましいことだとは思っています
が．．．どうしても触れてみたい」

戦慄^{せんりつ}のように彼は言う

その姿がいつか見た王の面影を私に写した

そこまで考えて結論が出る
簡単なことだった

魔力が人並以上にあつて
あの扉を開けることができて

この空間に対してなんとも思っていない

（エルダン．．．考えた名前ね）

カザエル・ダンジュール

現東国王であり病弱と言われ俗世には出てこない

しかし、安定した国作りとその方針は
病弱という欠点をも凌ぐと言われている

いつかの、私に枷を付けた男の子孫
よくよく見ればどことなく似ているかもしれない

「エルダンさん。この水晶は何かご存じなんですね？」

視線がぶつかる

私の確信したような目にエルダンさんは笑った

「ハハハ！．．．ライン4本のミアさんこそご存じではないのですか？」

刹那

風が変わった

エルダンさんは人が変わったように
私を蔑んだ目で見てきた

「まさかただの新米騎士だと思っていましたが．．．帝王が認めた騎士だったとは。予想外だ」

そう言って私から数歩、離れるように下がった
その意味が何となく分かる

これからこの人は私に何かをするつもりだと

「私も予想外でした。」

素直に述べればエルダンさんは馬鹿にしたように笑う
本当のことを言ったまでなのに

「手薄になったものだこの城も。．．この水晶は、我々が崇拝すべき東の魔女の御霊ですよ」

なんと云う事だろう
人間が殺した筈なのに

よもや崇拝などと口にして
笑うどころか呆れてしまう

（手薄．．だと思っているのはあの陛下を知らないからよ。）

私でも少し恐怖を感じるような人
陛下はきつと強い

そう私は思っている
手薄な城が落ちない理由なんて一つじゃない

「袋の鼠は．．そう簡単に外の世界に逃げ出すことはできません。」

独り言のようにつぶやく
あえて魔女の御霊には触れない

「何が言いたいんですかミアさん」

傍から見れば静かで穏やかな雰囲気だけれども
一度近くによればきっとそうは思わないような殺伐とした空気

「陛下が怒る前にこの城から出ていくことをお勧めします」

やわらかく笑かけながら外に出ることを私は促した
ここで捕まえては面白くない

他国に己を偽り

帝国の花を奪うなんて無茶をする人間

見ている分には当分飽きない
そんな楽しい存在を私は消したくなんてない

「ミアさん、きっと貴女は私．．．俺の正体が分かったのでしょうか。
陛下直属の部隊で陛下指名のミアさんならばきっと。ただ俺もなる
べく関係のない人間は殺したくないんです」

そう言ってエルダンさんは
一輪、黄色い花を摘み取った

「見過ごせと？」

「その通り。俺が目的を果たすまでで構わない．．．それまでは黙っていてはくれないだろうか」

その目的は何か

アルファスの涙を使う時点でその目的が良い方向に傾くはずがない

黙っているなんて随分上からの目線

笑うエルダンさんは、どこか脅迫めいていた

「東の王カザエル様．．．我が領土への許可のない侵入は本来であれば大罪にございます。どうか、我らの花をこの場に置き早々に立ち去ることを願います」

片膝をつき

敬うように私は彼を見た

数日前

会話を初めてしたときはとても笑顔が似合う優しい人だと思ったけど

私が騎士になった途端

既に私たちの間には影ができた

「交渉は・・・」

「破談にございますカザエル様」

私が言うのが早いのか

彼が動くのが早かったのか

静かで美しい魔女の眠る地に騒音が鳴り響いた

水面下で遊戯その2（後書き）

次の話から

戦闘描写

．．．展開が早いかな

次の章はゆっくりにするつもりです

水面下で遊戯その3（前書き）

流血

戦闘描写が多少入ります

苦手な方はバックお願いします

水面下で遊戯その3

黄色い花が空を舞った

轟音があたり一面に響き渡る

（己が崇拝すべき対象の前で血を流すつもりかこの男は）

彼が動いたその瞬間

私は後方に飛んだ

あと少し、私の判断が遅れていれば私は黄色い花によって串刺しになっていたわね

私が居たその場には無数の黄色い花の蔓が刃のように突き刺さっていた

流石は東の王だけある

この花の使い方をよく熟知しているわ
それと同時にヒヤリとさせられた

彼は私を本気で殺そうとしている
そう思わずにはいらなかった

あの一撃は本気だった
隙も力も研ぎ澄まされた一撃

「流石帝王が選んだ騎士なだけがあります。見た目からは想像できない瞬発力だ……」

褒めているのだろうか
貶めているようにも聞こえる内容だわ

彼はさつき摘み取った花を優しく撫でながら
狂気を宿した目で私を睨みつけてくる

眼光が陛下と同じ
意志が強く、曲げない……己の立場をよく理解したその姿

（嫌な相手。こんなに面白そうな男を消すのは本当にもったいない）

久々にゾクゾクするのが分かった
体が……魔女としての本能がこの戦いを望んでいる

なんて野蛮な魔女
睨みつけられるその目を見ながら私は自分の悍ましさに笑うしかなかった

「このような場で．．．あなた方の国の魔女が眠るこの地で血を流すこと、些いささかか惨いのではございませんか？」

フラリ

足元が少し平衡感覚を失ったような気がする

いや、それが普通なのだ

今の状況で．．．長引けば死なないとはいえ何年かは寝たきり生活を強いられることになりそう

それは少々避けたい

——本格的に黄色い花が本領を発揮し始めたのだ
魔力に敏感なこの花は私ではなく彼の魔力に反応した

黄色い花は目には見えない粒子を空气中に充満させている
神経が麻痺し、あらゆる機能を停止の状態に近づける

ただ、彼は東の王

こうなった時の回避の仕方も知っている

目には目を

毒には毒をもつて解毒の作用となす

黄色い花には親がある

一見どれも同じに見えるその黄色い花

実は一輪だけ花弁が7枚ある

他の花は5枚

その親の花の花弁には解毒作用がある

何万本ある中で見つけるのは早々たやすいことではないけれど

この場に咲く黄色い花

一輪だけある7枚の救いの花

(その一輪を．．．彼が持っているのよね)

絶望的ともいえるこの状況

魔女といえども万能ではない

できないことは無いけれど

威力は限られているのだから．．．

そう、さつき彼が手にしたのは
その親の花

見れば一枚花弁がなくなっている

余裕の笑みに私は苦笑するしかなかった
自然は私に手を貸してくれる

でもこの場所は残念ながら分が悪いみたい

（この領域は・・・私のモノではない）

リーナ姉さんが眠ってもリーナ姉さんの御霊がある
だからだろうか？

さっからこの場所にある数多の自然に声をかけても
私に反応することは無かった

「辛そうですねミアさん。大人しく頷いていればいいものを」

同情の眼差しで私に近づいてくる

私を追い込むなんて人間・・・いるんだね

そう思わずにはいらなかった

あのハゲは別

私を軟禁した帝王はそれは馬鹿だったけど
馬鹿になる前は確かにいい男だったからね

なんて、こんな状況でふと思った

自然を操れない今、私に残された選択肢は
静かにこの場に立っていること

下手に動けば私の動きに反応して花が粒子をより多くまき散らして
しまう

唯一いいのは
この恐ろしく密度の高い魔力が粒子が外へ出ることを妨げているっ
て所かしら

「死が怖いですかミアさん。まだその職に就いたばかりだというの
に残念ですね」

コッソ

目の前で彼が止まった

見上げる形で彼を見る

背に太陽が降り注いでも、染まることのない漆黒の髪

庭師の彼の姿は

明るい鈍色のくすんだ茶色だったはず

これが本来の彼の姿だというのなら

あの時私が彼を昔枷を付けた男に似ていると思ったのも強ち外れではないはず

あの男も輝くことのない

どこまでも深い黒をまとった人間だった

私が反応しないでただ無言で見つめているのが気に食わなかったのか
彼は眉間に皺を寄せて再び口を開いた

「まだ、話す口は残っているでしょう」

その言葉に私はフツと口元を歪めて笑うだけだった
そろそろ立っていられなくなってきた

（じわじわと感覚が無くなっていくのが分かるってつらいわ）

全身の神経が機能を停止していくのが分かる
血の巡りがどんどん遅くなる

下半身から上に駆け上がるように粒子が体を駆け巡る
拷問用の花なんだもの

頭と口は使えないと不便よね
この黄色い花は悪く使えば拷問用になる

彼が私にまだ喋れるだなんて言ったのも
この花の特徴を知っていたから

何も言わない私を見て苛々してきているのが分かった
殺気がビリビリする

パンッ！！

その音と同時に私の頬が熱を持った
叩かれた・・・理解した瞬間に今度は体の中心に激痛が走る

（いったいわ・・・口の中絶対に切れた）

私が動けないことをいいことに
頬と腹部をこの男は殴った

口内で血の味がしたことから
きつと切ったのだろうと思う

お腹の痛みも尋常じゃない
立ってられないけれど、神経が麻痺している今座ることも許され
ない

「ああ．．．女性に手は出さなくなかったですかね。あまりに
も強情なのでつい」

彼はそう言って笑った
なんにも思っていない表情で．．．

「俺はあの水色の水晶が欲しいのです。ただ、触れようとすれば何
かに弾かれる．．．どうやったら手に入れられるのだろうか」

彼は、純粹にリーナ姉さんを崇拝しているんだ
子供の様な目で強請るようにその水晶を見上げていた

純粹と狂気は紙一重
純粹すぎる思いはあまりに危険

国王でありながら、ここまで魔女に執着する理由はなんなのか
もしこんな状況でなければ聞いてみたかった

（でも、そろそろ限界）

視界が霞む

体が後ろに倒れていくのが分かった

多分、この後私はこの場所に放置されてしまうか
彼の手によって肉塊にされてしまう気がする

この場所に放置されれば
私は多分、このこの空気に慣れるために数十年眠らなければいけない
肉塊にされ放置されれば
数百年はかかるだろうね・・・

「——死ぬ・・・か」

彼が何も感じない様子で私が倒れる瞬間呟いた
どうでもいいかのように、私を見て・・・

「死なせるわけがないだろう俺が認めた騎士だぞ」

意識が飛ぶ寸前

叩きつけられると思った体は暖かい何かによって包まれた

そして、見えないけれどきつと

陛下の声が聞こえた気がした

水面下で遊戯その3（後書き）

はい、次のターン

ここは王道で締めたいっす!!

水面下で遊戯その4 SIDE 陛下（前書き）

陛下視点です！

水面下で遊戯その4 SIDE 陛下

その女の、逃げずに立つ姿勢に俺は驚くしかなかった
気が付いた時には足が動き

手が伸び

女を支えていた

口が頭より先に開く

己が口走った内容もすべて俺自身の意思だと云う事に
やはり驚くしかできなかっただろう

「暫く自室に戻る」

この色のない白い部屋で数分

やっと俺は次の行動に移す決心をした

「私もその場までわたくしご同行いたします陛下」

まるで金魚の糞だなお前は

俺が一步踏み出せばシドは少し慌てたようについてきた

「よい」

「ですが．．．」

俺の安全を気にかけてくれることはありがたい
これでも信用できる奴はこの王宮には少なすぎる

年若い帝王の下で働くのがそんなに嫌なのか
俺の命令だと、地方の貴族は民から重税を迫っているようだしな

未だ俺がこの地位についても
私腹を肥やしのうのと歩き回る狸が多くいる

笑わせる

俺ができることなどたかが知れている

賢帝と言われようと
敵がいるのも確かだ

それが悪いわけではない
狸の言い分然り、民の反応然り

頭ごなしに否定するつもりもなければ肯定するつもりもないが

帝王である以上、言葉一つ気を付けなければならない
その一言で国は大きく動かせるのだから・・・

だからこそ忠誠心が何より俺は怖い
シドのように俺を命に代えても守ろうという意志は俺にとっての重
圧ではない

信用できる者と

忠誠心がある者は違う

シドは俺の言ったことを必ず遂行するだろう
それだけの忠誠心があるからこそ俺は騎士団長にした

それは俺がシドを信用しているからだ
何があっても裏切らないシドが近くにいることが何よりの安心で

ただ、その忠誠心があまりに重い
矛盾しているだろう

だがその矛盾が今までもこれから結局は続くのだろうか

「^く諄いぞ」

振り向くことをせず、シドに有無を言わせぬ声で言う
こういえばシドがどうするかわかっていての言葉だな・・・

「出過ぎた真似をいたしました。夕刻より宰相がお戻りになる予定にございます、その時間までには御帰還下さいませ陛下」

宰相が帰るのか

魔女関連のことで動きがあればいいのだがな

シドの言葉に頷き

その部屋を後にした

そのままその足で

王宮の裏にある庭へと進んだ

（もう行動するとは、頼もしいな）

貶し言葉ではあるが
そう思ったのだから仕方あるまい

——早く早く
我が君・・・時を争状況です

あの女が出て行つた数分後のことだ
俺の周りが一気に騒がしくなったのは

頭に直接声が響く
その声音は酷く焦っている

声が導くまま、俺はただ進んだ
太陽が既に高いところまで上がっているのを見ると

夕刻までそこまで時間は無いようだな

着いた先は庭だった
何もない

先々代の王が愛娘のために作らせた庭
幻想的なのは分かるがもう少し質素にならなかつたのかと思つぐらい煌びやかな庭

だがここではないらしい
いまだに声が頭に流れ込んでくる

また、声が教えるまま．．．普段は決して踏み入れることのない
その庭へと進んで行った

（そう云う事か）

一面に広がる多色の花
ただ、奥へと進んで行けばそれで終わり

うまく道を進めば．．．
その先に見えるのは水を司る魔女の御霊が眠る領域となる

進む手前

微かにあの毛色の違う輩の魔力を感じた

その者もまた、この道を知っていたのだろう
これは驚いた

相当の手練れであることが分かったのだから
この道は秘密を守るためにある道ではない

間違っではいけない様に、何も知らないものを入れないよう守る道

魔女の領域は

フツウの人間には行くことのできない神なる区域

迂闊に入って死んでもらっては困るからな

だが．．．意図的に入ったようだ
その輩と一緒に、よく知った弱い魔力も感じ取ったからだ

（死んでないといいがな）

女の身の安全を多少気にしながら
間違っことをせずただ順に従って歩いた

ピチャン

どこからともなく水の弾く音

次第にザーッと流れる音が聞こえた
そう、目の前には大きな噴水がある

そして足元には桃色の花と
奥に黄色い花が咲いていた

（久々に足を踏み入れた、眠ってもこの魔力を未だに出すとは・・・
純潔の魔女は未恐ろしいな）

世間一般

魔力があると思われる俺はこの不可侵領域でもそれ程害はない

ただし肌がビリビリするようなそんな感覚

——・・・そうで・・・ね、・・・なく・・・も・・・を

目的の人物は俺の目と鼻の先
近くで既に戦いが始まっているようだった

俺はまだ出てはいけないと
静かに見守る

だが見る限り
あの女はもう動けない様子だ

（この領域でまだ意識があることが凄いことだ）

新鮮な反応を見せるだけの女にとって

この領域は女に死を与える場所に過ぎない

俺がここに来るまで

意識があっただけ、それだけで稀だ・・・

「――まだ話す口が残っているでしょう」

漸く聞き取れた声の主を見れば

それはよく知った男だった

（まさか東の王が俺の国にいたとはな）

どこかの国の間諜だとは思っていたがまさか王自らだったとは

これでは迂闊に殺すことは出来なくなりそうだ。

チツと聞こえないように舌打ちをした

その瞬間

やけに乾いた音がした

目をやれば、動けなくなつた女に手を挙げている姿

今．．．ここで出ていきたいところだが、相手が一国の王だとすれば
お前の命はここで散つても文句は言えないんだ

自身が危険を冒してまで来た理由

それを知らなければ俺も動きようがないからな

何の感情もないような目で笑うカザエル・ダンジュール
その表情に虫唾が走る思いだった

「俺はあの水色の水晶が欲しいのです。ただ、触れようとすれば何かに弾かれる．．．どうやったら手に入れられるのだろうか」

（まだ、お前に猶予があつたらしいな）

後ろに倒れる女に俺は手を伸ばす

真意が分かつたのならはお前をこのまま見殺す理由にはなりはしない

俺は飛び出し

その女をしっかりと抱きとめた

「死なせるわけがないだろう、俺の認めた騎士だぞ」

腕にぐったりともたれかかるように女は意識を失っていた
よく見れば口元から血が流れている

さっきの乾いた音の原因はこれで間違いないことが分かった

正面を見れば

カザエル・ダンジュールは心底驚いたような表情をしていた

（あまり構っている時間はないな）

視線を腕の中にいる女へ向ける

長居できないのは重々承知だ

もう一度視線を男に向ければ

あの表情はどこへ行つたのか、いやに裏のある笑顔を見せてきた

「久しいなアレン・アルファジュール」

「この状況下でよく言えたものだカザエル・ダンジュール」

互いに溢れんばかりの魔力を出す
黄色い花が活発的に反応しだした

なるべく女に毒が回らないように
結界を張ってやる

「なぜお前がここに来た」

睨みつけるように俺を見てくる
ザワザワと花が忙しなく震えている

この男の感情に同調するかのように・・・

「それはこちらの台詞だ、なぜこの場にお前がいる」

睨み返すように男を見れば
男は意味深な笑みを浮かべた

「この水晶が欲しかったんだが・・・また別の機会にしよう。お前が来てしまつては時間が食つてしまう。病弱な俺は早々に国に帰らなければ」

あきらめるか

それはそれで助かる話した

国同士の会話があまりにも物騒すぎる
よく戦争が起こらないと、度々自身が思つくらいだからな

「機会など次は無い。去れ」

「眉間に皺寄せるとそのうちその痕が取れなくなるよアレン陛下」

余計な御世話だ

そう思った時には男は一陣の風を舞わせて跡形もなく消えた

再び静寂が訪れる

サワサワと花が揺れ、ザーっと噴水から水が流れる音がする

この領域は来るべきではない

俺は女を抱きかかえ噴水に背を向けた

——賢い子

風に乗ってそんな声が聞こえた気がした
やけに凜としていて澄んだ声

だが振り返りはしない
そう本能が告げたからだ

「死なずに済んでよかったな」

歩きながらいまだに眠る女に一人小さく声をかけた
聞こえていないことぐらいわかっている

俺の声は水の音に掻き消された

空の太陽は濃い橙色へと変わっていた
もうすぐ宰相が執務室に来るころだろう

俺は足早にその庭を後にした・・・

水面下で遊戯その4、SIDE陸下（後書き）

あー、最後は呆気ない↑
とりあえず2章終了！！

魔女の悪戯（前書き）

2章のED

これではあまりにも魔女が魔女の力を発揮していないので・・・と
沢山の声が寄せられたので

魔女の力ではないかもしれないけど！・・・最後にやらかしてみま
した↑

魔女の悪戯

コツコツと廊下に一つの足音
影は二つ

よく見ればミアンは陛下によって
抱きかかえられていた

彼女は暖かい体温に包まれて
しっかりと抱えられている

彼女意識は唐突に浮上する
己の置かれている状況に慌てるも決して外には出さず
冷静に把握していた

あの場所で見たと聞いたことは現実だったようで
彼女は陛下の腕の中抱えられていた

（魔女である自分が人間にやられるなんて思わなかった）

悔しい反面

彼女は小さく陛下に見えない様に微笑んだ

そこからくみ取れる真意とは何か・・・

彼女は考えながら大人しく陛下に抱きとめられ続ける

先ほどともにあの毒を浴びてしまったから動くのも億劫だからだ
ろう

瞼を上げず彼女は陛下の行動を見ていた
暫く歩いて着いた先は彼女の部屋

両手が塞がっているのに
誰の手も借りずその部屋の扉が自然に開く

そのまま彼女を優しい手つきでベッドへと寝かせてくれた
案外、いいところもあるのだと彼女は心の中で笑う

「当分起きないか・・・」

小さな陛下の声が聞こえた
動けるもののただ立っているだけの仕事なら休ませてもらいたい、
そう彼女は思った

彼女から遠ざかる足音が部屋に響く
ガチャンと音が一つ

閉鎖的な重い音が静かな部屋に響く

陛下が出ていくとこの部屋は無音となった
聞こえるのは彼女の鼓動と吐息

不意に彼女の瞼が上がった

キラリと見たものを凍りつかせてしまうような深い銀

窓から延びる橙色の光が彼女の艶やかに光る銀と同化し
角度を変えれば燃えるような焰色の髪になっていた

スルリ

ゆっくりと柔らかな動きでベッドから立ち上がる

先程まで立つ事も儘ならなかった彼女の驚くべき回復力
この状況が分かるものが居ればそれは驚く光景だろう

彼女は橙色の光が射す窓まで歩み寄った
窓には数分前にいた女とは全く似つかない女が映っている

白い指が擦り合い
パチンと音を奏でた

すると窓が、誰の手も触れることなく開く
陛下が何の手も使わずに扉を開いた容量と同じだろう

静かな部屋に
生温かな空気が入り込んだ

優しく彼女の艶やかな髪を撫でる

「まったく・・・久々の戦いだと油断していたじゃない。」

——俺を呼べばよかったんだババア

彼女が笑うと何処からともなく皮肉交じりの声が聞こえた
次の瞬間

彼女の髪が舞い上がり唸るように風が吹いた
その状況に対して彼女は焦る素振りも見せず収まるまでただ唸る風
を見つめている

「年なんだから少しは体のことを考えやがれババア．．．見ていて
ハラハラしたぞ」

風が止むと外はまた穏やかになり
部屋は静寂を取り戻す

彼女しかない部屋に男の声が一つ
風が止んだ代わりに静かに響いた

責めるように、ただ心配の表情を声音に表す彼は弱弱しくため息を
吐いた

「自然が味方してくれると思ったのだけど、300年も生きると忘
れちゃうのよ。同等の力を持つ魔女の前で自然は傳かないってこと
．．．仕方ないじゃない」

口をつきだし

苦笑するように彼女はその男に向かって笑った

「仕方ないじゃねー！俺等は本気で焦ったんだかなババアが倒れ
る瞬間を見て！！」

怒気を含ませた男の顔

綺麗な顔立ちをしている分その表情は恐ろしい

そんな男を宿めるように彼女は困ったように笑った

彼女の表情を見て途端に泣きそうな、悔しそうな目をしている

「別に死なないからいいじゃない．．．でも、心配させてしまったのね。ごめんね」

彼女が謝ると男は呆れたような表情をして言った

「死ぬとかじゃなくて痛いのが嫌いじゃなかババア。謝るならあんまり心配させるような行動はするなよな。急に森に帰ってこなくなるし、村の人間も気にして森の近くまで何度か来てるぞ。流石に入ってはこないみたいだから俺等は何もしないけどよ」

「痛いのが嫌いなのは皆同じよ．．．そう、村の人達私のことを気にかけていてくれていたのね」

「それだけじゃない、気配が寸断された状況でやっとババアを見つけたかと思えばリーナさんが眠る場所で人間にやられているし。ババアは珍しく気が付いていないから本気で許可なく出て行こうと思っただぞ」

そう、彼女は見知らぬ男に連れ去られた後

自分から気配を断っていた．．．心配するであろう精霊を対象に

やっと見つけた己が母である存在の彼女が今にも倒れる寸前
それを目の当たりにした子の男の心境はあまりに複雑なものだろう

「ちょっと面白そうだったのよ。最初は嫌だったんだけどね．．．
．上手に隠していた銀色も偶然とはいえ見つかったちゃうし、まさか
陛下が私の真名を知っているなんて思わないじゃない？くそーって
思ったけど１年くらいいいかなーなんて思ったりしてさ。反対され
ると思ったからね」

どんな理由だ

そう思わずにはいられないと男は思った

安易な彼女の考えで自分たちはこれほど心配させられたのだ

それに．．．

「わかっているのか？ババア昔この国の帝王だった男にあんだけ酷
いことされたんだぞ。よくその血を受け継いだ人間の下に１年も居
たいと思えるな。俺等だって反対するはずだ、偶然とはいえまた名
前にババアは縛られたんだぞ！」

刹那

風が刃となって近くにあったチェス盤を切り刻んだ

怒りが風となって彼に同調している

「怒らないで。あのハゲだって今は元より昔は本当にいい男だったんだから．．．たった１年よ？名前が縛られたからと言っても来年までには新しい魔女を見つけようだし。私のことも魔女だって彼らは分かっている．．．私達にとって１年なんて本当に短い一瞬、直ぐに元の生活に戻るわ」

「けど、と言いかけてその言葉を喉の奥で留めた
彼女は凄く優しい目をしていたからだ

そんな目を見て今更自分達が止められるとは思わないだろう
男は彼女にもう一度ため息をついた後

「気配を断つのだけはやめてくれ。俺等はババアの許可無しじゃ助けられないんだ。危なくなったら俺等と呼ばえ．．．今の帝王だって俺等は正直信用していないんだ。今までとまるで違う”気”を纏っているやがる。」

精霊にも感じ取ることができたのか

彼女は心の中、最初に陛下に感じた悪寒は正しかったのだと思った

「きつと陛下は強いわ。私達は何かあってから動けばいいの．．．

気配を断つこともしないし危なくなったら誰かしら呼ぶわ。」

期待を大にした眼差しでどこか遠くを見る

確かに強いだろう、彼女が倒れた後感じた魔力は自分でさえ逃げ出してしまいたくなるような冷たい魔力だった

人間にはただの魔力としか感じないだろうが

魔力が敏感な自分たちには正直きついものがあつた

「俺等からの説教は終わり。．．．で、俺を呼んだ訳は？」

殺伐とした空気が一気に変わる

男が口にした内容を聞いて思い出したように彼女も口を開いた

「そうそう！このままだと示しがつかないじゃない？ちょっとだけ東の王様を懲らしめて欲しくて」

茶目つ気たつぷりに言う彼女に呆れを通り越して笑いさえ起りそうになる男

「懲らしめるって．．．ハア、具体的に何をすればいいんだ？」

ため息をついても

結局は彼女の申し出に乗る男

口は悪いが根がいいのだとわかる瞬間だった

「んー、ちよつと天変地異を．．．ね」

具体的に天変地異

意味が分からないが男には伝わったようだ

分かったと一言いい窓に近づく

くるりと踵を返し睨むように彼女見て

「絶対勝手な行動するなよババア!!」

決め台詞の様な言葉を残し窓から身を投げた
その様子に驚くこともせず彼女は笑い

「だから、ババアじゃないって言ってるでしょーが!!」

叫ぶように男に言った

男の姿はもうなく、代わりに風が一陣吹いた

そのまま彼女は扉を閉める

身を投げた男は大丈夫なのか．．．

彼は風の精霊

人間ではないこの世界を形成するための存在

簡単に死にはしない
魔女と同じで……

再び彼女はベッドに横たわった
髪色も目ももとののはちみつ色と琥珀色の瞳

そのまま彼女は目を閉じた

数日後

東の国は近年稀にみる嵐に見舞われた

雨が槍のように降り注ぎ作目を枯らし
風が唸るように沢山のものを吹き飛ばした
雷が轟きながら光の刃となって地に落ちた

国の打撃は大きく
暫く混乱は収まらなかったとか……

それを仕出かした本人の魔女と精霊は何事もなかったような顔をし

一人、陛下は笑っていたとかいなかったとか……

魔女の悪戯（後書き）

つとこんなところかな

とりあえず2章は展開が早かった気もするので

3章はゆっくりいきますよー

輪廻（前書き）

第3章OP

残酷描写あり

苦手な方はバックお願いします

輪廻

「こっちだミアン。気を付けるんだぞ」

優しく微笑む

少し白髪の間じった男は、まだ10歳くらいの少女に向かって手を伸ばす

その手に追突する勢いで少女は男の手に飛び込んで行った
周りに人の気配はなく

ただ静かな新緑の森

太陽が木の葉から漏れ出すように降り注いでいた

「うふふっ．．．大丈夫だもん、アッシュが私をいつも助けてくれるからー!!」

鈴の転がるような可愛い声

妖精のように飛び跳ね動き回る少女は見ているこちらまで楽しくさせた

アッシュと呼ばれた初老の男はそんな少女を愛おしそうに見る

慈愛の含んだ目は彼の懐の大きさを表しているようにも思える

「そうだな、私が生きている間はミアンをいつでも助けてやろう」

そう言って腕の中にいる少女の頭を優しく撫でた
銀色に輝く髪は光に反射してより一層美しくさせた

この姿を見て

誰もが思っ彼女達のこれから先も続いて欲しい優しい未来

それは・・・

その崩壊の足音は直ぐ傍まで近づいている

誰も知らなかったのだ

誰もこのことを予想しなかった

「ああ！！嫌よ・・・嫌！」

森に、少女の悲痛な叫びが響いた
それに反応するかのように森にいた精霊が気を張り詰める

静かで優しかった森が
その少女の声で殺気の充満する負の空気を帯びた

少女の目の前には
無残にも木に磔はりつけにされ全身から血を流して息絶えた

”アッシュと少女に呼ばれた初老の男だった”

見る影もないその姿
既に顔が誰かさえ分からないようなそんな状況

降り注ぐ太陽の光は変わらないはずなのに
その男は光に照らされることなくくすんだ血を流したままだった

あたり一面

鉄の錆びたような、血独特の臭い

「うおえ」

思わず少女はその臭いと姿に嘔吐おうとした

まだ10歳くらいの少女が体験すべきではなかったのだ
あまりにも酷すぎる光景

少女はもう何も出ない

そのくらいになるまで吐き続けた

目からは大量の涙が

鼻水が出て、顔がグチャグチャに涙と涎と鼻水で汚れた姿になっていた

少女を泣かせたのは誰だ

彼女達の静かで優しい生活を壊したのは誰だ

森にいる数多の生き物は怒る

大切な大切な存在をここまで傷つけたものは誰だ・・・と

数十分後

少女は嗚咽しながらも、もう一度・・・大好きだった男をみた

母のように優しく包んでくれて

父のように強く守ってくれた存在であるその男を

吐き気を気力で抑え込み

見る影もない男に微笑んだ

傍まで近寄る

血の臭いが一層きつく、よりよく男の姿が見えた

体が切り刻まれ

殴られたような跡もある

指が四方に曲り、左の親指がなかった
痛々しい姿

目を逸らしたくなるのを必死に我慢して
その少女は血で染まったその男の顔を優しく撫でた

少女の白い手に男の血がついた
そんなことは気にしていないかのように今度は背伸びをして両手で男を抱きしめた

少女の銀の瞳からこぼれた涙は
男の流す血と混じり合う

「アッシュ．．．アッシュ！！アッシュアッシュアッシュ！！」

ひたすらに男の名前を呼び続ける少女
しかし男はその声にこたえることは無かった

不意に少女が名を呼ぶのをやめ
男から離れた

服には男の血が大量についている
その白い手に頬に血がついていた

「アッシュ．．．さよなら」

小さく小さく少女は言った
別れの言葉を

その言葉と共に

アッシュと呼ばれた男はサラサラと砂になり

瞬く間に消えた

傍に山になった砂を残して

少女はその砂をチラリとみて

背を向けてどこかへ歩き出した

その少女の表情は見えず

木の葉から溢れる木漏れ日なかを進む

握りこぶし一つ

その白い掌から鮮血が流れた

その血はあの男のものではなく

少女の爪が己の手に食い込んで流れ出た血

「外道が」

低く、あの可愛らしい鈴の転がる声ではなく

地を這うような低い声が少女のその小さな口からこぼれた

少女が向かう先は分からず
森にいる数多の生物もまた・少女の行方をあえて追うことはし
なかった

帝国歴1618年のことである

輪廻（後書き）

新章です！！
残酷ですね

再会の時その1

その日は一日何もしなくていいと言われた朝
その言葉に内心喜びましたよ、はい・・・

昨日は早く眠りすぎたかなのか
いつもより体がスツキリしている

（まー昨日あれだけ毒されたんだから大丈夫と私が言っても信じて
はもらえないだろうけど）

脅威の回復力を持つ私は
昨日の毒など既に体から消えてしまっている

ただ、普通ならばあり得る話でもないの
であえて表向き辛そうな顔で対応

目を開けてすぐに飛び込んできたのは
心配そうに顔を歪ませたりりーだった

「大丈夫でございますか！？ああ御勞しい．．．今日は休んでもいいと陛下から仰せつかっております。今日一日は安静に致しましょうね」

私の手を握り
涙ぐむリリ―

どうしてそんなに激しいのかしら
御勞しいとどの口が言ってるのよ、手が．．．手が痛い！

彼女からしてみれば

私を心配するあまりに力が入りすぎたのだろうと思うけど

この怪力は冷や汗ものだ
このままでは私の手が握りつぶされてしまう

「だ、大丈夫よ！！昨日の初出勤だったのに今日休むなんて恥ずかしいくらいよ」

握られていない方の手でそつと．．．いやかなり力を入れて握られている手を抜き取った

それにしても

陛下が私のことを言ったのかしら

まさか．．．．

流石に東の王様が庭師の恰好をして私と一戦交えたなんて言う筈はないと思うけど

「恥ずかしいだなんて！誇りに思っべきです魔女様！！」

どんなことを言ってくれたのだろう

誇りに思えとな．．．聞くのが嫌だな

話が盛られ過ぎている気がしてならない

リリーは私のことに対して

頬を赤く染め興奮して話していた

喜怒哀楽の激しい女官だ

これでいいものなのかしら女官って．．．

「あ．．．ありがとう」

気圧される勢いで

私はとりあえず礼を言う

そうしたらリリーはきゅるんと眼を丸々と開き
嬉しそうに私を見て再び鼻息を荒くしていた

なんなんだリリー

そう思うもそれに対して突っ込んでしまえば何か知らない知識を詰
め込まれそうな気がして

大人しく彼女が静かになるまで待った

それにしても

一日休みだなんて・・・いいね

初出勤から思ったことは退屈過ぎて死にそうだったこと
退屈が嫌いなよ私

だから早々に悪いけど

休みを貰えてうれしいに決まってるわ

私はニヤーと口元を歪めた

その姿をリリーは興奮状態のため見てはいなかった

「それでは、安静とはいえその姿ではいけませんのでお召代え致しますよ」

何に興奮していたかわからなかったリリーは数分すると元の淑女らしいリリーに戻った

私が着せられたのは
桃色の淡いドレス

着心地は楽

いつもよりゆったりしていてコルセットがそんなにきつくない

髪の毛を一つに結ってくれた

それだけ、この前みたいな感じじゃなくてよかった

さつき体も綺麗に流してもらえたしね

「よくお似合いにございます」

そう言ってリリーは私をほめてくれた

鏡に映る本当の私と違う私

ここまで姿を変えられるのもいつそ清々しい

魔力が無いのに色彩を変える方法

魔女ならば誰しもが使える言わば生まれ持った能力の一種

自然を操るも然りつてところ

「ありがとう」

くるりと回るようにリリーのほうへ向く
はにかんで見せればリリーは優しそうな目で私を見てくれた

「陛下がご用意したんですよ。」

なんとなくそんな予想はしていましたよ

と、いうかこれから先も陛下が私の服を管理しそうな感じだわ

なんて思ったりもして……

朝食を食べ終わったあと

私は少し外の空気が吸いたいとリリーに願った

最初は心配そうな顔をされたけど

無理はしないことを条件に一緒に外に出ることで許してくれた

最初着替えるときもリリーは私を支えながら着替えさせてくれた
興奮するし変だけど流石は王宮の女官なのね

（体は別に大丈夫）

なんて口が裂けても言えないわね

私はリリーに支えられながら外へと歩き出した

再会の時その1（後書き）

この回はさして意味のない穏やかな回・・・
ゆっくりゆっくり進みましょう

再会の時その2

向かった先は何故か王宮から少し離れた講堂だった

初めて入る講堂

この前散策したときはちらっとみて終わっただけだったけど

近くまで来ると圧巻

白を基調とした壁に緑の蔦がうまく絡み付いてる

なんでここなんだろう

そう思ったけどリリーの考えに従って私は何も聞かなかった

ここの扉にも魔力が施されている
緑の蔦から流れるように魔力が・・・

（分かり易すぎない？）

大切なところには魔力の扉って
安直過ぎるでしょ

リリーの横で静かに私は考えた
だって、要は魔力が施されている場所には必ず何かあるってばらし
ているようなもの

人間必要以上の接触を避けてきて300年

まだまだ私のわからないことは多そうだ

「魔女様、少しだけお下がりがりくださいませ」

リリーが私のことをそつと後ろへ押す

その反動で後ろに咲いていた小さな花を踏んでしまった

（あらら・・・ごめんね）

そつと踏んだ花を見る

茎が折れてしまっていた

「我等を貴方様の住む領域にお招きください。我等に貴方様のご加護を．．．アルバノン・フィージア」

両手を胸元で組み祈るように唱えれば扉は了承したように静かに音を立てて開いた

ギギイと古い音がする

それと同時に扉の中から甘い匂いがした

（アルバノン・フィージア．．．高度な魔法の一つじゃない）

さあ、とにこやかに笑うリリーはやはり凄腕の女官のようだ

きつと王宮には凄腕の魔法使いがたくさんいるんだろうねー

そんなことを思いながら促されるままりリーと私は講堂の中へと入った

私の足元

踏まれて折れたはずの花は

私の中へ入った瞬間その面影を残さず花を咲かせていたことは誰も知らない

講堂の中も白だった
見渡す限りの白

（すごい）

私がきよろきよろと周りを見ていると
リリーは優しく微笑んだ

「ここは特定の人間しか入れません。静かな場所でのんびりいたしましょう?。」

リリーの私に対する配慮だったようだ

外に出ても今の季節日差しが強いことは分かっている

それに巡回する騎士やいつも慌ただしい女官がうろろろする場所よりこういった場所なら確かに安静にできる

「うん！」

近くにあった長椅子に座る

長時間座るのは少し大変、そう思うような木でできた椅子だった

森育ちの私からすれば

でこぼこしてないし全然いいけどね

正面には大きなステンドグラス

魔女に擦っているのね

白い羽と青い羽

琥珀の羽と紅い羽

そして中央に銀の羽が描かれていて

時折射す太陽の光を浴びて各々（おのおの）が輝いていた

天上にはアルファジュール帝国の紋章

人間の手先って本当に器用よねー
ついついそんなことをしみじみ思ってしまった

「誰か来たと思ったら貴方でしたか」

ガタンと音がして聞こえてきた声はどこかで聞いたことのある声だった

音の出先に目を向けるとそこにはいつだったか私をここへ連れてきた爽やかな笑顔を見せる青年だった

彼が登場することをリリーさんは予想していなかったようで、その場に片膝をついて深々と礼をしていた

（そんなに偉い人なの！？）

リリーの反応に私は驚く
傳く彼女と彼を何度か見て、とりあえず私も同じように傳こうと椅子から立ち上がった

「ああ、この場所では誰も見ていませんからそんな堅苦しいことは

しなくていいですよ」

そう言つて爽やかに微笑んだ
言葉通りに私は傳くこともせずまた椅子に座る
リリーも伺うように顔を上げた

「お久しぶりですね魔女」

なにがお久しぶりよ
悪態を軽くつきつつ私は彼に微笑む

「お久しぶりです」

大人しく淑女のように
なんてことを考えながら一瞥

「ふっ」

．．．嫌な奴

そんなに私の今の行動が変か！
と思わず突っ込みたくなるような笑い方

鼻で笑う彼

やっぱり彼とは合わないらしい

ヒクヒクと口角が吊り上がるのを抑え

私はその失礼な男に心を込めて再度微笑んだ

（お前真っ黒だな！！）

そう思いながら・・・

再会の時その2（後書き）

うん、とりあえず明日に持越し．．．
本当に文才が欲しくてたまらない

小説を沢山読もう

再会の時その3（前書き）

お久しぶりの更新です
．．．
お待たせいたしました

再会の時その3

「以前会ったときより随分と淑女らしくなれましたね魔女様」

それは嫌味か

鼻で小馬鹿にしたように笑う青年に苛々するのは私が短気なわけではなく青年の態度があまりに酷いからだと思いたい

カツカツと音を鳴らして私達に近づいてくる

リリーが伏目がちになり顔が少し強張っているのが分かった

「面を上げなさいリリー女官副長」

カツンと、靴がそこで音を立てるのをやめた

私の横・・・リリーに向かって言われた一言に軽く驚く

（副長って・・・要は女官？2ってことじゃないの）

道理で強いわけだ
青年の発言で納得してスッキリした私は遠慮することなく深く座り
なおす

その態度が青年の癪に障ったのか定かではないけれど
青年はリリーから目を逸らし私のほうを皺を眉間に寄せながら見て
きた

「ふてぶてしい態度ですねえ．．．山付近に住んでいたとはいえ
私の存在くらい耳に入ったことがあるでしょうに」

知らねーよ

．．．なんて面と向かっているほど私は勇敢な心を持つてはいない

ふふふと微笑んで姿勢を正すことしかできなかった

その様子を見てか青年は驚いたような顔つきをした
何をそんなに驚く

「本当に知らないんですね」

「世間知らずですいませんでした」

素直に言ってしまうばこっちのもん
驚いた顔はいつの間にか呆れたような表情になっていた

「魔女様、この方をご存じではないのですか？」

やっと口を開いたリリーは心なしか引いたような顔
．．．え、世間知らずでは収まらないわけ？

「それでも、この帝国を束ねる陛下の側近であり民を纏める宰相ロード・ランウェイです」

講堂でやけに大きく聞こえた青年の声は
凜としていて威厳を感じるものだった．．．なぜそこで凜々しくなるかなんて私にはわからないが

（ロード・ランウェイ．．．いや、まさかね）

一瞬浮かんだ自分の考えを打ち消すように頭を振る
そんなはずはないんだと言い聞かせて

それにしても一見20代半ばか後半に見える青年ロードさんはこん

なにも若くして宰相になったのか

なかなか下剋上の世界らしい

いつの時代も古株が政治を担うものだと思っていたからちょっと突拍子抜け

「．．．宰相でしたか、軽率な行動に対して寛大なお心に感謝いたしますわ」

立ち上がり一瞥

完璧な淑女ね私

一人その行動に酔いしれる私

だってこんなこと生きててなかなかやらなかったからね！

「今更ですよ」

はあ、とため息をつきながらやれやれと髪を揺らした

本当に一々行動が頭にくるわね

ヒクッと口元が引き攣る

生意気な感じがどっかの精霊とかぶって仕方がない

「それより、魔女様のお名前を私はまだ聞いていない」

あ、私の淑女らしい行動は”それより”で片づけられるのねー悲しいわ

そう思いつつ頭を上げロードさんを見据える
この人も綺麗な顔立ち

最初に見たときも思ってたけど
爽やかで、口からあんなことを言う人には見えない

人は見かけによらないのね

「私の名はミアですランウェイ様」

ロードさんは大して興味がないようにふうんと頷くだけだった

（興味がないなら聞くな！！）

「精々頑張ってくださいね」

そう言い残してロードさんは講堂から出て行った

最後まで憎つくい男ね

後ろ姿を私とリリーで見ながらそう思う

ガチャンと閉鎖的な音が講堂に広がる

再び講堂は静寂に包まれた

ロードさんが居なくなるだけで私の苛々もどこかへなくなってしまう

リリーも張りつめていた緊張が解けたからなのか
ほっとしたような表情をしていた

「リリー強いんだね」

思い出すかのように私はリリーに質問を投げかける

そんな私を見て少し気まずそうに笑いながらリリーは答えた

「女官長様には負けますが．．．王宮で陛下を支える一員として恥
じない力を持っていますからね」

陛下を支える一員か・・・

ロードさんも陛下の側近って言ってたし

人間には十分過ぎるほどの魔力も持っていた

時代の流れで魔力の質と量も変動するのかしらね

リリーとさっき出て行った宰相のロードさんを思い浮かべそんなことを思う

「強いんだね」

思わずそんなことを口走っていた

私を見るリリーは何を言ってるのかわからないとも言いたげな目をしていた

（ハゲがいた時代の女官はここまで強くなかったからねー、世の中変わるもんだ）

講堂のステンドグラスを見ながら
舞うように在るその羽を見続けた

そんな静かな講堂に私達は暫く何も話さないままだ淡々とその空間に浸っていた

憂ある瞳 SIDERIRIー (前書き)

初リリー視点

お楽しみください

憂ある瞳 SIDEリリー

「今日からお前は魔女の女官になれ」

普段は女官長様しか入らないその部屋に私は呼ばれ
内心ドキドキしながら目の前にいる一介の女官には到底お目にかか
れない陛下が私にそう告げた

「魔女．．．ですか？」

王宮内でも魔女が見つかった、それらしき娘が宰相様に連れられて
この城に入った．．．そんな情報がつい先程恐ろしく早い伝達力
で回っていたのは知っていた

また妙な噂だと、その時は大して気にも留めずにいつものように仕
事をこなしていたけれど

（まさか本当だったなんて）

失礼と分かりながらも陛下を凝視せざるを得なかった

当の陛下は書類に目を通しながら普通に話している

陛下が魔女という存在に目を付けていらしたのは薄々気が付いていた

重臣の皆様と会議をなされる時たまたま女官長様が外回りに行っていたため私が代役で扉横に待機をしていた時のことだ

いつでも彼らの要望に応えられるように
直立不動で立っていた

未だに古株の狸が何匹か紛れ込んでいるも他は皆陛下至上主義の者達ばかりだと女官長様は仰っていたし私自身も身をもって感じていた

251

会議は着々と進み、たまにお茶を出すなどといった仕事以外することもなくただ私は彼らを見ていた

内容は他国との関係について
正直私には訳の分からないことばかりで早く終わらないかとさえ思っていた

「東の王など今は病弱で寝たきりの為俗世には全くとっていいほど出てこないようです陛下」

古株の狸

先代の帝王時代から財務関係に席を置く男が厭らしく笑う

（貴族階級でも筆頭に立つオールド卿はいつになっても死なないのね）

既に齡90にはなるでしょうに未だに健在のオールド・ルーレンス卿

なにかと陛下の意見に口をはさむ五月蠅い方だと女官長様が苦々しい顔つきで仰っていたのを覚えている

まるで今は東が手薄だから攻めると遠まわしに言っているようなものではないか

私はその言葉に誰にも気づかれない様眉をひそめた

陛下は依然冷静に書類に目を通して
私より幾分若い陛下

なのになぜか頭が自然と傳くのは陛下のその溢れる魔力と幼いころからの教養なのだろう

「どうにも北は魔女を探しているだとか……」

誰かがその言葉と共に陛下の隣に座る宰相様を見据えていった

「私に意見を求められても困りますヴェルデ卿」

宰相様は北出身の貴族

どんな理由なのかは知らないけれど今は帝国の宰相をしている

宰相なんて大変な仕事に付かなくても

北で貴族として暮らしていれば楽だったのに……

ヴェルデ卿に対して困ったように言い放つ宰相様もお若いのに貴祿があるわ

ヴェルデ卿は外交に関与する貴族階級の一人

古株で蛇のようにしつこいと噂がある初老の男

「魔女だと？」

不意になかなか口を開かなかった陛下が喋った

（魔女、のキーワードになぜ反応するのかしら）

しかしその陛下の言葉にヴェルデ卿は笑い
小馬鹿にしたように陛下を見て言った

「陛下も興味がおありですか？ 所詮は御伽噺にございますよ」

「ヴェルデ卿、口が過ぎま」いいロード。確かに御伽噺だな．．．
だが本題は其処ではない、暇ではないのだ。戯言はここまでにして
本題に入れ」．．．出過ぎた真似をしました」

宰相様がヴェルデ卿に言う前にかぶせる様に陛下は話がずれていく
話題を本題に引き戻した

挑発されても冷静でいられるからこそ陛下に相應しい

（でも確かに宰相様のお気持ちもわかるわ）

そんなことを一人心中で思っていた

それから間もなくして

私は陛下直々に執務室へ呼ばれた

まさか御伽噺だと言っていた陛下が魔女を見つけるとは思いもせず
．．．

「そうだ、今は眠っているが時機に目を覚ますだろう。あの娘の全ての世話をお前ひとりに任せる．．．できるか」

静かな執務室で

陛下の声が重く私の体に押し掛かってきた

私ごときが魔女という今では神聖化した者の世話などしても本当にいいのだろうか

それ以前に御伽噺としか聞かなかった存在を認めるとこの人は仰るのか

(いや、陛下は冗談で言っているのではない)

目が本気だった

それに陛下はこんなくだらない嘘は言わないでしょうし・・・

私の答えなど一つしかない

陛下の目の前でゆっくりと傳く

右手を左胸に添え深々と礼をしながら言う

「御意に陛下」

なぜ陛下が私より強い女官長様を選ばなかったのか定かではないけれど少なくとも私は陛下に信用されていると取って間違いはないはず

フワリと風が私の髪を撫でる

気分が高揚し熱くなっている体には丁度いい風だった

「だが、くれぐれもその娘が魔女だと云う事を周囲の者に悟れぬようにせよ」

その言葉に私は言葉を出さず

ただ頷いた

「では行け」

一言

陛下は私に告げ、私もそれに従うように静かに執務室を後にした

そのまま私は長い廊下を歩き

陛下が仰っていた部屋の前にたどり着いた

（この中に魔女がいる）

ドキドキとやけに早い心音

それを抑える様に軽く3回扉をノックした

しかし反応はない

「まじ……」

魔女様、そう言いかけて口を噤む

ここは廊下だ

誰がいつ何時聞いているかわからないこの場所で軽率な言動は慎むべきだと悟ったからだ

これから主となる人の部屋に許可なく入ることは許されないとわかっていても

今回はしょうがないと思い開き静かに扉を開いた

パタン

優しくそつと扉を閉めて中に入る

そしてゆっくりと人影のあるベッドまで近づいた

（これが・・・魔女？）

目の前で眠る魔女と言われる者は想像を遥かに超えたまだあどけなさの残る年若い女性だった

少女、と言っても通じる

ただ女性の私から見ても二度見てしまいたくなるような風貌

目は・・・どんな色をしているのかしら

父母に御伽噺として語られてきたその存在が目の前にいる

嬉しさと興奮のあまり私はその少女を起こそうと思った

主の眠りを妨げるなど許されない行為で、それも今回で2度目

分かつてはいるもののどうせ起きる時間だからと理由をつけてその少女を起こした

少女はどこにでもいるようなはちみつ色の髪に茶色の瞳だった

（魔女だから銀の目をしていていると思ったのに案外普通なのね・・・
凄く綺麗な顔立ちだけど）

この少女のどこが魔女なのかわからないけど
きっと陛下が何かしらの理由があったから連れてきたんでしょう

私はこの少女のために出来得る限りのことをしなければならぬ

そう固く思った

寝ぼけているのかその少女は私の声に反応せず
目を閉じて再び眠ってしまった

それを見て私は静かに部屋を後にした
明日でもいいわよね、きつと疲れているのでしょーうし・・・

（眠れているかしら）

ふと、夜になり寝ようと思ったときそんなことが頭を過った

きつとこの城に慣れていないだろうと
夜中にもかかわらず私は服をもう一度着て自家製の葉で作ったお茶
を持って部屋を後にした

魔女様のいる部屋までは少し距離があって
薄暗い廊下は気味が悪かった

まして今日は新月
光が空から射さない分余計に暗く感じた

（でも、魔女様も心細いはずよね）

そんなことを思いながら私は進む

——ま．．．う

不意にどこからともなく小さな声が聞こえた
自ずと足が止まる

こんな時間に誰？

恐怖を感じるも気になる私は声のする方向へ再び足を進めた

（まさか魔女様？）

どんどん魔女様の部屋に近づく
それに伴って声も次第にはっきり聞こえてきた

——南の魔女は言う
攻めは無くして何をするかと

中央の魔女は何も言わず
ただただそれその者々を見つめ静かに佇み世の流れを見定める

寄らば大樹の陰の如く
人は柳に雪折れなし

生きた歴史が話すは過去
これはただの戯曲に過ぎず

魔女は詠い歴史を残さん

澄んだ歌声だった
部屋の手前、角で足を止めて聞き入ってしまった

（この詩は・・・厳重に保管された城の倉庫にあった本の一説だわ）
昔一度だけ読んだことがあった
その本は昔魔女を知っている人が書いた本だとか

ガラスから魔女様の姿が見えた
あの部屋を抜け出したのだろうか

この国でも指折りの魔法使いが結界を張り続けているのに気づかれ
もせず簡単に抜け出すなんて・・・

この角からは魔女様にとって丁死角となるから私の姿に気が付いていない

カタカタと手に持つカップが揺れお茶が波打っている
既にぬるくなってしまうたと思いつつ、少しだけ．．その少女が怖くなった

（とても．．．とても冷たい銀の瞳。新月で光が射さないこの闇でも鈍く光る銀）

彼女は紛れもなく純潔の魔女だった

こんなこと、私の様な人間が知っていい事実ではなかった

いつそはちみつ色の髪で茶色の瞳だったほうが馴染み易かったのに
とさえ思った

それにあまりにもぞつとする冷徹な瞳だった

私は一刻も早くこの場から離れなければと来た道を走るように歩いた

ボタン

部屋に入って鍵を閉める

「はあはあ」

荒い息を整えながら近くにあったテーブルに渡そうと思っていたお茶のカップとそれに乗せるお盆を置いた

そこで気が付く

お盆にはお茶がこぼれ、カップにはお茶がほとんど入っていなかった

「冷静になれ冷静になれ」

唱える様に静かに浅く息をする

暫くすると次第に息も収まりふうと一息

片づけは明日でいいとそのままベッドに横になった

柔らかなベッドが頬を撫でる

うずめる様にしながら私は一つの答えを導き出した

（今日見たことは誰にも話せないわね。陛下にもこの件は黙っていきましょう．．．魔女様の意思を私は何より尊重しなければならないわ。）

そう固く決意し、静かに目を閉じた

美しいこの世で一人しか存在しない純潔の魔女様

高貴な貴女様に仕える私は貴方様には決して近づけるような人間ではないけれどこの身滅びるまで貴方様に忠誠を誓いましょう

そんなことを思いながら私の意識は落ちていった

次の日、何事もなかったように振る舞いながら私は初めて会ったかのように挨拶をする

そして同時に感謝する

（おはよう、ありがとう、など勿体なきお言葉に御座います）

私の迫る声に驚いているのが分かる
きっと魔女様は人間などに興味などないのでしょね

あの瞳を見て私は妙に確信していた

でも、今は偽りとあれ優しい表情で笑いかけて下さる

それを感謝しなければいけない

私の様な人間が知っていい事実ではないと分かっているからこそ彼女の意思を尊重してこのことは彼女が言うまで私は喋らない

貴女がこの場で何不自由ない生活を送れるために精一杯私は努めましょう

隠す理由は分からないけど

我等が神に等しい存在に絶対の忠誠を・・・

言わない代わりに私は優しく微笑んだ

憂ある瞳 SIDEリリー (後書き)

実はリリーは分かっていたってゆー(・ー・;))

一人ぐらいわかってないって感じてした
長くなってすいません

古狸その1

戻りましょうか

そうリリーに言われたとき既に日が傾いていた
一体何時間この講堂で物思いに耽っていたのか、そう思った

「それでは、行つてらっしゃいませ」

次の日

私は一日の休暇を終え出勤した

リリーが見送る中陛下のいる執務室へと足を進める

途中何度か他の騎士に礼をされすれ違う人々は壁に沿い道をあけて
くれた

（話してくれたのかな）

そんなことを思いつつ私は小さく微笑んで進む
執務室の前についた時には既に疲労感があつた

この前と違うけどいろんな意味で疲れるわ

まだ出勤して2日目だというのになんだかこの先が不安だわ

ふう、と息を吐き出して軽く3回ノックした
すると陛下の声ではなくシドさんが返事をした

扉を押して中に入る
が、陛下の姿が見当たらない

優しく扉を閉めて中を伺う
視界の端にシドさんの姿を捉えた

「陛下はもうじきいらっしゃる」

私の考えが分かったのか呆れたように教えてくれた

そうか、この前は遅くなったけどこの時間なら大丈夫ってことなのね

一人納得して

私もシドさんと反対側の扉横で立つ

暫くしてチリチリと扉で音がした

見れば扉に描かれていた絵が動きだしていた

（外からだと見えないけれど中ではこうなっているのね）

．．．と、次の瞬間扉が開いた

そこから堂々としてきたのは今日も見目麗しい陛下

勝手に扉は閉まり

陛下もいつものように椅子へ座った

一昨日私を部屋まで運んでくれたのが陛下だなんてちょっと未だに信じられないわねー

なんて思いながら陛下を凝視

こんな綺麗な顔立ちで好きな人とかいないのかな？

そう言えばフウ君昔好きな子ができたって言ってそれっきりだった

な

とかシドさんが私を見て睨んでいることなど気づかないまま私は陛下を見続けた

「俺の顔に何かついているのか」

不意に書類から目を逸らした陛下と目が合う
あり、私そんなに見つめてた？

「い．．いえ」

「視線が鬱陶しい」

言葉に詰めれば陛下にバツサリ切られた
鬱陶しいだなんて酷過ぎるわ！

チラリとシドさんを見れば
馬鹿にしたように私を見ていた

恥ずかしくなり下を向く
なんだ、精神的に暴力を受けている気がする

まだ病み上がりなのに
一応東の王にだって罰は与えたんだよ？

私が直接したわけじゃないけどさー

そんなことを考えていると

急に肌を刺すような禍々しい魔力を感じ取った

（うわー、殺気ビンビン）

陛下とシドさんも気づいたのか

陛下は書類を置き扉を見据えている

シドさんも数歩扉から離れ睨むように見ていた
私も離れようかな

空気呼んで私もその場から離れた

近づく殺気

ここに陛下がいるとわかったの行動なのかしらね

チリチリと陛下が入ってきたときと同様に扉が音を立てた
そして次第に扉が開きだす

「面倒な輩が来たものだな．．．シド、ミアこちらへ来い」

陛下が呆れたような表情で私とシドさんを近くへ呼んだ
その言葉通り私達は陛下の座る椅子の横にそれぞれ立った

「失礼、陛下はおいでかな？」

扉が開くと同時に聞こえたしゃがれた声は陛下に対してあまりに軽い物言いだった

（うつわー凄いの来たねこれ）

私腹を肥やしました

って感じの男が2人の僕を引き連れて入ってきた

扉が閉まり陛下と私たちの目の前には太った男とその僕2人と見合
う形になった

「今は忙しいんだオールド卿。後にはくれぬか」

帰れと遠まわしに言っているのが馬鹿でもわかるほど適當
この言葉が気に食わなかったのか男は笑いながらも下で拳を固く作
っていた

確かに陛下も言葉を選ぶべきだと思いまーす

．．．なんて言えないから静かに傍観、口は一切挟みませんよ

「陛下、来月の予算についてのことです」

陛下の返しにも我慢するかのように笑って流し自分の話を聞いても
らおうと再び男は話し始めた

しかし．．．

「くどい。その件は既に終わった．．．それ以外の答えなどない」

と、冷ややかに切り捨てた
顔が赤く染まるのが分かった

相当怒ってんのねアンタ

ギリッと歯を噛みしめて睨むように陛下を見る男

近くにいた僕も心なしか陛下を睨んでいた

この人たち、嫌だなー

さっきから微量に魔法が流され、それで私たちを麻痺させようとしている

（甘いね）

分かっていたのかシドさんはいつの間にか結界を張っていた
ま、シドさんもなかなか甘いけどー

この魔法は普通は結界で防げるけど、男が持っているものを見落と
してはいけない

275

男が持っているのは私が売ったであろう天然の魔石
指輪のようになっていてから気づかれないもののこの石のせいで魔
力が増幅している

結界を3重にしないと危険だなんてシドさんは思っていないんだろうね

（これで陛下が死んだらどうなるんだろ）

ま、殺させはしないんだけどさ
なんて思いながら私はローブについたポケットに手を突っ込んだ

魔女に抜かりは無し！
なーんてね

気づかれない様に小さく笑って私はポケットに入っている物を優しく撫でた

（それにしても本当にいつも命狙われてるのね陛下）

そんなことを横目で陛下を見ながら思った

古狸その2

勤務2日目にしてこれとは・・・

初日から命がけだもんね、波瀾万丈じゃないかしら

そう思いながら再び視線をオルド卿と呼ばれた男へ向けた

すると目があった

濁った欲のある瞳

（下種な人間が）

いつか見た男にそっくりじゃない

ふと、昔のことを思い出せずにはいらなかった

「陛下、その者が新しき騎士ですか？」

それ以外になにある

と、口を開く手前言うのをやめる

私はこのごたごたした世界に足を踏み入れる気はないからね

「そうですよ」

陛下がオルド卿に対して言う

その声音があまりにもどうでもいいかのようなものだからオルド卿はすっかり顔を赤く染め怒りに震えている様子だった

「へ、陛下は何事にも率先して全てをこなして下さるから我々も安心ですな」

引き攣つてるよ、顔

要は出しゃばり過ぎだと遠まわしに言っているようなものじゃないの

「ならばよかったではないか。シド、お連れしろ」

「御意」

話すことは無い

そう思った陛下はシドさんにオルド卿を退室させるように命じた

その言葉に従うようにシドさんはオルド卿と陛下の間に立ちはだかる

私はそれを陛下の横でただ見ている
オールド卿はさらに強い魔力を石に込めている

（見えないとも思っているのかしら）

実際には視界では捉えることは出来ない
透視なんて技、残念ながら私にはないしね

でも魔力を見分けることならできる

色、質、量

より純度が高ければ色は濃く透き通る

同じように純度が高ければ質はより鋭く重い

量．．．は遺伝、環境によって異なってしまうけど
これは命のエネルギーの多さとも言える

魔力は体に流れる血と同じ

キャパシティオーバーをしてしまえば死んでしまう

魔女の場合は魔力が戻るまで使えなくなってしまうけどね

まあそんな状況、無いに等しいのだけれど

このオルド卿、流石というべきなのか
純度が高い

色も質も人間レベルにしてみれば申し分ない

ただ、量が少ない
きつとあの魔石でその分を補っているのね

「陛下は執務の最中に御座います、申し訳ありませんがお引き取り
を」

「黙れ。騎士の分際で我に触れるな！」

シドさんが退室を促すようオルド卿の腕を掴んだ瞬間
オルド卿はその手をまるで汚いものに触られたかのように払った

その様子に動じることもなくシドさんはその払われた手を降ろし再

度退室を促す

「なぜ効かぬのだ!？」

後ろにいた僕に怒気を含ませた顔で迫る
急に責められるものだから二人はおろおろと焦るのみ

「我々には・・・」

「しかし効果は絶大だったはずです!」

(ま、効果は絶大でしょうけど)

なんせ私が取ってきた魔石ですから
なんて、言わないけど軽く優越感

「何かなさっていたのですか？物騒ですね」

陛下が書類から目を離しオルド卿を睨む
その目にオルド卿は一瞬怯んだ

自分より年上の

しかもプライドがある人を怯ませるなんて大した若造だ

これもまた血統がそうさせているのか……

増幅する魔力に対応すべく私は更にポケットに入っているものを撫でる

（吸って大きくなりなさい）

そんな意味合いを込める
ポケットに入っているのは精霊の命

まだ形にはならないけど
踏んでしまった花から生まれるはずだった命

直ぐに再生すると思ったのに
また誰かに踏まれたのか衰弱しきっていた

在り来たりなところから生まれてくる精霊
生まれてからはほぼ半永久的に生きるけど、生まれるまでが過酷

生を宿す前に消える精霊

人間の作り出す環境に耐え切れず消える精霊

精霊はデリケートな存在ってわけ

「本日はお暇しよう。失礼した」

進展のない不利状況化であきらめたオールド卿の判断は正しい

さっきまでの怒気を含んだ表情はどこへ行ったのか
清々しい顔をして出て行った

荒々しく靴音は鳴らしていたから
不完全燃焼つてところだったのだと思うけど・・・

ちらりとシドさんを見れば
何事もなかったかのような表情だった

「なかなか役に立つなお前も」

隣にいた陛下が少し笑いながら私を見てそう言った

(気づいていたの・・・?)

陛下の視線が一瞬私のポケットへと向けられすぐに書類へと移った

この反応は気づいていた

どこまで規格外なのかしらこの男

シドさんはよくわからないのか

不思議そうに陛下を見ていた

「シド、お前の結界では防ぎ切れてはいなかった。オールド卿は魔石を利用して．．．それを防いだのはこの娘だ。無下にするなよシド」

何かにサインをしながらの言葉

どのように防いだかまでは言っていないけどシドさんも驚いた後納得したように頷く

「そのポケットに入っているのはチノか」

チノ．．．精霊を生み出す花の総称

私のポケットをみてシドさんが断言的に言った

（魔力に敏感なのねこの人たちは）

「はい、偶然見つけたので」

「チノが飛び立つまでじっくり見ておけよ」

命令．．．なのだろうか？

陛下は私にそう言った

ま、言われなくても見てますけどー

「御意」

陛下の言葉に私は了承したと一言

（この台詞いつ言ってもかっこいい！）

下心ありありな内心だけど

そこは悪しからず．．．ね

宰相と魔女その1

それ以来何事もなく一日が過ぎ

勤務時間を終えて部屋に戻り、リリーと軽く会話をしながら眠りに
ついた

眠るとき

リリーは必ず私に” 月が沈むまでお休み下さい” って言う

月が沈むまでって、普通にお休みでいいのになんて
思ったけどあえてそれに対して何も言わなかった

きつとリリーの昔からの習慣とかそんなだろうと思ったから・・・

「行ってらっしゃいませ」

「行つてきます」

まだ人に頭を下げられることに慣れてはいないけど朝の挨拶が大切だとは気が付いた

リリーとの朝のやり取りから始まるって気がするからね

（そういや、リリーって私を見送った後何してるのかな）

朝は私を起こしてくれて
見送る

夜は私を出迎えて
いつの間にか退室していく

ま、女官らしく掃除洗濯その他諸々やることは沢山あるんでしょうけどね

そんなことを考えているうちに陛下の執務室へと着いた

私は掌を扉の流れるような蔓へ翳し
優しく魔力を流し込んだ

扉の開け方を教えてもらったからだ

本来なら陛下が許可しない限りは開かないはずなんだけど・・・
蔓に入室を許可する者の魔力を記憶させれば次からは陛下の許可なしに入れるそうだ

オルド卿辺りの中に入れるなんて危険じゃないのかしら

昨日のこともあるでしょうに・・・
と、思ったけど陛下に負ける人間がいるのが最初でしょうね

まだ見ぬ陛下の力は私の想像を遥かに超えるものだと思っているからね

わくわくする

その反面、よく自分の力に吞まれることなく自我を保っているものだと感心せざるを得なかった

「おはようございますシドさん……ん？」

「ああ」

扉を開き昨日と同じようにシドさんに挨拶をしようとそちらを見れば

シドさんともう一人……後ろ姿だけど、なぜか腹黒い爽やか青年こと宰相のロードさんがいらした

驚く私を尻目にロードさんは鼻で笑ってこちらを見てきた

振り向くさままで綺麗なのはいい

ただその笑い方、本当にどうにかなんないのかこの男は

朝からカチンと来るがそこは淑女らしく微笑むのみ

「素敵な笑顔ですね」

「ふふ、ランウェイ様にだけ特別です」

細やかな仕返しだ

ありつただけの皮肉を込めてみる

「それはありがたいですね、とても斬新な笑顔だと思います」

斬新な笑顔ってなんだ!?

皮肉を嫌味で返され意気消沈気味になる

軽く落ち込んだ私を見て

何故か頬を緩ませるロードさん

鬼畜だ

精神的に追い込む悪魔だ

そう思わずにはいらなかった

陛下が来るまでには多分もう少し時間がある

そういえば、なんでロードさんはここにいるのだろうか？

「ランウェイ様がいらっしゃるなんて今日はどうなされたのですか？」

陛下の部屋に変なものが置いてないか歩きながら調べる

静かだったので唐突に質問をロードさんに投げてみた

「何かなければここにきてはいけないのでしょうか」

（なんて面倒な人なんだ）

予想はしていた

こんな質問を投げるべきではないと

もう少し具体的に優しくオブライトにでも包んで投げればよかったのかもしれない・・・と、思っても後の祭りだ。

鳥の剥製を入れるガラスケースに映る私の顔は笑顔が引き攣っていた

「珍しいな・・・と思ひまして」

「まだ勤務して3日でしように。私から見ればあなたがこの部屋にいることが未だに珍妙な光景ですね」

あー言えばこー言う

本当にこの男は私に対して棘を添えて話してくる

嫌われるようなことをしたか？

いや、最初の出だしは無でしょう？

不可抗力じゃないか
横暴だ横暴だ

そんなことは言えないから静かに剥製を見続ける

するとチリチリと扉が音をたてはじめた
陛下、ナイスタイミング！

きつと陛下だろうと、私は扉の近くへ行く
シドさんも同じように扉の横定位置についた

「「おはようございます陛下」「」

私とシドさんの声が被る

それに対し陛下はチラリと見てそのままいつも通り椅子へと腰かけた

「おはようございます陛下」「

「お前がここに来るなど珍しいな」

結局貴方がここにいることは頻繁ではないのね
最初の私の言い分、あつてたじゃないの！！

陛下の目の前に立ち

そのことに爽やかに微笑むロードさん

（苛々するわ、そして悔しいわ！）

ばれない様必死に隠す

心の中で罵声するくらい神様が許さなくても私が許すからいいわよね

なんて自己中心的考え

そう言われてしまえば終わりだけれどいいの

いつか目にももの見せてやるんだから
と、一人意気込んだ

宰相と魔女その2

「珍しいですか？」

「ああ、いつもなら俺より先にはこないだろう」

陛下も珍しい

いつもならだれかと話すときでも仕事をしながらなのにこの人と話すときは目を見ている

（案外仲良し？）

憎まれ口を叩いているかのようだけど

そこまで険悪したムードはなくて、むしろ少しだけほんわかと和んでしまいそうだった

と、云うかお前は何様だ

陛下を待たせることもあるような聞こえ方だったわよ

「今回はかりは言いたくて言いたくて仕方がなかったのですよ。陛下、北に魔女が現れたそうです」

——途端、陛下の目の色が変わった

先程までの少し優しげな眼は貪欲に何かを捕える強者の眼だ

宰相つて国を纏める役目で陛下の手足となり国民の意見をよりよく聞き入れるはずの役職でしょうに．．．魔女探しが本職になってきたんじゃないの？

「どれ程確かな話だ」

「高いかと．．．現にあちらに送った間諜の者は北の国の皇太子殿下と並ぶ魔女を見たとのこと。銀を所持していたとか」

明確である

そう断言するロードさん

いつか陛下が言っていた信用に足りる臣下の一人であろうロードさんの話

それほどまでに陛下が魔女を探す理由など見当もつかないけど．．．陛下の眉間には何本もの皺が刻まれていた

（北に魔女．．．ね）

そもそもこんな話を聞いてもいい立場なのだろうか

シドさんはいいかもしれない

だって陛下お抱えの騎士団団長なのだから

でも私は立場が全く違う

所詮、1年の契約で偽の魔女として存在するだけの一庶民ではないか

これはもしかなくてもすべて終わったら殺される感じがしら

と、そこまで考えて止める

あんまりいい気がしない．．．なるようになればいいさ

どうせ死なないのなら

そう思って私はこの余興にも結局参加したんじゃないの

「お前はどっ思っ」

それに・・・

賢帝と言われるだけある素質を持ったこの男と、一瞬とはいえ私の中に銀を見た男

ゾクゾクさせる目をしたあの東の王だってリリーのことだってまだまだ気になる

「聞いているのか」

たった1年しかないのはある意味駄目だったかしら

行く先が気になって仕方がないわ！

・・・なんて考えてて、陛下が私を呼んでいたとは気が付くはずもなく

「本当に・・・私の眼は確かに彼女の中に銀があると見たはずでしたのに。取り越し苦労と言っべきか、どうも貴女は魔女ではないようだ」

メール

ロードさんが言った呪文が早かったか私が嘆くのが早かったか

「あうっ」

突如私の思考を阻むように水が数滴頭の上から降ってきた

そこで気が付く

全員今私を見ているのだと・・・

「あ・・・えつと」

「陛下は、お前に意見を求めていらっしやるのだ」

シドさんが呆れた口調で教えてくれた

視線は冷たいけど放置されない分助かります

（んー居ないって正直に言う？）

ふふ、それじゃつまらないわ

「居る・・・かもしれませんよ？純潔ではないけど血を分けた者が

もしれない」

「銀を見た、と言っているのに純潔ではないと？」

上がる口元を抑え

いざ発言すれば食いかかってくるのは天敵ロードさん

「私が純潔ですから」

「口を慎め。高貴なる御方だ・・・今の発言は極刑にあたるぞ」

（本当のことを言っただけなのに、怖い怖い）

軽く言っただけ

まさかロードさんに思いきり睨まれてしまった

それは冗談抜きのマジ顔

敬うのはいいけど見たことないのに、よくそこまで思い入れができるわね

人間は見もしない者に対しても縋る

時に醜く思うけど

時に愛おしく感じる

人間って不思議よね
さほと
然程私と変わらないのに考えが異なる

「失礼いたしました」

深く深く礼を取る
魔女に対して礼をしたのではない

ロードさんの人間らしさに敬意を称して礼を取るのよ

「いえ、無理矢理連れてきてしまった私にも非があるでしょう。愚痴の一つでも零したくなるのは分かりますから。ただ身の振りを考えて下さいね」

「あ．．．は、はい」

まさかロードさんに同情された
ま、自分のせいであることも自覚はしているのね

「いつの間に親しくなった？」

「「なっていないです（よ）」」

気の抜けた陛下一言にこれまた偶然
言葉が綺麗に重なった

その様子に小さく笑ったシドさんを私は見逃さなかった

「嫌いですね、私貴方の様な女性は」

「お褒めの言葉と受け取りますランウェイ様」

精神的な攻防

幼稚と受け取らないでほしいわ

それでも立派な心理戦なのだから・・・

「ならば、明日からお前たち二人は北に赴いてもらおうか」

・・・はい？

「ロード・ランウェイの護衛としてミアが行け。北の魔女が本当に居るのか確かめてこい」

それは、何の拷問でしょうか陛下

執務室に妙な空気が流れた瞬間だった
この人もなかなか鬼畜だわ

（勤務3日目、あまりに激動の生活は森育ちの私には少々厳しい世界ようです）

誰に言ったともわからない
ただそつと嘆くように心の中で私は呟いた

宰相と魔女その3 SIDEロード (前書き)

ロード・ランウェイさん視点とつぞ

宰相と魔女その3 SIDEロード

「魔女を探せ」

目の前にいるこの国の頂点に立つ彼は至って真面目な表情で私に命令を下した

（何を言い出すかと思えば）

「陛下に御伽噺を信じるような純粋な心の持ち主だったとは思いませんでしたよ」

「一国の君子に対してなんだその口調は」

なんだもくそもあるか

お前にそんな配慮が今更必要だとも思っているのか

嫌味の一つ

この状況でお前の話に相槌を打っただけでもありがたく思え

そんなことさえ考えてしまう程、内容は衝撃的だった人生でもトップ3に入るのではないだろうか

先日の会議から陛下の様子が変わったとは思っていたがまさか本当に魔女が存在が気になっていたなんて・・・

（表で陛下がそのようなことを考えていると民に思われては示しがつかない）

「・・・はあ」

堪え切れず口から出たのは大きなため息

そんな私を尻目に陛下は黙々と書類を片づける
有能な陛下なことは私も認めよう

陛下には才能がある
故に陛下は頭が固い

だからこそこの話、冗談ではないことなど百も承知だ

「どうして魔女なのです」

普段の陛下なら御伽噺に過ぎないものなど聞き流すのに、なぜ魔女に反応するのか

（我々より300年も前にこの世界から姿を消したのだぞ。今や魔女の御霊はこの城の各所に秘密裡に保管されている。．．．中央の魔女ですら生きているのかも分らない。血を分けた混血の魔女ですらこの世界を探しても我々だけでは探しきれないほど少ないというのに）

まして自分は年若いとはいえこの国の宰相だ

それを陛下は分かっているのかと問い詰めたくなった

「一度でいいから見てみたいのだ」

．．．私利私欲の為に私という存在がいるわけではないんですよ
陛下

もっと正当化した理由があると思えばなんと、見たいだとは

頭が切れる賢帝ではあるが

．
まだまだ冒険する子供心を持った青年には変わらないということか
．

（これで領けば当分は私の仕事を部下にまかせっきりになるのか）

陛下の言葉は絶対だ

これで首を横に振れば陛下から仕事をいつもの倍押し付けられるのは目に見えてわかる

もう一度ため息をついて陛下を見据える

陛下の海より深い青の瞳が私の瞳を捕える

陛下とは似ても似つかぬ漆黒の瞳

何度憧れただろうか

この地味で仕方がない髪と眼

陛下の持つ濁ることのない金髪と深い蒼の瞳はまさに自分が欲している色だった

「で、私は具体的に何をすればいいのです」

そう言えば陛下は驚いたように私を見てその後嬉しそうに笑うのだ

この笑顔を見てしまえば何も言えなくなる

想像もできないくらいそれは可愛らしく笑うのだから

本人には絶対に言えないが・・・

「お前のその何にも染まらぬ黒で視ろ。真実も嘘も見抜ける素晴らしい眼を存分に生かせ。お前が一度でも一瞬でも反応したならば信憑性に欠けていてもいい、ここに連れてこい」

——なんてことだろう

これだからこの帝国の陛下に仕えたいと心から思うのだ

（私の瞳を素晴らしいと言うこの人の存在があるからこそ私の今があるのだ）

大げさと言いかもしれない
ただ、自国よりこの国の方が生きやすいのは確かなんだ

「ロード・ランウェイ。魔女と思わしき者を見つけ次第、俺のところに連れてこい」

私はその命令に傳き

「御意に」

一言、すべて受け入れたかのように一瞥した

そのまま部屋を出て部下に仕事を押し付け城を囲う大きな門を数人の僕を連れて進みだす

（だがこれでは目立つな）

考えた私は乗ってきた馬車を裏に隠すように止めて自分の足で探すことにする

最初は案外早く見つかるものだった
何人かに見たことは無いかと尋ねると各々がどこかに走り出し女を連れてくる

こんなにたくさんいたのか
そう思いつつ陛下のところへ連れて行くもすべて偽物

「身なりがいい兄さんだったからね、つい」

なにがついだ
要は皆金や地位を目的としグループになって私をだましていたという
ことではないか

国の宰相がこんなに騙されていいのか？
いいに決まっている、一々嘘を見抜く労力があるなら仕事に回せ

これが私の考えだ

ただ騙されて私に不利な、利益のない最後があるとしたらそれを気づかれぬよう消すのみ

（ただ、馬車だけでなく身だしなみか・・・）

私の恰好も一理あるだろうと着替え再び聞き込みを始める
今度は誰からも相手をされなくなってしまった

そりゃそうだ

魔女を見たことがあるか、なんて頭のおかしいやつが言う言葉以外
にはない

子供が言ったならまだしもだが

「過酷だ」

眩きつろつろさまよう

陛下から命令を下されてまともな魔女候補を連れていけなくて早半年

気力を失いかけながら歩いていると濃厚な魔力を感じ取った

ふと、目をやればそこには可愛らしい娘が似つかぬポシエットを下げてこれまた似つかぬ店へと入って行った

（いや、娘というより娘の持っていたポシエットがおかしい）

確かに濃密濃厚な魔力を感じた
店を見ればそこは魔石専門店

そうか、そこで魔石を売るのが

あのポシエットに入っていたのはきっと魔石だろう
そう考えて娘が出てくるのを待つ

暫くして出てきたがなにやら来た道には人だかりができていて通れない状況のようだ

（ならば道は一つでしょうね）

私は先回りして倒れたふりをする
案の定娘は私の思惑通り私の倒れている場所を通ろうとした

説得し、娘と目が合った瞬間
私の陛下から素晴らしいと言われた目が娘の中にある銀をほんの一瞬捕えた

もう一度視ようとしても変わらない
だが確かに見たのだ

「陛下からは魔女と思わしき人は全て連れてくるようにと賜っております。貴方にも来ていただきましょうか」

横暴だとわかっている
だが、ここにきて私の眼が反応したのだ

娘を連れていきまた魔女探しに明け暮れる
すると数日後、陛下がその魔女を騎士にしたと報告が入った

（漸く一人ですか）

先が思いやられる

「ランウェイ様だけ特別ですよ」

私の眼はやはり使えないらしい
再びあった娘からは魔力のも然程感じられずまして銀などどこにも
ない

さらに私に対しても礼儀など無いに等しい

だが．．．

陛下が認めたのだからそれ相当の人間であるには違いないだろう

無理矢理この場に連れてきたことについて非を詫びるつもりはない
がその分サポートくらいはしてやろう

「斬新な笑顔ですね」

だから貴女には憎まれ口を叩くんです
これも一応お詫びのつもりで．．．

「ロード・ランウェイの護衛としてミアが行け。北の魔女が本当に居るのか確かめてこい」

ただ、この言葉だけは頂けないですよ陛下
私達は決して仲がいいわけではないので・・・

ふざけるな陛下

と、言えない代わりに旅の間はこの娘を弄ろうか

執務室に入る光を浴びながら旅の楽しみをそうやって探すのだった

宰相と魔女その3 SIDEロード (後書き)

ロード視点終了

宰相と騎士その1（前書き）

サブタイトルこれ以外に見つからなかった・・・

宰相と騎士その1

「．．．ありえないわ」

顔を出し始めた太陽を見つめ一言

眠れるはずがない、勿論わくわくしているから眠れないのでは決してないけれど

私の言葉は誰に返されることもなく寂しく部屋に拡散した

あの後、渋々私とロードさんは陛下の命令に頷いた
これも任務だと、彼が今回護るべき者だと言い聞かせて

一日の勤務が終わる部屋に戻るとリリーがいつものようにおかえりなさいませと言ってくれた

でも、その微笑にいつもなら癒されるのに今日は特別リリーに甘え
たくなった

（鬼畜と遠出をしると！？可笑しいわ、ありえないわー！！）

精神衛生上ロードさんと北の国まで行くのは厳しいものがあるんじ
やないかしら

決まったことをいつまでも言っていてもしかたがないのだけれどさー

物思いに耽るかのように窓を見つめて数分
コンコンと控えめだけど一定のリズムで扉を叩く音が聞こえた

「失礼いたしますリリーです」

（もうそんな時間か）

扉が開くのを絶望的な目で見つめる私
さぞ今の顔は酷いだろう・・・

「あら、お目覚めでしたか。おはようございます」

そう言ってリリーが私の元へとやってきた

「おはよう」

「初めての視察で興奮なさって眠れなかったんですか？うふ、可愛らし．．．きちんと眠らないとお体に差支えますわ」

．．．何か危ない音を聞いた気がするからこれは流そうと思う
少しリリーを見直したかと思えばこれだ、つかめないなーリリーは

話しながら着々と私を飾るリリー
服装はやはり視察のためか、白のロングコートを羽織りはちみつ色の髪を縛る

（まさにできる女騎士ね）

鏡に映る自分に過剰評価
勿論声にも表情にも出さない、だってイタイわ

自分で言っただけ．．．

「今回の視察に私が同行できず残念で仕方ありません！気を付けてくださいね、夜は危険ですからしつかりと戸締りをしてお休みになつて下さい！！ああ、お召し物は毎日変えて下さいね。洗濯はそこら辺にいる騎士にでも頼んでかまいませんので・・・いいえ、それでは魔女様のお召しになったご洋服に知らない者が触れると云う事かしら！？それは駄目よ！！やっぱり私が――」

（いつになつたら止まるんだ）

遠い目でリリーを見つめるも

彼女は完全に自分の世界に入ったようで私の視線なんて感じていない

どうしてこんな女性が女官の？2なんでしょう

強いのは分かるけど、この性格はある意味危険じゃないかしら

未だに言い続ける彼女を無視して私は部屋から立ち去った

立ち去る寸前リリーに向かって

「いってきます」

って言ったけどリリーは”駄目よ危険よ！でも——”だなんて言い続けていたからやはり放置

廊下を進みそのまま外へ出る

昨日のうちに陛下にはいつごろ出発するか伝えてあるから私達はそのまま赴くのみ

まだ出発してもいないのに気が滅入りそうだ

天気は良く

これから視察に行くにしても素晴らしい天気だ

（うわーいたいた）

門の前で数人の従者を従えてロードさんは立っていた
近くには大きな馬車もある

それにしても

太陽に曝しても黒いなんてすごいわね

なんて少し思ってしまった

怒られる前に、そう思って足早にロードさんの元へ行く
気づいたのかロードさんはこちらを向いた

「おはようございます」

「上司より遅刻ですか。生意気ですね」

お前がな

年下の若造のくせに生意気なんだよ

．．．．そんなこと言わないけど

鼻で笑われ馬鹿にされているのが肌でも感じる
悔しいがここはひとつ大人の対応とやらだ

ふふふと微笑めばロードさんは呆れたように私を見ていった

「笑って許される程世の中は甘くないんですがね。まあいいでしょう、貴女に掛ける時間が勿体ない。早く乗ってください」

（くそー、いまに見てなさい）

悪役の台詞そのまま採用

でも一番今の私を表現してくれる言葉だもの仕方がない

ロードさんの発言にまたもふふふと笑い
静かに私は馬車に乗車した

中はとても過ごしやすそうな内装
ロードさんが相手じゃなかったら快適に過ごせただろうに

ロードさんが私の次に乗ってくるのを見て
そう思わずにはいられなかった……

宰相と騎士その1（後書き）

旅が始まります始まります

宰相と騎士その2（前書き）

昨日は急用で更新できませんでした
失礼しました

では、どうぞ

宰相と騎士その2

300年も経つと道も綺麗になるものね
あまり揺れることのない馬車はとても快適だった

何度も街には来ていたけど

フウ君頼りだったからなかなか自分の足で歩くことは無かった

帰りだって近道のために道ではなく荒地を通っていた

改めて人間の生み出す知恵に驚かされた

「ミアさんは何故ここにいるのです？」

唐突にロードさんが私に尋ねた

それ、連れてきた本人が言う言葉か

そう思うも暫し微笑んでみた

「いえ、質問の内容が悪かったようで．．貴女にでも理解できるようにお話ししましょう。なぜ、貴女は最初あんなに抵抗していたのに今は大人しく陛下に従っているのです？」

（疑っているのね）

ロードさんの眼差しは強かった

さっき私が自分を魔女だと言ったときに睨まれた時のような・・・

真名によって契約されてしまったから

これが一番の要因でしょうけど・・・でも、彼らのこれからが少し気になったのも確か

「1年だけという契約と、その期間の優遇を約束されたからです。」

「麓に残されたおばあさんとやはらは大丈夫なのですか？」

「近くに村があります。私がお使いに行くときは必ずその村にいるお茶友達のところへ行っているので大丈夫です。ただ・・・1年も空けるとなると流石に心配されますから、暫く落ち着いたら行くこと思っていたんです」

我ながら完璧な嘘

ロードさんは腑に落ちないような表情をしながらも納得したように頭を傾げていた

「城を出る際は必ず陛下に一言言ってくださいね。無断で出ることの無いように」

「はい」

とりあえずその話は終わったようで

再び馬車の中はガタゴトと車輪が回る音以外は聞こえなくなった

――

ガタンと急に馬車が止まった
何事だろうと思ってロードさんを見るとロードさんは気にせず座っている

（あれ？なんで止まるのさ）

そう思っていたら馬車の扉がノックされ
外から開けられた

「到着いたしました」

「ええ」

外から話しかけてきたのは
この馬車の運転手さん

でも、北の国に着くのは早すぎよね

その疑問を察するようにロードさんは私を見て

「長旅になるでしょう。少しずつ休憩しながら行かないと身が持ち
ません何かあった時に体力がなければそれはそれで危険ですからね」

と言つて先に馬車から降り私に手を差し伸べてくれた

本来ならば騎士である私が先に降りて安全を確認しなければならな
い立場であることをすっかり忘れていた

分かっていたかのように呆れられた
しょうがない、だってそんなものは知らなかったのだから

．．なんて言い訳を心で呟き完結させる

「す、すいません」

「構いませんよ。ただし、今後は気を付けて下さいね」

渋々その手を取り降りる
上を向けばロードさんの背に大きな店が立ち並んでいた

（ここは．．．）

見たことのない街並みだった
いや、実際には行ったことのない街かな

いつも木の上から街を見渡してきたから
ある程度どこに何があるかはわかるけど必要な時以外、街の中心部にしか行かなかったからここはもう全くと言っていいほど知らない
場所

ある程度品のある店ばかり立ち並んでいる
貴族通りってところかしら

「ぼーっとしないでください。行きますよ」

「は、はい!!」

私の手を離し立ち並ぶ店の中でも人気がひときわ大きな佇まいの店へロードさんは入って行った

その後を急いで追うように私も小走りでついていく

カラン

と鈴の音を鳴らして扉を開くとそこには結構人がいた

「いらっしやいませ・・・ランウェイ様ではございませんか!随と顔を御見せにならないので心配していたんですよ。おや、そちらのお嬢様は・・・もしや?」

横から出てきたのは

60を超えたであろう髭を生やした老人が民族衣装らしきものを着こなして出迎えてくれた

ロードさんに気安く話しかけられるだけの人間なのだからきつこの店の一番偉い人かなんかなのだらうと推測する

「ボルドー殿、彼女は私の護衛ですよ」

さりげなく近寄ってきていたボルドーと呼ばれた男の人を手で押しのける

私のほうを見てなにやら気にしている様子

ボルドーさんは私に優しく微笑んだ

「いやいや、これは失礼致しました。女騎士とは勇敢に御座います。．．．ささ、お席にご案内致します」

333

そう言つて私とロードさんを奥へと案内してくれた
この人は信用できるのだらう

ロードさんは何を疑うわけでもなく素直にボルドーさんについて行っている

私もそんなロードさんの後についていく
まるで金魚の糞だとさびしくたとえながら．．．

「こちらにお掛け下さい」

促された場所はカウンター奥

この店、カウンターのほかに個室なんかもあって

淡く光るライトしかないからゆったりできそうな雰囲気だと思った

（身なりもなかなかいいのね）

チラリとほかの客を見ればロードさんの登場に驚くも、騒ぎ立てることはせず静かに同席する人たちと会話を楽しんでいる

今がオフであることを理解しているからこそ
誰も彼に挨拶をしたりはしない

頭の賢い連中なこと・・・

「本日はどういったご用件で？」

普通何を頼むか、ではないのかしら

と思ったけどロードさんが考えているようなので口を出さない

まず、カウンターに品書きを書いたものがないことと店にいる客全員が何も頼んでいないところをみて変だとは思っていたけれど

「北の国の件で少し」

「ほう．．．北ですか。暫くお待ちください」

ボルドーさんはその綺麗に生やした髭を一、二撫でした後どこかに行ってしまった

たまらずここがどんな店なのかをロードさんに尋ねる
するとロードさんは得意げに

「情報屋ですよここは」

そう言って笑った

宰相と騎士その2（後書き）

新しいキャラ登場です！

いつも感想、お気に入り登録ありがとうございます

宰相と騎士その3（前書き）

随分更新できずにすいませんでした
理由は活動報告にて・・・

宰相と騎士その3

——情報屋ねえ．．．

ロードさんを見た後周りを見渡す

確かに皆手にしているのは紙切れ
それを見ながら真剣な表情で何かを話している

「他にも沢山あるんですか？」

見るのをやめ視線を再びロードさんへと向ける
彼は少し目を鋭くした

「ここが一番信憑性に長ける場所でしょうね。確かに他にも何軒かありますが、大半が金儲けをしたい奴が言っている嘘でしかありません。この店主は今まで私に有益な情報しか与えたことは無いですし沢山の情報を握っています」

ただ．．とその後残念そうな顔で

「ただ、情報には値段がありまして、分野ごとに値段が違うんですよ。それに一つの情報が少なすぎるので倍以上の金額を払わなければいけないです。外から見ても外観は素晴らしいものだったでしょう？やりくりがうまいんですねこの店主は」

確かに他よりも目立ってはいた

．．．つーことはなんだ

ここにいる人たちは皆金持ちってことか

一見優しそうなおじさんは実は金をむしるのが上手な人だってわけ

ま、いわくつきの仕事をしている人以外はこんな場所に用はないでしょうし、一々自分が調べなくてもお金だけ出せば欲しかった情報が手に入るのだからお互いに何も言えないでしょうね。

「遅くなって申し訳ありませんランウェイ様」

ボルドーさんが手に数枚の紙を持って現れた
あれがきつと情報なのだろう

ボルドーさんは手に持っていたその数枚の紙を机の上に置いた

「これが今現在のエンブレス・アロツソの内政状況です」

エンブレス・アロツソ

通称ブレロ大国

一年を通して比較的暑さはなく常に涼しく過ごしやすい
西の魔女が大地を割るまでは帝国に従っていた小国だった

ブレロには北の魔女アネツサ姉さまが居た

大地が割れたことによってブレロは帝国に対して同等に扱うことを
要求

何年も前から帝国に恩恵があつたはずの小国は
魔女の一件を境に敵対とは言わないものお互いに干渉することは
しないと暗黙の了解があつた

340

ロードさんは置かれた紙を手に取り真剣に読み始めた

私はその間静かに座っているのみ

時折^{まなじり}眦に皺をよせ難しそうな表情をするも

数分もしないうちに目を通したのか再びその紙を机の上に置いた

「どうです。なかなか興味深いものがあつたでしょう?」

ボルドーさんがそう言えばロードさんは少し笑って頷いた

「そうですね……。本当にあなたの情報網には関心するしかありませんね。正直助かりました、いくらですか?そろそろ出発するの
で」

うーん

気になるところだけど口は挟まないで
おこう
後が怖いからね

「150モル……。と言いたところですが、今日はミア様に免じて報酬は頂きません。道中お気を付け下さいませお二方。」

え、私?

なんで私に免じてなのだろうか

そんな目でボルドーさんを見れば彼は目じりをくしゃりと下げて微笑むだけだった

「本当にいいのですか？」

ロードさんも信じられないと言いたげな表情をしている

「ええ。私の気が変わらないうちにささ．．．お行き下され」

その言葉に私達は後ろ髪をひかれる思いをしつつもその店を後にした

出る際ボルドーさんが私に

「あの方が女性をこの中に入れたのは初めてなんですよ。女騎士の方ともよくここに立ち寄られることがあったのですが決して中に入ることはなかったので．．．こんな爺ですが少しばかりウキウキしましたぞ。．．．北のことはあの方に聞いてください、話して下さいでしょうから。お氣をつけてください」

そんなことを言い残してくれた

なんというか．．．なににウキウキするかはスルーしようと思う

再び馬車に乗り北に向かって進む

今日はこの先にある中央の国、国境の一番端にある宿に泊まるらしい

何日間かは馬車に乗り続けなければいけないのね

それにしても・・・

（あの店を出て以来深刻そうな顔しかしてないわねこの人）

ロードさんは難しそうな顔をして窓の外の景色を眺めている
あの紙に何が書いてあったのか

北の内政状況ねえ・・・

北も魔女を本気で探しているようだけど

きっとそれに関しての情報に違いはないわね

魔女ねー

私には血を分けた分血の魔女は二人しかいない

その二人もあの300年前の魔女狩り以降会っていない

魔女が多いのは多分南でしょうけど

今回は北でしょ．．．本物の魔女だったら昔話とかしたいな

そんなことを思いながら私達は馬車で揺られ続けた

宰相と騎士その3（後書き）

そこまでの進展はなし！
続きは明日です

女店主その1（前書き）

さてはて・・・

女店主その1

馬車の窓から見える景色はだんだんと深みを増しいつの間にやら夜になっていた

（いつになったら着くのかしら）

そんなことを思っていると

馬車がスピードを落とし始めた

暫くして馬車は止まり運転手が扉を開けてくれる
さっきの失敗を繰り返さない様先に降りる

そして周囲に異様な気配がないかを確認してロードさんに降りるよう目で合図をする

「ここにくるのも久しいな」

私達の前に佇む一見の宿

馬車の運転手は馬を休ませると言ってどこかへ行ってしまった

あの馬車の運転手も一応ロードさんの部下

一見おっとりした風貌だけれどやっぱり宰相のお抱えとあって頭が

よく機転がいい

．．．と、今日一日を見ていて思った

「いらつしゃい」

不意に女性の声が聞こえた
その声にロードさんが反応する

「こんな時間にすいませんアンネ夫人」

「いいんだよ別に構やしないよ。ほら早く入んな」

アンネ夫人と呼ばれた女性はここの店を切り盛りするひとなのだろうか？

月夜に照らされて見えたのは
それはそれは憧れるほど素敵なスタイルをした艶やかな文字が似合う人だった

（私もあんな風になりたい）

「何をしているのです。行きますよ」

私がずっとアンネ夫人に視線を送っていたのを知ってか知らずか口
ードさんは呆れたように私にそう言った

「は、はい！」

「おや．．．ランウェイ様ったらこんなかわいい御嬢さんをお連れ
していたなんて！」

夫人は私を見てニコリと微笑む
いや、貴女がとてもかわいらしいです！！

「護衛ですよ、だたの」

フンと鼻で笑って先に宿に入っていく
なんなんだ、絶対に最後付け足したでしょこの人

ほんとーに可愛くない小僧なこと
なんて思いつつも後が怖いので何も言いませんよ

「ふふ、ランウェイ様もお変わりないねえ．．．貴女もここにいつまでも突っ立ってないで中に入りなさいな。あの方と一緒になんて疲れたでしょうから早く休みなさい」

そう言って白い手で私を中に押しやった
なんて優しい人なんだ

そーだよ

ロードさんと一緒にいると本当に疲れるの！精神的に！！

この人はそこところをよく理解しているわ

しみじみ思いながら中に入ると
思っていたよりも豪華な内装だった

「ここは帝国の貴族が遠征中に立ち寄る宿も兼ねているので設備とにも充実しているのですよ。明日には帝国を抜けて北へ行くための森を抜けます。明日は体力を有するでしょうから今夜は早く休みなさい」

ロードさんはそう言って案内人と共に部屋に行こうとする
すると後ろから夫人が少し怒ったように言った

「待ちなさいなランウェイ様。少しでも胃に何か入れてからお休み
くださいまし．．．それでは栄養が体に行きわたりませんから余計
疲労がたまるだけに御座います」

私のローブをそつとおろしてくれた
案外重いのよねあのローブ

それに気が利くじゃないの．．．

「お前はまるで母の様だな。こんな時間でしょう、夕食の準備は失
礼かと思ひましてね」

上つていた階段を再びおり始めたロードさん

確かに彼の言い分も周りを配慮して言っていることだと頷けるわね

「お客様が心配されることではないよ。こちらとしてみればこんな
時間でも頼ってきてくれる貴方達が大切ですからね。夕食の支度は
いつでもできていますよ」

「感謝しますよアンネ夫人」

（よくできた人たちがばかりね．．．。私達が到着した瞬間から確かに微かに煮込んだスープのような匂いはしていた。貴族の為の貴族の宿ねー）

「さあ、お召し上がりになって」

目の前に出された食事は本当に豪華でした
私の好きなバラナの実も贅沢にケーキに使用されていたり野菜の色に紅茶の香りに使われている

他にも沢山

普通の人なら食さないような珍料理が数多く並んだ

「ここは帝国の端っこ。豊富な材料が各地から毎日届くんですよ．．
だからどれも新鮮ですよ」

そう笑顔で説明までしてくれた
確かにここなら東と西と北の食材も手に入れられそうね

私とロードさんはありがたくいただき、その後部屋へと案内された

私の部屋はロードさんの隣

本来ならロードさんの扉の前で護衛するべきなんでしょうけど、明日からの旅とこの宿の安全性を視野に入れ私も休むことになった

一応ロードさんの部屋の前には兵士が2人
数分おきにこの宿を見まわる兵士が13人

宿の外を巡回する兵士が45人ほどいるらしいから安心

「ごゆっくりお休みくださいませ」

「ありがとうございます」

ランプを持った案内人が私にそう言って元来た道を引き返していった

私に与えられた部屋は王宮の部屋までとはいかないけどとても豪華

全体が白を基調としていて

窓際にある花がいい香りを出していた

（あの花は・・・ラ・ヴェーネの早咲きね）

近寄ってその甘い香りを堪能する

ラ・ヴェーネは本来香油に使う原料にもなる

大きくその花を咲かせたときが摘み時と言われている

ただ、早咲きのまだ完全に咲いてない状態だと餌をおびき寄せるために甘い香りをあたりに広げる

一応は魔花の一種だけれど人体に影響はないからよく取引されるらしいわ

「一昔前はこの花もそれは想像もつかないような値段で取引されていたわよね」

主に貴族が好んで買っていたから値段は一般人が手出しできるものではなかった

今はどうかかわらないけど
きっと昔よりは生産技術も進んでいて誰でも手に入れられるんじゃないかしら・・・

（それにしても・・・この宿にも結界が張り巡らされているわねー
凄いわ）

窓を見れば薄く膜が張ってある
徹底しているところを見ると、この宿にそれは凄いお偉いさんも泊
まると云う事が分かる

つまりはロードさんみたいな人ね

んー・・・でも息苦しいねー
結界に守られているのはいいけどそこら辺にいる精霊の声が全然
聞こえない

音もシャットアウトされているのは
森育ちの私としてはなかなか静かすぎて眠れないわ・・・

「フウ君フー君・・・おい、フウくん」

「何度も呼ばなくてもここにいてーの!」

暇だからフウ君を呼んだら
すぐ後ろに立っていた

「そうカリカリすると禿るらしいわよ？それより少し散歩に付き合
つてよ！」

「はげ！？．．．いや、散歩？構わないけど．．．どこに？」

私の禿る発言にショックを受けた様子だったけど
切りなおして私に手を差し出してきた

黙っていたら本当に美を兼ね備えた青年なのよねフウ君って

私は笑いながら彼の手に自分の手を添える

「勿論あそこよ！」

「．．．はいはい」

次の瞬間

窓も開いていないのに風が吹き、私たちはその場から姿を消した

女店主その1（後書き）

うん、ゆっくりゆっくりいきましょーう

女店主その2

月が照らす庭園に不意に影が二つできた
そう思った瞬間一陣の強い風が美しく咲く花を巻き添えにしながら
舞い上がった

「とーちやく」

フウ君の手をそつと離してあたりを見回す
特に変わった様子もなければ不穏な空気も感じられない

「なんでここなんだよ」

「なんでって・・・なんとなく？」

私はフウ君にある場所に行くよう願った
それは王宮の内部、リーナ姉さんの御霊がある場所

もうすぐ北に行く

もしかしたらアネッサ姉さんの御霊があるかもしれない

(そういや、なんで中央にリーナ姉さんの御霊があるのかしら)

不思議とそう思った
いくら昔は同じ一つの大陸だったとはいえ東と名のつく国の魔女だった

なのに私が存在するこの場所に魂がある意味があるのかしら

私がここにいる限り少なからず自然は均衡を保ったまま普通の生活が送れるはず

リーナ姉さんの水だって各地に存在する水の精霊にお願いすればどうにだってなる

ここに彼女の魂は必要ないわ・・・

そんなことを一人考えているとフウ君が私の腕を掴んだ
フウ君は甘えるような素直な子じゃないから驚いてフウ君を見上げる

「なあ・・・誰か来るぞ」

鋭く

研ぎ澄まされた刃のような目をしてどこかを見つめるフウ君

精霊は基本的に親しみやすい
でも、警戒心が高く一度でも変な動きをすれば二度と、話すどころ
か近づくことさえできなくなる

「怖い？」

試すように見上げながら言えばフウ君は少し笑った

「まさか、それでも伊達に生きてないさ」

私を掴んでいた手が今度は私を守る様に包み込んできた

「私から見ればまだ子供よフウ君も」

「うるさいババア」

近づく気配に警戒しつつも
どこかフウ君なら安心だと気を緩める

(ババアって言うなって何度も言ってるのに)

フウ君の背に守られながらそんなことを思う

次第に足音が聞こえるようになってきた
複数ではなく一つ

「これは凄い」

フウ君が目を輝かせながらそんなことを言った
何が凄いのか

それはその足音から放たれる魔力の純度、質、量共に無尽蔵に魔力
を持つ精霊をも圧倒する力だから・・・

フウ君はこんな馬鹿みたいな子だけど
実際は戦闘でも本当に役に立つ精霊

まー、私が直接見たわけじゃなくて彼を呼び出した人間が言っていた話を盗み聞きしたただけなんだけどね・・・

「誰だ」

在り来たりな台詞だな
遂に足音が止まる

素晴らしい魔力の持ち主は足を止め私たちに剣を向けた

凜々しいですこと

—— 帝王アレン・アルファジュール様

幸い私はフウ君の背に隠れていて顔がばれることは無い
まして寒いからという理由で着てきた大きなローブの御蔭で体系が
ばれることもないだろうし・・・

あちらさんは惜しみなくその美しい顔を月夜に翳しているけれど

「お前は・・・精霊か」

スツと剣を降ろす陛下

精霊には刃を向けない・・・いい心がけだわ

魔女にとって精霊は自分の子供のようなもの
もしフウ君に彼が切りかかるものなら全力でそれを私が排除しよう
と思っていた

まあ、陛下もそこまで愚かな人間ではないと信用はしていたけどね

「なぜここに精霊がいる」

「主がソレを望んだからだ」

そう言つてフウ君は私をチラリと見た

おいおいふざけているのかこの餓鬼は・・・

この状況からして陛下、私には気づいていなかっただろうに

何故私を紹介する

案の定陛下は少し驚いたようにしてフウ君の背に隠れていた私を見ようとしている

（・・・性質の悪い復讐をするもんだこの餓鬼は）

フウ君はニタリと笑っていた

きつといつかの仕返しが来るとは思っていたけど

このタイミングはないわ．．．

あの時無断で精霊とのかかわりをシャットアウトして危険な目にあって凄いフウ君に怒られた

でもこれは厳しいんじゃないかしら？

私は無言でフウ君を睨む

一瞬怯むも俺は悪くないと言いたげな表情で再び前を向いた

「後ろにいるのは．．．人間ではないな。精霊か？」

（ほう、人か人でないかを見分けるなんて凄いね）

本当にこの人、人間なのかしら

そう疑ってしまいたくなるような彼の存在

「精霊が精霊に仕えるのは精霊王のみ．．．主は云わば精霊王より尊き方ぞ」

あらフウ君口調が変わっていつてるわよ
精霊王、私も一度しか会ったことないわ

いつだったか．．．

ああ、300年前魔女が眠った時だ

「余計にわからんな。出てきてはくれぬか」

思考を遮るように陛下が問うた
陛下の問いにフウ君は答えない

私にどうしろと．．．

「先に物騒なものを仕舞うのならば．．．な」

私は何もしてくれないフウ君の代わりにフウ君の背後で声を出す

陛下はそんな私の声に反応してその立派な剣を収めてくれた

女店主その2（後書き）

中途半端に終わります
↑

女店主その3 - SIDE | - (前書き)

はい、3話目です

今回は第三者視点、つまりは客観的に

要約するなればナレーターのな．．．

「どうなさるおつもりで？」

光の差し込まないその一帯に数人の気配
月でさえも遮断してしうようなその場所で事は起こっていた

「まだその時期ではない」

誰かが問うたその声にまた違う声色の誰かが答えた
違う声色の誰かは静かに窓から空を見る

この一帯は何ものにも邪魔されない様自然の摂理を捻じ曲げて作っ
ている

故に日の光はおろか風さえも吹きはしない

「それでは我々はあの御方に信頼を置いてもらえないではないですか！いつまで水面下でこのようなことをし続けるのです！？」

「黙れ！！」

突如、何もない暗い世界に風が舞う
その風は先ほど見ていた窓をも壊す

「まだ時期ではないの・・・動くな」

自然の摂理を捻じ曲げて作った世界にひびが入り
そこから差し込む微量の光

その光りに照らされたのは一人の女だった
女は近くにいた男をこれでもかと睨んでいる

そして女の声は絶対的支配力を持っていた

”黙れ” その一言は怒気を含んでおり女の顔を一層歪ませていたに違いない

「申し訳・・・ございませんでした」

男は音も立てずにスウっといなくなる
まるで煙の如く

「暫く一人にしてはくれぬか」

「」「御意」「」

傍で待機していたほかの者達も次々に煙のように消えていく

暫くしてその場に残ったのは女だけになった

「ほんに．．．この世界は薄汚れておるな。300年前、純潔の魔女が居た時代ならばこんなことにもならなかっただろうに。今この世界をぎりぎりの状態で支えているのは中央の魔女のみ」

今更な話をお前はするのだな

何処からともなく声がする

人払いが女が済ませたはずなのに．．．

しかし女はその声に驚くわけでも、まして怒るわけでもなくその声を近くへ呼んだ

のしりのしり

時折ミシッといわせながらゆっくりと近づいていく

それを女は愛おしそうな眼差しで見ている

「今更．．．か。そうであろうか」

だがあ奴らが言ったことも一理あるぞ。このまま水面下でただじっとしてばかりいては我々はあの御方から信用を失ってしまう

女の元にいたのは大きな獣だった

漆黒の毛並を優雅に躍らせてその獣は女の足元に座り込む

一つ一つの動作があまりに優雅

そして月明かりでさえもものともしないその黒

「あの者共より先に我々が魔女を見つけ出すのだ。その意思は変わっていない．．が、私はまだ動く時期ではないのだよロイ」

ロイ．．それは獣の名だった

女の手に撫でられ気持ちよさそうに目を細めるも

ロイと呼ばれた獣は依然納得をしていない様子

「頭が固いのは嫌だねえ．．．本当に」

お前が言つかそれを

獣は再びのそりと立ち上がる

四本の脚で立っているのにもかかわらず大きさは近くに座っている女と同じくらい

女が座っている椅子はけして低いわけではない
むしろ女の足は椅子からぶら下がっている状態で・だ

「もう行くの？」

名残惜しそくに女は呟く
ロイはその声に無言でうなづく

こちらにはこちらの仕事がある

そう言って窓から消えていった
その瞬間

こぼれる程度しか差し込むことのなかった月の光が部屋一帯を包み込んだ

時折その壊れた窓から風が吹く

「素早い獣よ」

女は窓の外を見つめる
それはまるで恋い焦がれる姿

よく見れば部屋はそれほど汚れてはいなかった
ところどころ何かでひっかいたような跡がある

多分それは先ほど女が怒った時に出来た跡だろう

「私もそろそろ戻るかね・・・」

女の呟きは誰に返されるわけでもなくその部屋に静かに響き渡るの
みだった

女店主その3 - SIDE - (後書き)

一応これから先重要・・・かな

女店主その4（前書き）

サブタイトルの女店主で引きずるの大変かな・・・
とか思いつつもいつの間にか4へ（――；）

でもまだまだ引つ張ります

・・・ってことはこのままいけば女店主その8くらいまでいきそうだと
りあえずどうぞ！

女店主その4

陛下が剣を鞘に納めてくれたことを見て
私は仕方なくフウ君の背から一步前に出た

「・・・お前は」

私の姿を見て陛下が驚くのが分かった
それはそうでしょ

（本当にフウ君・・・というか精霊は時に反抗期だわね）

いくらこの場所が神聖な魔女の御霊が眠る場所であろうと近くに精
霊の気配は感じられる

ここに許可なく入ることは出来ないにしても近くに気配を感じられ
るはず・・・なんだけど、なんでかしらねー気配がない

助ける気ゼロ

多分フウ君がいるから．．．という感じではないだろうか

私がここに来たいと言ったのはついさっきのことなのに
手筈が済んでいることに私は驚いた

いつの間にフウ君つたら．．．

しかもこのタイミングで陛下が来るなんて
．．．そう仕向けたのかこの子は

『——あーあー、聞こえる？』

うおっとびっくりする

急に私の頭に声が響いた

それは紛れもなく後ろにいるフウ君の声
でもその声は耳から入るわけではなく直接私の頭に流れ込むように
聞こえてくる

(・・・これ、嫌いなのに)

私はこの会話があまり好きではない
傍から見れば急に黙りこくって時折顔表情を変える変態にしか見られないから

無表情で会話ができれば最高なんだけど
そんな簡単にできる話ではないからね

とは言ってもこの状況

フウ君が私にそんなことをしてきているのだから・・・と大人の対応

『聞こえてるわよー本当にどういづつもりかと思うけどお説教は後ね。何?』

後ろを振り向かないで視線を下に
声をフウ君に向ける

「お前は何者だ」

探るような目で陛下は私を見る
何者もなにも・・・貴方の騎士ですが何か

そんなこと、この状況で言えるわけないけど

「何者でもございません」

なんて安易な答え方をしてみた
そうすれば今度はフウ君との会話

『いやー思い他この男が来るの早くてさ。本当だったら俺たちが立ち去る瞬間くらいに来てくれればベストなタイミングだったわけよ。ババアの焦る顔を少し見れたらそれでよかったんだが．．．どうしよ』

．．．この餓鬼一回土に還してやろうか
なんだ最後の”どうしよ”って。計算外です俺悪くないみたいな

どうしようもないわ
阿呆が

出そうになるため息をぐつとこらえる

『どうにかして乗り切るしかないでしょ。それと．．．フレイン、この人にちょっかいかけんかって言ったでしょーが！！』

久々に彼の本名を口にする

精霊の名もまた、操ったり縛ったりするのに必要なもの

だから普段は彼のことをあえてフウ君と呼ぶ

主従関係ではなく普段はあくまで家族とか友達とかいうレベルでいたいから

でも、今回のことは駄目ね

オイタが過ぎるのよねー、相手は陛下よ陛下

私でもまだあんまりわからない人間に手を出すのは些か不用心というか無謀すぎるわ

「まさか．．．魔女か」

陛下のその一言にあたりには咲く黄色い花が反応した

毒をまき散らすことは無い

だってまだ魔力を使つては無いから
ただ、花はその言葉に反応したのだ

己の主人と同じである魔女がいるかもしれないということに

彼らに魔女かどうかを見分ける脳は無い
だって花だから

でも誰が主で従うべきか、どうされたら敵とみなすか
それは自己防衛として生まれた時から備わっている

（率直にくるねー）

別にこういった類、嫌いじゃない
私は思わず笑ってしまった

後ろにいたフウ君が一瞬肩を上げるのが分かった
何故フウ君が驚く

「何がおかしい」

「失礼。貴方に問いたい．．．魔女の存在を信じるか？」

と、何の脈略もなく聞いてみた
陛下はそんな私の質問に真剣な眼差しでこう答えた

「信じない」

——それが答えか
じゃあ、魔女を探すのは暇だからか？幻滅だな

「そうか」

「だが．．．」

落胆する私をよそに陛下は先程の言葉を打ち消すかのようなはつきりとした声で遮る

「だが、それは立場上の答弁だ。一人間としてはいると、存在していると考えている」

（本当に・・・楽しませてくれる）

口元が上がるのが自分でわかった

見ず知らずの侵入者に堂々と自分は魔女を信じるなど言っている

頭がおかしいと思われるか同情されるかなめられるかのどれかなはずなのに・・・

自分の立場をわきまえているからこそ、なのかしら

そろそろ日が昇る

私ももう戻らないといけない

そつと今度は私がフウ君の袖をつかんだ
彼もわかっているのか私の手を包んでくる

私は陛下に背を向けた

「一国の君主に言わせるだけ言わせて背を向けるとはとんだ無礼者だな」

何も言わないで消えるわけないでしょーが
と、思いつつ私は後ろを振り返った

「これはこれは失礼。なれど私も急いでいる．．．この国の帝王よ、己の立場を弁えそれでも尚自分の考えを持つ貴方は素晴らしい。貴方が存在することによってこの国がどうなるのか少し楽しみになってきたぞ．．．」

フワリと振り向きざまに全身を包んでいたローブの頭の部分だけを取る

失礼失礼と言ってきたのだからこのぐらいしないと陛下には失礼な者で終わってしまうからね

「――嘘．．．だろ」

陛下がそう呟いた

フウ君は驚愕の眼を私に向ける
だからさ、無謀なのはわかってるんだけどさ

ちょっと面白そうだったし？
やらかしたくなっただよ

「ふふ．．．期待している」

そう言い残し私とフウ君はその場から消えた
黄色い花を揺らしながら

既に日が昇り始め朝露がキラキラと輝くその場所に
一人美しき陛下を取り残し・・・・・・・・

女店主その4（後書き）

次あたりでもう少し内容が分かりやすくなるでしょう↑

読んでくださって本当にありがとうございました

女店主その5、SIDE陛下（前書き）

たどり着けない・・・女店主へ↑
余計な物入れ過ぎなのかな・・・

だって陛下視点入れないと話がまとまらないし（・・；）

どうぞ！

女店主その5、SIDE陛下

「陛下、今夜はもうお休みになられた方がよろしいかと・・・」

それは俺を気遣っている女官長の一言

幼少期より面倒を見てくれた女官の一人だ

いわば第二の母の様なものだろう

そんな存在にストップをかけられれば素直に従うほかない

周りの目がない今、上下関係は一切ない

・・・まあ俺が思っているだけだが

「そうだな」

手にしている書類をすべて机の上に投げる様に置く

一枚、風圧で机からひらりひらりと下に落ちた

それを無言で素早く拾い俺に渡してくる

俺はその手を徐に掴んだ

「・・・何をなさるのです陛下」

俺の突然の行動に若干困惑の色をしつつも顔には出さない

「これはどうした？」

ぐっとその手を反せばそこには少しばかり痛々しい痣があった

俺が落とした書類を拾う瞬間に見えた些細な傷だが、この女はこの仕事でそうそうヘマはしない

（と、なれば不自然なのは明らか）

「・・・これ、は」

言葉に詰まるのが分かった

月に照らされた彼女の顔がよりはつきりと浮かび上がる

「あ・・・」

言いかけた途端、どこからともなく強い風を感じた
咄嗟に俺は彼女の手を離した

遠くの方で風が唸っているのが見える
精霊の仕業だろうか

ガッシャーン！！
数秒後その風が遅れて俺たちのいる部屋に風圧として届き
耐え切れなかった窓が音を立てて壊れた

「王宮屈指の精鋭が張っている結界を風圧で壊すなんて・・・」

そんなことを言っていた気はするが、俺はそれどころではなかった
(あの方向は少し不味いな)

壊れた窓に足をかけ後ろに呆然と立っている女官長に指示を出す

「少し見てくる。応援はいらぬ．．．余計な詮索はするなよ」

「陛下!!」

女官長の声を背に俺はその窓から飛び降りた

普通の人間ならば即死の高さ．．．だが、俺には関係ない

全身から受ける風の抵抗を拡散させ何事もなく着地する
上を向けばあの壊れた窓はこの一瞬の間に修復されていた

彼女もきつと俺の指示通り余計な検索はせず、明日には何事もなか

ったかのように振る舞うのだろう

「よくできた女官だ」

小さく笑い目的の場所に足を運ぶ
ここからは歩かなければ歴代の魔法使いが仕掛けた罠に永遠に囚われることになってしまう

咲き誇る花を横目にその場所を目指す

（やはり誰がいるな）

複数の気配だ

近づけば近づくほど気配を感じる
こんな時間にこんな場所に侵入する不届き者は誰なんだろうな

そう思いながら最後の一步を踏み出せばそこには男が一人立っていた

——おかしいな、確かに気配が一つ以上はあったはずなんだが・

もう一度見てもそれは変わらない

「誰だ」

我ながら在り来たりな台詞だな
足を止め正面にその侵入者を見つめる

新緑を思わせる髪

．．．こいつは風の精霊か

なぜその精霊がここに？

いくら魔女が己の母であろうとも、それは中央の魔女だ

水を司る東の魔女は精霊には然程重要な人物ではあるまい

「主がそれを望んでいる」

主だと？

ここにいるのか・・・？

すると突然もう一つの気配を感じ取った

——ほう・・・今までこの近距離で気配を消すなど

人ならざる気配だ

が、精霊ではない・・・いや、精霊なのか？

疑問をぶつけければ新緑の精霊はその問いに答えた

しかしどうだろうか

なれば後ろにいるのは精霊王ということか？

（それはないな。精霊王は決して人のいる世界には踏み入れない・・・
ならば誰だ）

精霊を配下にする魔法使いか？

いや、それは人間だしな・・・

懇願するかのように一言

一国の王が利益なく願うかのように言うのはおかしいがな

そして現れた人物に俺は再び驚く
とても小さい

一見誰かわからないが多分女か少年だろう
背丈がそのぐらいしかない

残念ながら顔が全く分からない
これでもこの国の王なんだがな、俺は

まあ相手は人間じゃないようなので俺に傳く権利はないか・・・

もう一度その訳の分からない人なのか人ではないのかも知りえない
いわば物体を見る

（ありえるのだろうか）

一瞬、期待が胸を走る
だがそんなはずはないと打ち消す

しかし言葉と頭が反して口にしてしまった

——魔女か、と

あり得ない話ではないが、現実を離れすぎている
精霊が従うのも魔女ならばありうる

それが300年も前なら・・・の話だな

その問いに物体は肯定も否定もせず笑い逆に問われた

魔女の存在は昔から信じている
現に、俺は魔女を知っている

嘘も真もあるか

俺がこの目でこの耳ではっきりと覚えているのだから

（一頻り笑い無言を貫いて最後は背を向けるか）

その態度に少々腹が立った

未だかつてこのような扱いをされたのは初めてだ

何様だと思っただろうが

これでも王様だからな

「これはこれは失礼。なれど私も急いでいる．．．この国の帝王よ、己の立場を弁えそれでも尚自分の考えを持つ貴方は素晴らしい。貴方が存在することによってこの国がどうなるのか少し楽しみになってきたぞ．．．」

大概お前も何様だと俺が問いただしたくなる言い方だな
たいがい
敬う口調なのか見下した口調なのかわからない

だが、そんなこと全部今は水に流してやる

（おいおい）

「——嘘．．．だろ」

俺が呟くのが早かったかあちらが早かったか
次の瞬間にはその場に俺しかいなかった

「夢．．．」

そう思わずにはいられなかった
しかし、下を見ればさっきそいつらが居た場所は草が踏み倒されて
いる跡がある

日が昇る

先ほどの女官のように俺も、呆然と立つ事しかできなかった

あれほど探し求めていたものがこのタイミングでこんな唐突にくる
ものか

「ははは・・・面白い」

踵を返し再び元来た道に戻った
帰れば寝る暇などないだろうが、どうでもいい

——銀の最後の保有者
あれは人ならざる美しさだ

朝露の中

新緑の騎士を連れた銀の・・・蒼く澄んだ、それでいて絶対的力を表す銀の瞳を持つ魔女

「見つけ出してやる」

居ると確信した今

俺はこれから貴女を全力で捕まえに行くだろう

こみ上げるほどの歓喜を理性で抑え込む

その時、俺は忘れていた

ロードに就かせた魔女と名乗るもう一人の女を・・・

女店主その5、SIDE陛下（後書き）

はい、今回は長くなりました

そしてこの回で陛下はミアンさんと出会ったのであります

今回もここまで読んでいただいて本当にありがとうございました

女店主その6（前書き）

陛下視点も終わり

漸く本題へ．．．

本題．．．なのかな

女店主その6

「つつかれたー」

お前が言つかそれを

横目で、ここまで運んでくれたフウ君を睨むように見つめる

私も近くにあったベッドに座り込んだ

フワッと包み込む柔らかさ

ローブを外して横に置く

既に日が昇り始めているけれど、まだまだ早朝

起きる時間ではない

気分が高まっているのか、眠る気にもなれない
今日出発するのになー

——それにしても

「フウ君、お前は阿呆か」

あのタイミングは予想範囲を超えている
精霊を従えているうえにロードさんの元へいる私が人間の姿で陛下
の前に現れるなんてことできるわけがない

そうしたらどう考えても私はそのままの・・・
魔女としての本来の姿になるよりほかはない

「だってー・・・」

本当にこの青年は何百年と生きているのだろうか
未だに中身は子供のまんまじゃないの

「どーすんのよ。ばれたよ、ある意味ばれてないけどさー!」

自暴自棄になる

痛む頭を抱えながらそのふかふかのベッドに横になった

「大丈夫だつて。所詮人間だし・・・最悪は俺らがどうにかしてやるよ」

その言葉が一番不安で最悪でしかなんだけどねー

なんて、フウ君も反省しているようだからあえて言わないけどさ

「まあ、私も貴方達を心配させたのは悪いと思っているから今回はチャラにしようか」

（それに、陛下に魔女が存在するとばれたけど私自身今後の展開が楽しみだから満更でもないのよね）

あの時のあの驚いたような、なんとも言えない表情は最高だった

「ほら、あと数時間もしないうちにここに人が来るわ。結界が張つてあるこの場所に私以外の人間が居たらフウ君大変なことになるよ」

横になった瞬間

緊張したのか急に疲れが私の体を襲ってくる

諭すようにフウ君を見れば

理解したかのように私のいる場所から数歩離れた

「またいつでも呼べよ！付き合ってやる！」

（よばねーよ）

フウ君と散歩なんてしたら精神的に疲れそうだ

当の本人は笑顔で風となって消えていった

「うはー．．暇だからって散歩なんてしなきゃよかった。結局リナ姉さんの御霊があそこにある理由もわからなかったしな」

頭を使うのはやめよう

少しだけ、あと数時間しかないけど休もう

――

――さん

――お．．さん

「御嬢さん!!」

「うっわ!?!」

突然耳に入ってきた大きな声に強制的に起こされました

驚いて目を開けばそこには

私達を昨日出迎えてくれたアンネ夫人が・・・

今日も一段と美しいですこと羨ましきかな

「おはよう御嬢さん。」

この人、リリーと同じ属性に違いない
笑顔であいさつをしてくるアンネ夫人

未だにアンネ夫人の声が頭の中でぐるぐるまわっている
何気に凄い攻撃じゃないのアンネ夫人

「お・・・おはようございます」

「下に朝食が用意されているから着替えたら降りておいで御嬢さん」

そう言つてアンネ夫人は出て行つた
言われた通り着替えて下に行けば、そこには昨日の夜より豪華な食
事が並べられていた

「急だつたとはいえ、昨日はあのぐらしかだせなかつたからね。
今日が出発のようだし少しでも氣力を付けてお行きなさい御嬢さん」

(あ．．．あれぐらいっすか)

「ありがとうございます」

席に着き食事を始めようとしてロードさんがまだいないことに気付く

「あの、ランウェイ様は」

手に持ったナイフを置きアンネ夫人を見れば少し笑つて

「あの方は朝食をとらないんだ。だからその分まだ寝ているよ。昨
日のうちに御嬢さんの分の食事を作っておいてくれと頼まれていた
からね」

「そうですか」

もう一度並べられた食事を見る

．．いやいや、どう考えてもこれ一人で食べる量じゃないでしょ

そう思いつつも並べられた料理に手を伸ばす
どれも絶品で美味しかった

残念ながら残したけど．．．

「御嬢さんはいつから騎士になったんだい？」

食事を下げられロードさんが起きてくるまで．．．と長椅子に座っていた

すると正面に座ったアンネ夫人がそんなことを聞いてきた

いつからって．．．昨日から？

「つい、最近なんですよ」

なーんて言えないからうまくごまかしてみた
嘘を言っているわけではないでしょ

「そりゃ大変ね。あの方は変に真面目だから」

そう言つてアンネ夫人は微笑んだ
年は40代前半だろうか

でも笑えばまだまだ若いアンネ夫人

夫人・・・とつくくらいだから旦那様がいるのだろうけど

(そついや見当たらないわね)

「よくランウェイ様をご存じなのですね」

「あの方が小さいときより知っていますよ。昔はまだ可愛げがあつたんだけどね」

「・・・今は可愛くないと云う事ですかアンネ夫人」

何処からともなくロードさんが現れた

聞かれた、とアンネ夫人は悪びれることもなく笑った

この人、国の宰相なんだよね

アンネ夫人・・・なかなか肝っ玉座ってるわ

女店主その6（後書き）

やっとこさ本題までこぎつけた

多分次くらいで女主人は終わるでしょう

読んでくださってありがとうございます

女店主その7（前書き）

ってことで女店主下り終了!!

女店主その7

「そうとは言っていない」

未だにクツクツと喉を鳴らせて笑っているアンネ夫人
一国の宰相を目の前に本当にこの人はやりおる・・・

「まあ、この年でかわいいなど言われたくもないですがね」

（可愛げがないなー素直じゃないのか？これは）

ロードさんは私から少し離れた椅子に座る

つまりは私の横にロードさん

正面にアンネ夫人という形なわけで・・・

「おはようございますランウェイ様」

そう言ってアンネ夫人はいつの間にやら、ロードさんに紅茶を出していた

抜かりない人だ
一つ一つの心遣いが凄い

「ああ、ありがとう」

ロードさんもその紅茶を手に取り一口
私がさつき貰った紅茶より幾分色が濃い

そう思いながら自分が今持っているカップとロードさんが手にしているカップを見比べていると・・・

「ランウェイ様の紅茶は眠気覚ましの一杯だからね・・・食後に楽しむ紅茶よりラ・ヴェーネの花弁を三枚ほど多く入れてあるのさ」

（まるで心の中を読んだみたい）

心中察するかのように素早く説明をアンネ夫人よりいただきました、はい

「さて、そろそろ発つとしましょう」

不意にロードさんが口にした
確かに北へ行くのならあまり長居は無用なものね

私は先に外に出て運転手さんに声をかけた

「御意」

そう言って彼は馬を取りに行った

．．．一度言われてみたかった！！

最初は言ってみたかったのだけれども、自分が言うようになると今度は誰かに言ってほしくなる

きっと私は彼を忘れないだろう

私に敬意を示してくれた一人なのだから！！

———この場合、単純だとは思わないでほしいが

外に出る際

アンネ夫人を含め、昨日部屋まで案内してくれた人や料理を作ってくれた人に一言挨拶をしていた

衝撃的だったのは料理長

．．．を、含めた料理人の方々

「昨日いきなりの訪問でしたのにお料理とてもおいしかったです。今日の朝もとても素晴らしいものでした、ありがとうございます」

そう言えば料理長らしき人が私の元までやってきた

どこにでも居るような本当に普通の人間

筋肉が凄いわけでも、木の枝のようにひよろひよろなわけでもない

「こちらこそ、お口にあって本当に良かったです。」

笑わなければの話だけど．．

料理長が笑った瞬間見えた歯
そう、歯が見えた

キラッキラに輝く黄金の歯が．．．．

「うおっ」

思わず情けない声が出てしまった
しょうがないじゃないか、人生でこれほど輝いた歯を見たのは初めてなのだから

（よくみればほかの人たちもみなさん齒が金ではないか！？）

後ろで働いている料理人に人々がたまに味見をしたり話をしているときに開く口からは眩い金が・・・

「じ・・・ご馳走様でした。」

一言、呟く様に言った声は聞こえただろうか
そんなことはどうでもいい。衝撃的だったのだから

アンネ夫人に別れを告げれば
少し笑って”またね”と言われた

何故？

何はともあれ、馬車も到着しあとはロードさんのみ
扉の前で待機していると目の前のドアが開いた

「さて、では出発しますか」

——　　さてさて、状況の把握ができないよ私

ロードさんとともに出てきたのはまさかのアンネ夫人
どういうことだ

「ぼさつとしないでください。おいていきますよ」

「は、はい!!」

とりあえず置いて行かれるのは嫌なので急いで馬車に乗り込む
いつの間にこの二人馬車に乗ったんだ？

ロードさんは残念なものを見るような目で私をあしらう
．．．．から私も彼を見て静かに笑う

アンネ夫人はそんな私とロードさんの無言のやり取りを見て微笑んでいた

「どうしてアンネ夫人が？」

私が気になって仕方のないことを言う
既に馬車は少し荒れた道を進み始めた

「これから先の森でアンネ夫人が必要だからです」

必要って・・・

「だからさっき、御嬢さんにまたねって言ったでしょう？」

（そういうことですか）

つまりは道案内人も兼ねているのですね貴方は・・・

アンネ夫人は女店主兼、北へ行くための森を案内する案内人でもあったのです

——案内が必要なほど危険な森だなんて
物騒ねー．．．

そんなことを思いながら、馬車はさっきより揺れ始めた

女店主その7（後書き）

はい、不完全燃焼でしたらすいません

とりあえず女店主の下り終了

ここまで読んでくださってありがとうございます

ディーヴァの怒号その1（前書き）

ディーヴァ・・・ご存知の方がたくさんかと思いますが補足として

ディーヴァとは歌姫という意味

サブタイトルの意味は歌姫が大声で叫ぶという意味

さて、どうなるのでしょうか

ディーヴァの怒号その1

ガタンゴトン

不規則に揺れる馬車の中で私達は森に入る準備をしていた

ロードさんは剣を腰に掛け

アンネ夫人は薬草のようなものを用意していた

．．．私は何も準備などありません

そうこうしているうちに馬車は止まった
そして扉が外から開かれる

「到着いたしました。これより先は馬車では進めません．．．旅の
ご無事を祈っております」

（ここから先は歩きってことなのか。結構大変なんじゃない？）

私達も馬車を降りる

すると一礼して運転手さんは馬車と共に引き返していった

時折鳥のなく声が聞こえる

今は太陽が上の方にあるからまだ日は沈まない

明るい時間になればかなり楽しめる場所だろうけど、森を抜けるのはどう考えても一日では済みそうにない

「今夜は野宿ですか？」

——と、というかそれ以外ない気がする

私がロードさんに尋ねれば彼はまたも鼻で笑い転がした
一々本当に苛々するわこの人

「何のために彼女がいるのです。今日中にはこの森を抜けますよ」

「私は案内を終えたら帰るけどね」

涼しげに言うアンネ夫人

どうやってこの広い森を抜けるのでしょうか

「とりあえず、大丈夫だからついてきて御嬢さん」

微笑みながら私についてこいと促す

不安を抱えつつも私は彼女達について行った

（凄いわねこの森。純度の高い魔力で溢れている。力も量もそこま
でじゃないけど・・・とても澄み切っているわ）

でも、なぜだろうか

ところどころ魔力が粗ぶれている

本来は人間の手が全くとっていいほど加えられていないから純度が高いのだろうけど

明らかに人の跡がある

．．ま、この二人にはわからないのでしょうけど

「そろそろつきますよ」

ピタリと大きな木の前で立ち止まるアンネ夫人
とても立派な木だわ

「ここにこの森の番人が居るんですよ。きちんと話をつけて通らなければ一生この森から抜け出せなくなってしまうからね。」

ロードさんがさりげなく教えてくれた
アンネ夫人は木に触れ静かに目を閉じている

（森の番人ね）

「眠りを妨げること承知の上で貴方様に申し上げます。我等を御通し下さい」

静かに囁くようにその木に向かって話しかけるアンネ夫人
だけどさして木に変化はない

「いつもだったらすぐ承してくれるんだけどね」

困った困ったと苦笑しながら
もう一度木に触れた

（うーん・・・ソレ起こさない方が賢明な気がするよ）

多分森の番人とは精霊のことじゃないかしら
そしてその精霊はそのままの通り木の精霊

普段は穏やかなんだけど

一度何かが起こると収まるまで酷く面倒な精霊

アンネ夫人が話しかけた瞬間

一瞬この木から溢れる魔力が揺れた

精霊は純粹だ

だから感情の変化もすべて外に出てしまう

——さて、どうするのかね

普段とは違う反応しか見せないその木に対してアンネ夫人は不思議
そうに何度も話しかけていた

ロードさんは異変に気が付いた様子
ただ何も起こらないから見ているだけ・・・という姿勢

いつの間にか噤っていた鳥の声が聞こえなくなっていた

ディーヴァの怒号その1（後書き）

はい、中途半端

そして森の謎！！

一応2と3で終わらせます

ディーヴァの怒号その2（前書き）

活動報告にも書きましたが

お気に入り件数が1000件突破しました

本当に皆様に感謝感謝の毎日でございます

ディーヴァの怒号その2

「アンネ夫人、少々様子がおかしいですよ」

流石帝国の宰相ね

いち早く異変に気が付き口を出す

アンネ夫人も可笑しいと思ってか木からそつと手を離す

「普段ならば了承を得られるのですが・・・変ねえ」

森も、まだ明るいというのに静か

さっきまでは鳥が鳴いていて時折動物の駆ける音が聞こえていたのに

（たぶん、精霊の魔力を感じ取って避難してるのかもね）

「では今度は私が試してみましようか」

ここでもさかのロードさんが名乗りを上げた
下がっていて私とアンネ夫人を木から数歩遠ざける

私の立場・・・ないなー
仮にも騎士である私が今のところこれといった仕事も活躍もなし

私がそんなことを考えているうちにロードさんはさっさと木の前に
立ちアンネ夫人と同じように木に触れた

その途端

我に触れるな人間風情が！！

ミシミシと森に根を張る木が地面から浮き上がり
その大きな木を守るように絡み付いた

大きな音を轟かせながら

葉が刃となって私達を襲い始める

「エンペリオ・ヴァ・ネーラ」

ロードさんによる咄嗟の結界により

私と近くにいたアンネ夫人共に刃の餌食になることは無かった

「二人ともこちらへ来てください」

冷静にことを把握しようとロードさんはただじつと周りを見ている

私達は言われた通りロードさんの元へ歩み寄った

バシバシと結界を根や葉で攻撃してくる木々
何をそんなに怒らせたのかしら・・・

「これでは本当に野宿になってしまいますね」

冗談交じりだけど苦悩に満ちた表情

アンネ夫人に至っては真っ青になって今にも気を失いそう

「原因はあの大きな木にあるのでは？」

止めたいのならばあの木にもう一度接触をするしか術はないねえ・

・

私のその一言に頷くロードさん

それ以外、今こういった状況に陥った理由がないと判断したからなんだろうけど

再び木の前に立つ

根と葉の攻撃がさつきよりさらに強くなった

でも、流石というべきか

そんなことをされてもなかなかこの結界壊れない

それどころかヒビひとつ入らないなんてね

もう一度木に触れようと試みたロードさん

しかし今度は触れる前に同じような結界で弾かれてしまった

二度も我に触れられると思うてか人間風情が！

（これはこれは．．面倒なことになりそうだ）

結界の外で攻撃を続ける木々

荒ぶる魔力が勿体ないわね

そう思って私はポケットに入っているチノを一撫

——この魔力を吸って大きくなりなさい

純度の高い魔力は貴方をきつと強くする

私の意思に応えるかのように脈打つチノ
花開くのも時間の問題ね、これは．．

「精霊がお怒りだわ」

アンネ夫人が呟くように言った
お怒りねー、まあお怒りのご様子だわね

と、思ったらアンネ夫人もその木に向かっていった

結界があるとはいえ無謀じゃないか？

私がここにいていいのかな．．．ま、いいよね

暫く高みの見物といこうじゃないの

「怒りを御鎮め下さい！！このままでは貴方様の愛する森が壊れて
しまう！！」

アンネ夫人は請うように木に話しかけた
純粹な人間ね

量も質も全くと言っていいほどないけど
純度が高い

うまくこの森と同調しているのね

—— お前は・・・そうか先程我を起こそうとしたのはお前か。

アンネ夫人が木に触れた途端
木が急に大人しくなった

同じように他の木が動きを緩める
攻撃を繰り返していた木も同じように静かになった

「気を御鎮め下さい」

目を閉じ心から伝えようとするアンネ夫人
それを見守る私とロードさん

森に足を踏み入れた輩がいると・・・我が好かぬ臭いを身に纏う
輩が来たと思うたのだが・・・

スツと次の瞬間

木の目の前に茶髪の長い髪と茶色の瞳を持った女が現れた

（木の精霊、珍しいねーフウ君と同じくらいの年月を生きている精霊ね）

「木の精霊ですか」

ボソリとロードさんが声を漏らす

その声に反応して女がロードさんのほうを向いた

（こりゃ、ロードさん危ないわ）

貴様が

向いた、のは語弊があるわね
正しくは睨んだ

それも凄く憎しみを込めた目で・・・

「アルバノン・グラージア」

身の危険を感じたのかロードさんは高度な結界を張る
講堂に張られていた結界と同じね

呪文はアルバノン・グラージア
解除はアルバノン・ファイジア

我の声に応えよ
草木の緑よ

大地の魔女の恩恵を受けし精霊よ

渦を巻け
我の声を聞け

命を宿す数多の生よ
今このとき

命を掻き消す力を我に――

「下がっていなさい二人とも!!」

ロードさんが大声で叫んだ

アンネ夫人がロードさんの普段は見ない恐ろしい表情を見て数歩後ずさる

（うほー・・・この精霊”唄”で相手を殺すんだね。唄というよりか声んだろうけど、どんだんこの精霊が口遊くちずさむ度に魔力が集まっている・・・流石に危ないね）

「ルゲイン・ドーラ・ヴァリー・ヨゼイン」

ロードさんもさらに高度な結界を張るなんてやるじゃないでも、怒りに満ちた精霊の魔力は周囲にある魔力全て巻き込んで繰り出すものだからね

（死ぬか・・・生かすか）

我、力を求めん！！

木の精霊の唄が完成し

次の瞬間、辺りがさつきより一層明るくなる

そして・・・

爆発音のようなものが森を駆け巡った

ディーヴァの怒号その2（後書き）

はい、今回も中途半端

明日締めます！

ここまで読んでくださってありがとうございます

ディーヴァの怒号その3・SIDEロード・（前書き）

．．．たぶん4まで纏れそうな勢いです。

この回にロードさん視点も盛り込みたい月詠です

とりあえずどうぞ

ディーヴァの怒号その3・SIDEロード・

「お前は生きたいか」

耳に入ってくる心地の良い音

声そのものが音楽のように軽やかに奏でられる

一瞬の刹那

光り輝く世界に、銀のそれはそれは美しい女を見た

何か様子がおかしいと感じたのはこの森に入ってから数分のこと
妙な禍々しさがあつた

（以前来たときはもう少し・・・こう、賑やかだったんですがね）

辺りを見ても何も変わらない

至って普通の森なのだが、どうもしっくりこない

いつも通りアンネ夫人はあの儀式のようなものをする

そこまではよかった．．が

（この状況は少しばかり危ないですね）

冷静に判断している場合ではないとわかっていても
どこか心は静かだった

それは普段から”死”に対して覚悟を決めていたからなのか．．

視線の先には今にも私を殺そうとしている木の精霊
一見可愛らしい容姿にも関わらず恐ろしく攻撃的です

結界で防いで入るものの

彼女から流れ込んでくる負の感情に時折呑み込まれそうになる

精霊は所詮人には適わない存在だとばかり思っていました、甘く見るものでもありませんね

精霊は人に仕えて初めて力を出せるもの
そんな先入観が未だに私の中に残っていた

野生の精霊

精霊王が自ら作り出した精霊ではなく、大地に根付く数多の生物から意思を持って生まれたのが精霊

精霊王が作り出した精霊は

極僅かでほかの精霊より圧倒的に力が強い

それに比べて野生の精霊は

普段は特に何をするわけでもないが、人間が介入し主従関係を結ぶことで人間の魔力を精霊に与え強くし仕えさせることができる

（この木の精霊は野生なはずなんですがね）

精霊王が作り出した精霊はこちらの知る限り5人

火、焰を扱い日輪に輝く炎の精

水、電水を扱い潤いを齎す水の精

地、大地を包み命を生み出す土の精

雷、王の威厳と雷を表す雷の精

陰、人の世に憚る影と因縁を纏う闇の精

およそ300年前までは

この5人と精霊王しかこの世界には存在していなかったと文献に載っていた

それが定かであるのか、私自身300年も前のことなど知りもしないのでわかりませんが・・・

そんな前置きなどどうでもいいのに
この状況だとそんなことしか頭に浮かばない

——いや、なんとなくこうなる予想もしていた
彼女が言う嫌な臭いとは十中八九私のことでしょう

思い当たる節が少々ありますから

ただここまで敏感だとは私も思っていませんでした
失態ですね

ちらりと余裕がないにもかかわらず私は気になってアンネ夫人と少し離れた場所にいる騎士を見る

アンネ夫人はこのようなことが初めての様子で
どうすればいいのか顔を青ざめながら周囲を見ている

私の護衛は．．．
本当に変わっていますよ貴女という女性は

（こんな状況にも関わらずこの件に興味がないといった表情だ）

私のことを守るわけでも

助けるわけでもないようですね彼女は・・・

ま、いまの現状を見て助けに来ようなど命を捨てるような愚か者ではない方が、今後陛下の傍で騎士を務めるものとして陛下の邪魔はしないのだらうと思いますが

陛下は強い

助けようとして陛下に切り捨てられた騎士は大勢見てきている

逃げることに弱さではないと知っている

だからこの状況で貴女が出しゃばらないことは賢明な判断でしょう
ミアさん

「ま、私を助ける訳もないのでしょうか」

ボソツと呟く

小馬鹿にしたようにあしらってきたのですからね

目の前にいる女はどうにも綺麗な声で歌うように紡いでいる

あちらの呪文が完成するまでこちらも最大限魔力を引き出す
自分のキャパシティーをオーバーしそうなことは重々承知の上でだ

だがこちらとしてもまだ死ねない
死ぬ覚悟と死ぬ時期を誤ってはいけないのだ

（この精霊には生きていてもらわなければいけないから迂闊には殺
せない。本当に厄介ですね、このままでは私が死んでしまいますよ）

特殊な体質ですから、簡単には死なないのですがね

我、力を求めん！！

完成した呪文が私の最大限引出し作り出した結界に光の矢となって
降り注いでくる

厳密に言えば粒子の塊でしょうけど
これはまずい

作り出した結界にひびが入ったのかわかった

次々と降り注いでくる矢
防ぎきれるものではない

（どうする）

選択肢がもうない
あと数秒、今この瞬間にも壊れてしまいそうなのこの結界

（最悪ですね）

パリンと一つ音がした
結界が壊れたのだ

体に無数の光の矢が突き刺さる

最初に刺さったのは腕

焼けつくような痛みが全身を駆け巡ったと思ったら次は体中に刺さり始めた

どこに刺さっているのかもどこが痛いのかももうわからない

意識が別などこかへ行こうとした・・・

その時

「その辺にしておけガルベロの眷属よ」

混沌とする意識の中
視界に入っただのは鈍く光る・・・
”銀”

流れるような艶やかな銀
思わず手を伸ばした

しかし、その銀に手は届くことなく数倍もの重さを増して再び戻ってきた
血塗れた己の手

—— 触れなくてよかったのかもしれない
そんなことを思った

．．あ、そんなっ

木の精霊だろうか
さっきまでの怒号はどこへいったのか

頂垂れるような
それでいて驚きと喜びが混ざった声が徐々に聞こえなくなっていく
耳から入ってきた

「ガルベロの眷属よ、これ以上の行為は我に対する侮辱か？」

圧倒する声だ
陛下と同じように、なにものもひれ伏させる声

威厳
自信

そして力．．．

い、いえ滅相もございません！．．．違うのです違うのです！人間が、人間が私の住む領域を荒らすから．．．血の臭いを纏った人間どもが、ガルベロ様が御創りになられたこの森を穢そうとしたのです！！だから今回のそやつも同じだと思つて．．．

ガルベロがこの森を創ったのか

ガルベロは精霊王が作り出した地の精霊

彼女はガルベロの眷属だったのか

それにしてもだからだったのですね

最初を感じた違和感は人間が荒らしたからだったのですか．．．

確かに私も血の臭いを纏っている

あの時、あんなに憎しみを込めた目で見られたのはそのせいか

「お前がこの森を守ろうとしたことも理解できぬわけではない．．．が、お前の所業によりここに住みつく我の生み出した子らが息絶

えたのも事実だ。ガルベロには我から話をつけておこうぞ。お前は
お前の成すべきことし、静かにしていればいい」

それは命令だと思った

その声に気圧されるかのように木の精霊は無言で頷いていたように
見えた

次の瞬間にはスツと木の精霊はいなくなった

静かになった途端
痛みだす体

目を開けるのも面倒ですね

（ただ、もう一度目に入れておきたいものです）

やっと見つけたのだから

「お前は生きたいか」

目が合う

300年生きている、死ぬことのない魔女よ

貴女がちっばけな存在である私に話しかけている
これ以上の幸せはあの日以来だ

貴女の声に私は頷いた
もう声は出ないのだから

「難儀なことよ、そのまま死に絶えれば来世は幸せだろうに」

——苦痛を選ぶとは人間らしい
そうつけたし微笑んだ気がした

そこで私の意識は反転する
目の前が真っ暗になる寸前

視界に入った最後の笑顔を私はどこかで見た気がすると思いながら
・

ディーヴァの怒号その3・SIDEロード・（後書き）

すいません

4まで長引いちゃいましたね

新しいキャラクター沢山出てきたので

ここいらで人物紹介いれようかな・・

ここまで読んでくださってありがとうございます

ディーヴァの怒号その4（前書き）

体調不良により更新滞っております
申し訳ありません

それでは、遅れながら・・・どうぞ

ディーヴァの怒号その4

（死ぬか生かすか）

目の前の光景と

今から起こるであろう結末を目の端で捕えながらそんなことを思う

木の精霊が言葉を紡ぎ終えた瞬間
ロードさんも高度な呪文を唱えていたのは知っていた

——なぜ、この精霊を殺さないのか

命が狙われている状態であれば生きているものは本能的に殺そうと
してくる何かを殺す

それが生きていくうえでは大切ではないのだろうか

でもロードさんはあえて攻撃するのではなく
あくまでも守備を貫き通した

きつとロードさんも感じ取ったはず
この精霊は強いのだと

ならば全力で殺しにかかればいいものを・・・

爆発と共に風が舞い上がり視界をふさぐ
きつとこの先でロードさんと木の精霊が戦っている

後ろを見ればアンネ夫人は恐怖からなのか意識を失っていた
この状況なら、しょうがないのかもしれないけれど

「本当に、人間の心理は難しいわね」

そう一言つぶやいて私は二人のいるところまで足を進めた

目の前には今にも死にそうなロードさん
僅かに結界で防いで入るけど全身血まみれ

対する精霊は怒りに身を任せ力を暴走させているみたいだし

どちらにしてもこのままだと消える

（でも、陛下に守れって言われたしなー）

そんな時
ふと閃き静かに目を閉じた

『聞こえているか？ガルベロよ』

途端、空気が割れる様にどこからともなく新緑の香りを乗せた風が
一陣吹き荒れた

漸く動き出したのですか・・・

少ししゃがれた、低い声が驚いたような声音で私の頭に響いた
それはまさしくガルベロの声

『漸くとは言ってくれる。私自身いろいろと忙しかったのよ・・・』

実際は特に何をするでもなかったけどね

失礼致した時の魔女よ。姿が見えぬことを我らが主は心配してお
りましたゆえ

時の魔女・・・だなんて久しい呼び方をしてくれる
もう何百年とその呼び方をされていなかったことに今更気づく

水の魔女であるリーナ姉さん
大地の魔女であるアネツサ姉さん

この二人が私に時の魔女とつけてくれた

『精霊王か．．．息災でなによりのことよ』

魔女と同等の立場である精霊王
彼もまた、一定の条件を超えない限り死ぬことは無い

その御心遣い主に伝えておきます

．．．と、こんなことを話すためにガルベロにわざわざ念話をしたわけじゃないんだった．．．

『時にガルベロ。この森はお前が作り出したのか？』

左様に御座います、この森は私の住まう森の一つ

そう言つて静かに声を發した
目と鼻の先では未だ二人が攻防を繰り返している

時間はさしてない
本題を切り出すべく私は目を伏せた

『荒れているな。純度も高く澄んでいるように見えても、ところどころ淀んでいる』

私のその一言に動揺するかのように森が揺れた
ただし、気づいているのもいないけれど・・・

お恥ずかしいかぎりにございます。人間にこの森の秩序を少々乱されたので

『あの精霊はお前の眷属だろう。アレが人間に対して抱いている感情はその人間たちが秩序を乱したから故なのか？』

問い詰める様に

私は少し声を張り上げていった

ディーヴァの怒号その4（後書き）

一度、書いたのに消してしまつて本気でショックでした

話があやふやになつてしまったのでこの回はあまり面白くなかつたかも・・・

とりあえず5までで終わらせます

読んでくださつてありがとうございます

ディーヴァの怒号その5（前書き）

本当に久々の更新

大変お待たせいたしました

どうぞ

ディーヴァの怒号その5

暫しの沈黙の後、ガルベロは是と一言頷いた

——人間が精霊の住まう森を穢すなど甚だしいものよ．．．
人間とて精霊が居なければこの世界では生きてはいけないのに、なぜ知って尚そのような行為をし続けるのか本当にわからないわ

ため息をつき視線を今も戦っている二人に向けた

するとガルベロが少し声を張って言った

時の魔女よ．．．この森はあと数百年もすれば消え失せてしまいます。秩序は我々にも戻すことは出来ない、この森の末路は荒れるのみ。人間の所業に御座いますぞ！何故人を守るのです！？
なにゆえ

察しのいい精霊だ

私がガルベロに念話をしたのは、いま戦っている二人を止めさせるためのものだ。この会話で感じ取ったに違いない

（守る．．．か）

既にする存在などありはしない
そう考えて私はふつと自嘲気味に笑った

『ガルベロ、手を取り合え．．．人の業を視よ、人の命を視よ。そう精霊王は言っただけだ』

大きな樹を優しく捕える
すると何処からともなくスツと人影が現れた

それは紛れもなく、精霊王が生み出した大地の精霊ガルベロ

未だに怒気の含んだ表情は消えてはいないものの以前とさして変わらない優しい風貌をしていた

『漸く姿を現したか。久しいな』

本来はこの姿を人間には曝してはいけない身・・・しかし今は気づかれないでしょうから。

そう言って私の元に近づいてきた

『なかなか大変な身だな』

時の魔女には及びませんよ

ガルベロはそう言っただ笑った
なんとも癒される笑顔だ・・・

『申し訳ないな。だがお前の力が必要だった』

ちらりと戦っている二人を見る
こんなに話していて大丈夫かと言われれば大丈夫なんだよね

ここは云わば亜空間
そこに存在してもその場所と時間の流れは一定ではなく、さらに言うならば誰から見られない完全に異質の空間

私の言葉にガルベロは硬い表情をする
わかつていたことだけれどね

もう一度問わせて頂きたい。何故時の魔女は人間を守るのです

『守るのではない。あくまで流れを見ているだけだ．．．考えてみる。人間はこの世界に生かされてういるのだぞ？なのに人間は自分たちでこの世界を維持していると思っっている。笑えるじゃないか．．．見えない神に願ひ、強大な力に恐れる。人間は守る価値などない』

そう、守る価値などありはしないのよ
300年経つてなお変わらない私の考え

ならばなぜ

ガルベロの声にそうではないと首を振った

『だが、時折見せる人間の行いに目を見張るものがあるのも事実。私達は退屈なんだよ．．．先人の記憶を受け継ぎ今を生きている。ただふと、思うことがある。本当に今生きているのか？と。先人の記憶と今の記憶が混ざるとどうも生死の境が分からなくなる．．．

そんな時人間はその行いで今私という存在が生きていることを証明してくれるんだ。難しい話かもしれない、精霊には記憶を受け継ぐなどという行為はなされないから』

高位の精霊に人間は自分たちの土地を荒らす生き物でしかない
だが下位の精霊は人間と共存することによって力を引き出すことが
出来る

そして私達長く生きる存在の楽しみでもある

守るのではない

あくまで流れを見ているだけ・・・

『ほんのちよつとの好奇心と慈悲で人間を助けたり殺したりするの
さ』

時の魔女よ・・・貴方様の御心を察することは到底出来得るもの
ではありません、我々精霊には降りかかることのないものですから。
しかし、納得致した部分もございます。些細な力では御座いますが
お力になれば幸いです

私の言葉にガルベロは何を言うわけでもなく納得してくれた

我らが王も時の魔女と同じ心中に御座いましょう．．．だから私に業と命を視よと仰ったに違いありません。

賢い精霊は嫌いじゃない

私はあるがとうの意味を込めて微笑み返した

『我が話をつけよう。あの精霊をどうにかしてはくれぬか？』

時間がなかった

私が彼を助けるという行為にきつとあの精霊は悪意がないとはいえず
邪魔をしてくる

だからこそガルベロという彼女より存在が上の者がほしかった

時の魔女よ、お言葉を賜りました

そう言ってガルベロは再び姿を消した
私も動くと思いますか．．．

ゆつくりと倒れるロードさんの体を視界にとらえ
私は彼と精霊の間に割って入るような形で立った

血まみれで倒れるロードさんを見て
単純に馬鹿だと思った

やられる前に殺ればいいのに・・・

『その辺にしておけガルベロの眷属よ』

睨みつけるように精霊を見る

精霊は私という存在に圧倒されるかのように表情を一気に歪ませた

一言二言話せば洪々といったように消えた

きつとガルベロが何かしてくれたのだろうから・・・

さて、問題は彼

今にも目を閉じてしまいそうなロードさん

この状況、普通なら死んでしまうんだけどねえ・・・

まあいいか

『お前は生きたいか』

思えばそんなことを口走っていた
生きたいもくそもない

私は彼が死にたいと言っても助けるのだけどね、陛下との約束だから

だけど、次の瞬間

私はそんな約束とか云々を忘れてしまう

（この状況で・・・笑うか？）

声が出ないのだろう

ロードさんは私の眼を見て微笑みながら頷いた

普段は見せない静かな微笑み

生粋の魔女信者って訳ね

『難儀なことよ、そのまま死に絶えれば来世は幸せだろうに』

だが、そんな人間だから面白い
無駄に足掻くんだ・・・

ロードさんの瞼が完全に閉まる

『苦痛を選ぶとは人間らしい』

そう言って私は少し笑った

．．．と、時間がないんだった
まだ完全に息を止めたわけではない

私は倒れるロードさんの横に座り、掌をそつとロードさんの体に翳した

『汝、その戒めを払い
我、その救いとなる

汝、その鮮血を払い
我、その支えとなる

汝の欠片を我の掌に．．．
我の声に応え我に仕えよ

ヴァル・シータス・ア・ルレイス』

私の呪文が紡ぎ終えた瞬間
掌から光が溢れロードさんの全身を包んだ

その光りは傷ついたロードさんの体を癒していく

さっきまで轟音が鳴り響いた森から
一筋の光が舞い降りた・・・

ディーヴァの怒号その5（後書き）

はい、長くなりました

でもとりあえず5で終了させたかったです
↑

ここまで読んでくださってありがとうございます

登場人物（前書き）

こんなところで入れているのかと思いつつUP

いや、こんな中途半端なところで入れるべきではないのですが・

とりあえずネタバレにならない程度にまとめました

どうぞ

登場人物

ミアン・レティシエフォード

世界を創造する柱の一人
通称中央の魔女

時の魔女とも呼ばれ
その存在を知らない者はない
しかし、300年前の事件を機に人の世に姿を現すことは無くなった

長い銀髪に蒼銀

力の属性が無くオールラウンドで魔力を操れる
しかし今は力を封じられ自然の力に頼る
他の4人の魔女以外興味がなく、関心もない

300年前アルファジュールの帝王によって幽閉
過去に多くの難有り

アレク・アルファジュール

中央の国アルファジュール帝国の王
賢帝と詠われる
通称帝王

5つの世界の頂点と言っても過言ではないほど国を繁栄させている

金髪に蒼眼

丹精な顔立ちをしている

力は未だ無尽蔵

属性も特にないが闇系統を得意とする

魔女という存在を探し続ける

ミア

陛下の側近の一人

ミアンの人間の姿バージョン

騎士階級は4

通称ミア

蜂蜜色の髪に茶色の眼

可愛らしい風貌をしている

自然の力を借りている

なので炎や闇などの力は仕えない

属性は癒しと風

ロード・ランウェイ

アルファジュール帝国の宰相
稀に見る才の持ち主と詠われる

通称ランウェイ

漆黒の髪に漆黒の眼
光りにあたって黒い

元は北の国生まれ
経緯を経て今は中央の国を支えている

魔力は上質
得意は癒しと水
しかしオールラウンドで力を使える

シド・レーニン

陛下の側近の一人
騎士団長

騎士階級は最高ランクの5
普段は威厳を表す黒のローブを羽織っている
通称団長

漆黒の髪に金の眼

他国からは鷹と言われ恐れられている

陛下一筋

属性は闇と風

フレイン

風の精霊

ミアンによって生まれた精霊第一号

通称フウ君

緑色の髪に琥珀色の眼

見た目20代前後

ミアンをととても大切にしている

カザエル・ダンジュール

東の国の王

他国からは病弱の王として罵られている

実際は病氣と称して他国へ自ら赴いている

茶髪に水色の眼

若干幼いイメージを持たせる

女性が嫌い

過去にあつた事件により・・・

リリー

帝国の副女官

ミアの女官としてミアに仕える

ミアの正体を知る人物

通称リリー

茶金の髪にアメジストの眼

長い髪を三つ編みで一本に束ねている

既婚者

属性は癒しと大地

力はかなり強い

まだまだ出てきますが

とりあえずここまでで・・・

空中散歩その1

『さて、この後はどうしようか』

一人虚しく私の声が森に響いた

ロードさんは木傷を癒したばかりなので起きる気配はない

アンネ夫人．．．も未だ意識を失ったまま

（これでは今日中に森を抜けるはずが本当に野宿になってしまっわ）

とりあえずそれは避けたい話

あの冗談を本気にするつもりはないわ

ロードさんを起こすのは賢明じゃない

ならば、アンネ夫人しかない．．．か

彼女はこの森を知り尽くしている様子だったし、彼女が起きればと
りあえずここから出ることもできるでしょう

自然の力を借りればすぐにこの森から出ることもできる

．．．けど、途中で起きられてしまえば最後

あの傷で死ななかつたロードさん
きつと回復するのも時間の問題だろうからね

危ないことはしない
これ、私の定義ね

ガサガサと草木を分け入ってロードさんより数百メートル離れた場
所で倒れているアンネ夫人の元まで歩いて近づく

『怪我はしていないみたいね』

近づいて顔や全身を見るけれど、特に異常もない
無関係な人間が巻き込まれなくてよかったよかった

しゃがんでアンネ夫人に触れようとした瞬間

時の魔女よ

背後からガルベロが現れた
自然と触れようとしていた手が止まる

（まだ何かあるのかしら、精霊王が何か言ったとか？）

早く北へ行きたいのに
そう思いつつガルベロが居るであろう後ろを向いた

そんなに顔を歪ませないでください。お美しい顔なのですから・・・

口がうまい精霊なこと

呆れにも似た感情が湧きあがるのを抑える

『何用だガルベロ。まさかそんな美辞麗句を言うために戻ってきたのではあるまい？』

そう言えばガルベロは

困った表情をしながら笑った

美辞麗句などと．．．本心に御座います。

（え、本当にそれを言うただけにここに来たのこの精霊）

と、疑いの眼差しを向ければ

急にシャキツとして私を見つめ返してきた

失礼。時の魔女よ、今何をなされようとしていたのです？

なにつて．．．

『この女性を起こそうとしたただだが』

何が言いたいのだろうか
そう思いながらガルベロを見つめっていると、やっぱり．．．と少し
安堵した表情をされた

なんなんだ

時の魔女よ。その状態で起こすことは危険です

笑いながら言うものだから、危険なのか危険ではないのか掴めない

『どういうことだ、はっきりしろ』

少しイラついた声音で問うた
そんな私を見て苦笑すると、貴女様が危険なのです．．と付け足された

今の御姿はあまりに危険です。

今の姿？

なんのことだと、自分の体を見る

．．．おおっ、そういうことが

『いや、助かった。すっかり忘れていたよ』

いえ．．我々も貴方様には思うがままに生きていて頂きたい。
変に騒がれたくはないでしょうから。これしきの事で私に礼など、
勿体なき事に御座います

どこまでも私を敬ってくれるのね
そう思いつつ、普段の．．人間のミアとしての姿に戻った

うっかりしていて、本来の姿から人間の姿に変えるのをすっかり忘れていたみたい

この状態でアンネ夫人を起こしたら
もう一度気絶されるか面倒なことになる

それを未然に防いでくれたガルベロに感謝だわ

それでは、私はこれにて失礼致します。道中、くれぐれもお気を
付け下さいませ

『ああ、ありがとう』

その言葉と共に
スウツとガルベロは消えていった

この森も、考えないといけないな
秩序は一度崩れたら戻りはしない

私達魔女が精霊王かなにかしら強大な力を持つ存在がどうかしな
ければ．．．．

（人間に乱されるなどあつてはならないのだけれどね）

そう思いつつ、今度こそアンネ夫人を起こそうと

ゆっくりと体に触れた．．．

空中散歩その1（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます

空中散歩その2（前書き）

二日も空いてしまいました。

毎日の更新が難しくなってきたので、曜日更新に変えようか考え中です。

とりあえず、どうぞ！

空中散歩その2

私が体を揺るとんん、と少し苦しそうな声を上げながら身動きしたアンネ夫人

『アンネ夫人・・・アンネ夫人』

もう一度さっきより強く揺るとアンネ夫人の瞼が震えた

そうしてゆっくりと瞼を持ち上げ目が開いた

「ええつと」

困ったように笑う

でも、状況を全く把握していないといった表情で私を困惑した顔つきで見えてきた

(ここはロードさんを立てるとしますか)

近くで死んだように眠るロードさん
精霊に殺されそうになったなんて言ったら仮にもこの国で実質2番
目の地位と力を持つロードさんと、その主である陛下の面子丸つぶ
れになるだろうし……

『気分はいかがですか？』

背中を支えながらゆっくりと起き上らせる

いくら下が石ではなく土であっても女性なのだし汚れたくはないはず

ありがとう、と言いながら起き上る
すると急にアンネ夫人が悲鳴を上げた

「あ．．ああ！！御嬢さん、ランウェイ様はっ！ランウェイ様はご
無事ですか！？」

アンネ夫人は私越して寝ていたロードさんを視界にとらえた
縋るように私の腕を掴むアンネ夫人の力は強かった

（どういう関係なんでしょうねこれは）

ただの案内人が、いくら親しいとはいえここまで心配するか普通

人間の豊かな感情は私達には到底解り得ないことだから、もしかしたら
これが普通なのかもしれないけれど・・・

『アンネ夫人、落ち着いてください。ランウェイ様は生きておられます』

そっと私の腕を強くつかんでいるアンネ夫人の手を外す

私の言葉に少なからず安心したのか
ふっと息を漏らした

「御嬢さんは大丈夫だったのかい？」

『はい、特に怪我ありません。ランウェイ様が我々を守って下さったのです』

（実際はロードさん、瀕死でしたけど）

と、心の中で呟きアンネ夫人に微笑む
ありがたいことだ．．．と、独り言のように呟くアンネ夫人

それを横目で見ながら今後のことを考える

とりあえずここから出なければ．．．

どうやってこの大きな森を抜けられるのか教えてもらいましょうか

『アンネ夫人、早急にこの森を抜けましょう。』

神妙な面持ちでアンネ夫人を見れば
伝わったのか静かにうなずいてくれた

あの戦いを見ていないとはいえ

序盤の、木の精霊が怒ったところまでは見ていたのだ

聞いてはこないけれど察しているのだろうと思う
ここで変に勘ぐりいれられるより得策だわ

「御嬢さん、女の貴方に頼むのは筋違いだが．．．騎士だろう？それに私より若い。何より私の様な身分の低い人間はランウェイ様などという高貴で尊き存在に触れることはおろか話をかけることも許されない。御嬢さんの身分は分らないがランウェイ様の護衛を務めるくらいだ、相当なものなのでしょう．．．こんな態度普通なら許されないだろうが中々この態度が治らないものでね、許してください。」

（まあかなりでかい態度をすると、思っではいたけど．．．）

そう思いながらアンネ夫人に視線を戻す
高貴で尊い．．．ねえ

あの時ロードさんと会話しているときはそんなこと思っている様子は微塵も無かったように感じるけど、この人なりに頑張っていたってことなのかしら

しつこいようだけど

他に、何か理由があるのかもしれないけどね

あの切羽詰まった心配の仕方といい

疑り深いと言えばそこまでだけど少し気になる

『具体的に私は何をすればよろしいのですか？』

あえてロードさん云々の話は流し

これから私はどう動けばいいのかを聞く

「あの大きな樹のところまでランウェイ様を連れて行ってくれない

かい？」

彼を運べということね
わかった、と頷く

『でも、あの樹で何を？もう一度精霊に通すようにと言いに行くの
ですか？』

（まあ今あの樹に精霊はいないけれど）

一時的にガルベロがどこかへ連れて行った様子
森の力が少し弱くなったからね

まあ私が居るうちはいくら敵が来ようと秩序を乱させたりはしない
んだけどね

「いいえ、あの樹に精霊は今いないみたいだね。それならそれでい
いんだ」

そう言って樹を見つめるアンネ夫人
横顔を眺めながら思う

——魔力は弱くてもこの森の適応者ってところかしら
ほとんど魔力が無いのに精霊の存在を確認できる

意思の疎通ができるのもアンネ夫人がこの森に好かれている証拠

『それでいいとは？』

でも、仕組みが理解できない私は
とりあえずロードさんを魔法で転移させる準備をしながら問うた

「あの樹が重要なんだ。あの先に道がある。進むためには必然的に
精霊の許可が必要だったんだが．．．今はいい様子だし勝手に通
らせてもらえばいいさ」

あの樹の先．．．奥ってこと？
じっと見つめればなんと樹の中心が少し歪んでいた

(歪み？)

時空の歪みのようなものがあつた
さつきは精霊が邪魔でわからなかったんだ

うまい具合に魔力が消されている
私も見逃していたわ

きつと精霊王の力が施されているのね
だから気が付かなかったに違いない

「とりあえず時間が惜しいだろう？ 乗りながら説明するよ」

そう言つてアンネ夫人は笑つた
乗りながら．．．とはどういう意味だろうか？

空中散歩その2（後書き）

中途半端ですいません

今回もここまで読んでくださってありがとうございます

空中散歩その3（前書き）

あちらの更新と

こちらの更新・・・

二つの作品を書くのは大概大変なものです（- - ;）

空中散歩その3

ロードさんの傷を気配りながらそつと樹の前に置く

アンネ夫人は樹に向かって何やら唱えている

私の知らないところを考えると、呪文の類ではない

まあ魔力のないアンネ夫人が呪文を唱えたところでなんともならないんだけどね

傍で眠っているロードさんを見る

起きる気配はないものの回復はしてきている

それもそうだ

私が直々に治癒の魔法を施したのだから

と、次の瞬間

凄まじい魔力を感じた

（肌がビリビリするわ）

久々の強い魔力

三大要素の揃った位の高い魔力だ

感じ取った方向を見ればそこは先程から何やら唱えていたアンネ夫人が居た

この魔力はアンネ夫人のものではなく
その奥にある樹から発せられているものよう・・・

（とんでもないものがよくこんな場所にあつたものだ）

高ぶる感情を押さえつけ
ゆっくりと私は立ち上がってアンネ夫人の元まで歩く

これは魔力持ちの人間なら危険ね
アンネ夫人だからできたことなのかもしれない

魔力が中流であれば終わりだ
この樹から発せられる魔力に吞まれる

下流のアンネ夫人のような存在ならば元々魔力が無いに等しいから
呑まれることもない

むしろこの魔力に当てられていつそ清々しいはず

上流ならばこの魔力を跳ね返すことは出来なくても
うまく利用する術を知っているはず

（高貴な存在がこんな場所によく居たものだわ）

「御嬢さん。危ないから下がっていて・・・気位が高い連中なんだ」

517

私が近づくのをそつと阻む

連中・・・ねえ

アンネ夫人の一言にさりげなく笑う

正体を知らないまま今までやってきたのかこの女性は

そう感心さえした

「さあ、願いますよ・・・リユヴァー」

アンネ夫人の一言と共に

その樹の奥から何かが飛び出してきた

勢いよく出てきたものだから

その風圧に私達は飛ばされそうになる

ドスンと大地を響かせてそこに足を付けた何か

リュヴァーと呼ばれたソレは私達より何倍も大きかった

キキキキューー！！

ばさりと翼を広げ鳴くリュヴァー

その声と翼によって出された風が森を揺らす

白い胴体

長い尾

鋭い歯が淫らに口からこぼれ出ている

研ぎ澄まされた刃のような爪

そしてどこまでも広い翼

「森を抜きたいんだ。手伝ってくれるね」

そつとアンネ夫人が手を1頭のリュヴァーに向かって差し出した
この場にいるのは2頭

キュ

アンネ夫人に反応して鳴いたリュヴァーの眼は赤
そしてもう一方が緑色をしていた

「さあ、北までひとつ飛びだよ!!」

私のほうを見て笑うアンネ夫人は凄く生き生きとしていた
もしかして・・・と推測を立てた

これは多分十中八九あたりだと思う
でも、今ここで聞くのも野暮ってものだろう

長い首を差し出してきた緑色の眼をしたリュヴァー
乗りやすいように配慮してくれたんだろう

(このリュヴァー、野生にしては大人しいわね)

ロードさんを乗せた後私もリュヴァーの背に乗った
首筋を一撫でしてありがとうと念じれば、伝わったのか嬉しそうに
鳴いてくれた

「飛べー!!」

アンネ夫人の掛け声とともに飛び立つ
一瞬体がぐらりと揺れたがリュヴァーも気を使って体勢を斜めにし
てくれたので落ちることは無かった

一気に上昇する
数分ほどで森が小さくなった

もぞもぞと私の後ろが動き出す
起きた様ね・・・

「つと・・・」

現状を把握するのに時間がかかったようでフラリと私の肩をロード
さんが掴んだ

まあ起きた瞬間雲の上なんて驚くよね普通

そう思いながら笑った

「お目覚めのようで・・・」

「ミアさん？」

私以外の誰だというのだ
と思ったけど口にはしないで後ろを向いた

別に手綱があるわけじゃないから私が操作しなくても大丈夫

この子はアンネ夫人をしつかり追っている

「リュヴァーに乗せられて今雲の上ですよ」

「こんなに早く目が覚めるとは・・・」

自分の手を2、3回握りしめている
死にかけてたもんねロードさん

グッと握りしめて私を見つめる
言いたいことは大体わかる

だから私は笑った

笑えばロードさんはさっきより眉間に皺を寄せて私を睨んだ

「あれを見ていましたか」

是、と言葉無く私はもう一度笑った

この会話はアンネ夫人には聞こえない

「説明してください」

視線を外すことは許さない、とでも言いたげな目
強い強い目

（こつこつ目をする人間は嫌いじゃない）

「魔女が貴方を助けました」

矛盾していると自分でも思った

私が魔女です、なんて言って置きながら今ロードさんに言ったことは客観的に見た言葉だ

私の言葉に嬉しそうな

だけど酷く歪んだ顔をしていた

「そうですか」

一言、ポツリと零す様に言った
いろいろな思いがあるのでしょうけど

（――私が飽きるまで正体を曝すつもりはないわ）

もつとも、既に何回も私が魔女だと言っているのだけれどね

再び前を向く

私の肩を掴むロードさんの手は暖かった
人間らしい感情よ

気づかれないように笑いながら視線の先にある街を見る
もうすぐ森を抜ける

数分空の散歩を楽しむと
前にいたアンネ夫人の乗ったリュヴァーが急降下を始めた
それに伴い私たちの乗っているリュヴァーも下落し始める

（さあ、魔女様に会いに行こうか）

北に存在する魔女に会うのも時間の問題

これから起こるであろう一つの波乱に私は胸を躍らせた

陛下から勅命を受け1週間と少し

私達は無事現地入りを果たした

空中散歩その3（後書き）

これで3章は終了です。

4章からは北の国編

ちなみに・・・

1週間ちよっとって話ですが

実は森に入って数日たっていたんですよね。

あの森、少し時空がずれていて時間の経過が遅いんです。

なーんて補足しておきますね

ここまで読んでくださってありがとうございます

絶望（前書き）

新章です！

プロローグ

←

華添

←

輪廻

．．．．とききましたが、一応今後の内容で重要になってくるお話です。

OPの内容全然触れてねーじゃん！と思ってても今後、今後（大切なので2度言います）いろいろと出てきます。

文才が乏しいため理解し辛いかと思いますが暖かな目で見守って下されば幸いです。

長々と失礼しました
それでは、どうぞ

絶望

帝国歴1624年

混沌とした空気が世界を包んだ
多くの人間が恐怖に戦慄いた・・・

世界で最も恐ろしい時代が訪れる一年前
既に事は動き出していた

豪華絢爛
煌びやかな室内と甲冑を着た屈強な兵士

彼らに守られるような形で堂々と玉座に座る・・・男
宝石を身に纏っているかのような服装

蓄えた髭を厭らしい手付きで撫でるその男こそ帝国の王

頭上には黄金に輝く冠を置いている

威厳

厳格

富

この国を統べる王のみが与えられる王冠

「つまらぬ」

全ては王のこの些細な一言から始まった

憂を帯びた王

その憂を晴らすものは誰か

ザワザワと辺りが騒がしくなる

王が存在する場で許可もなく口を開くことは重罪である

しかし、この王の一言には口を開かざるを得なかった

3か月前

同じように”つまらぬ”と発し臣下の一人を獣の群れに放り出しそれを終止笑顔で眺めていた

半年前は側室の一人を直属の部隊である兵士に襲わせた
その時も王は何をするでもなく笑いながら眺めていた

1年と少し前

村を一つ滅ぼした

他の村には魔物が出たと王は悲しみに満ちた表情で告げた
しかし、実際は魔物ではなく王の勅命であった

その事件を起こした兵士の一人が恐ろしくなり部隊を脱退し妻と子供と共に国を去ろうとした

それを知った王はその兵士と家族を殺した

王への反逆という全くありもしない嘘偽りを着せられ、家族共々・

・次の日門前の台の上に首だけの状態で3日放置された

それ以前も王は”つまらぬ”の一言で口で言えないような残虐的な行動を行っていた

王宮に衝撃が走ったのは6年前
魔女の護り人を王は殺した

この世界を支える柱
純潔の魔女の護り人

魔女と精霊王が実在する世界
二つの創造主が存在することで成り立っていた世界

精霊王を護る5つの精霊

魔女を護る5人の選ばれた存在

絶対不可侵

決して触れてはいけない領域のはずだった

王は貪欲過ぎた

日々の生活に飽いていたらしい

その日も、軽い口調だったそうなの……

「護り人の力が見たいぞ」

唐突にそんなことを言い出した

護り人は月に一度、王に謁見をしていた

しかしそれはあくまで王と同等の立場での謁見
だが王は己が上だと言い張って護り人を卑下していた

この世界の理

我儘な王に付き合うよりか秩序に倣い平穩に暮らしたいと思った兵士や側近、臣下は誰一人として”自分が連れてくる”とは言わなかった

それに対し、王は残酷な一言をそれらに言い放った

——なれば一人ずつ胴と頭を切り離すでしょう・・・

「・・・僭越ながら・・・宜しいでしょうか」

自分が死ぬことは誰しもが望まない

王の一言にいち早く反応した若い臣下の一人が率先して口を開いた

恐怖からなのか唇が震えていて声も細く力なかった

王はその臣下を見て笑い、発言を許す

臣下は自分が連れてくる。自分は王に絶対的に忠誠を誓っていると
言った

若い臣下はこの世界では希少な魔力を使える人間だった
皆からは魔術師と呼ばれ若干27にしてその位に就き多くの功績も

残している

しかし、純粋な心の持ち主であつた
優しい人間だつたのだ・・・

若い臣下は護り人を探した
そして見つけた

生まれて数年の魔女の護り人
若い臣下はその護り人を訪ねた

護り人は自分が王の臣下であるとなると顔を顰め軽蔑するような
目を向けてきた

護り人は普通の人間にはない力を持っている
きっと今の王について何かしらの不信感を抱いていたのだろう

思えば6年も前から王は可笑しかったのだ
以前はとても優しくかった王が、いつからか・・・

何度か話したが護り人は王には会わないと言つたので諦め城へ帰り
王へ報告した

「申し訳ございません。護り人は魔女からは離れてはいけない、月

に一度の謁見にのみ参じるのだと言い張りまして――」

そこでその若い臣下の声が途切れた
ひっ！という声にならない悲鳴と、辺り一面に飛び散った血

王の手には赤く染まつた鈍く光る剣ツルギ
周囲は恐怖に支配された

「なんとも興醒めだ」

そう言つて王はその剣を一振りし鞘に納める
静寂に包まれた城

誰一人として声が発せない状況の中、王だけが笑っていた・・・

それ以来、王が言う”つまらぬ”に対して過剰反応するようになった兵士、側室、臣下
ざわめくのは仕方のないことだった

誰もが皆命が惜しかった

だが、誰かが進言しない限りここにいる誰かが殺されてしまう

自分かもしれない恐怖

苛立ちと不安

ざわめく一室からどこからともなく一人の女性が現れた
紅の髪に焰と銀を合わせた瞳を持つ艶やかな女性が．．．

一人の臣下がその存在に気づき傳く
すると周囲も気が付いたのか一斉に傳いた

滅多に姿を現さない．．．純潔の魔女
南に存在する魔女がどこからともなく王の前に現れた

「お主．．．南のコルデロ・ルゼラか」

王は貧欲で傲慢で．．．自分の価値を高く評価していた
だから創造主である純潔の魔女もぞんざいに扱った

その場にいる王以外の人間が冷や汗をかく
絶対的存在は王だ

しかし不可侵領域の魔女は別物
魔女は普段自分達には到底手の届かない存在だから

南の魔女はそんな王の態度を見て笑った

「どの口が物を言つておる馬鹿者が」

静かに怒りをあらわにする魔女

魔女の姿勢が気に食わなかった王もその一言に怒りを表した

「人間の皮を被った化け物が私に何たる侮辱を・・・」

王の一言に皆、死を覚悟した

誰がこんな王にしたのだ

ここにいる皆が確信した、この国の存亡の危機

魔女も例外ではなく

今度は周囲に濃密な魔力を漂わせる

近くにあった今はこと切れている若き臣下の屍が魔女の魔力によって砂となり消えていった

「死にたいか人間」

地を這う声

それは王の後ろから聞こえてきた

王の首筋には先程王が鞘に納めたはずの長剣
細く白い腕なのにもかかわらずその剣を握り殺意を込めて睨む・・・
東の魔女

竜王の鱗から作られたとされている剣は元は王の物ではなく東の魔女
ダルマスタ・リヴァナウロ

「殺してしまえリーナ」

東の魔女に促すよう言ったのは北の魔女バルブレロ・アネッサ

「リーナ姉さんが殺らないのなら・・・私が殺す」

最後の声に誰もが耳を疑った
5人の魔女のうち、まだ年若い魔女

未だ俗世に出たことは無かった

初めて現れて出した第一声が、生死を断つ内容であることにこの王
がどれ程愚かなのか・・・と、誰しもが感じ取った

傳いているため、容姿は分からないが
歴代の魔女は皆美しかった

きっと彼女も美しいに違いないだろうと推測する

「どつする？」

そう言ったのは西の魔女コークス・ユシユカだろうと思われる声

——顔を上げなさい……と魔女の誰かが言った
問いかけられたのは自分達だった

恐る恐る前を見れば

王を囲む、神が作り出したと言っても過言ではない

美しい魔女が覇気を纏ってそこに存在していた

王の正面に

紅の髪、焰と銀を合わせた瞳を持つ南の魔女

黒の髪、漆黒と銀を合わせた瞳を持つ北の魔女

藍の髪、碧と銀を合わせた瞳を持つ東の魔女

赤銅の髪、琥珀と銀を合わせた瞳を持つ西の魔女

そして……

まだ若いが、その風格はこの世界を支えるに足りる力を纏った少女

銀の髪、蒼と銀を合わせた瞳を持つ中央の魔女

これが純潔の魔女

城に居る混血の魔女とは格が違う

圧巻だった

誰も口を開ける状況ではなかった

しかし、魔女は自分たちに問うている
口を噤んでいる方が万事に値する

このような王

そう思っているのが多数

だが今は世継ぎが居ない
存亡の為にはいち早く王の血を引く人間が必要だ

「恐れながら……王は、我らが王には世継ぎが存在致しませぬ
故……」

臣下と思われる男が消えるような声で発した

「だから、今は殺すべきではないと？」

かぶせる様に西の魔女は笑って言った
はい．．．小さく小さく男は頭を垂れた^{luck}

王はその発言に歪んだ表情で笑っていた
誰も触れない

「世継ぎを待つ。だが、馬鹿を野放しには出来ぬ．．．監視を置くぞ」

「では、私がその監視役を務めましょうアネッサ姉さん」

中央の魔女が名乗りを上げた

ここ帝国は中央の魔女が一番支えとなっている

だからだろう．．．自分の支える国の王を監視する

少女は薄汚れたものを見るような目で王を睨んだ

「しっかり見ていなさい」

ええ、と笑って答える少女は花が咲いたような笑顔だった

半年後、世継ぎをと進言した臣下は宰相となった
そしてさらに半年後・・・1625年

帝国は過ちを犯す

絶望（後書き）

長くなりました。ええ・・・

この後監視をしていたミアンが——となるわけです。

おいおい出てきますから

長い目で見てください。

それにしても、いつの間にかお気に入り件数1200件＼（　〇　）
／！

本当にありがとうございます

まだまだ続きますが飽きないで読んでやってください。
ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n81111/>

陛下の専属様

2011年9月25日10時16分発行